大阪府埋蔵文化財調査報告2010－5

府　中　遺　跡

－都市計画道路和泉中央線整備事業に伴う発掘調査－

大阪府教育委員会

府　中　遺　跡

ー都市計画道路和泉中央線整備事業に伴う発掘調査ー

大阪府教育委員会

１・２区全景（東南から）

１区出土縄文土器

巻頭図版２

０３０１７調査

０５０２７調査

０２０２０調査

方形周溝墓群（東南から）

方形周溝墓出土弥生土器

巻頭図版４　０２０２０調査

１・２区全景（西南から）

０３０１７調査

上６区・下１区全景　右は和泉市調査地（北西から）

序　　文

大阪府の南西部は今日でも泉州と呼ばれていますが、これは、和泉市府中町にある「和泉の井」、「国府の清水」と呼ばれた湧き水に由来するといわれ、江戸時代まで灌漑用水として利用されてきました。奈良時代の天平宝字元年に河内国から分かれて和泉国が設置された時、この「清水」を中心に国府が造られたと考えられています。

この国府推定地を含む府中遺跡では数多くの調査が行われ、国庁跡はまだ見つかっていませんが、縄文時代からの各時代の遺構や遺物が出土する遺跡として知られてきました。

今回、遺跡の南部を通る都市計画道路和泉中央線を拡幅整備することとなり、平成14年度から発掘調査を実施してきました。その結果、縄文時代中期の土器や弥生時代の方形周溝墓など、多数の遺構・遺物が検出されました。特にこの地域では出土例が少なかった縄文土器が纏まって出土しており、当地域の歴史を解明していく上で貴重な資料となると確信しております。

最後になりましたが、今回の調査の実施にあたっては、地元住民の方々をはじめ、大阪府都市整備部、和泉市教育委員会等、関係各位のご理解とご指導を賜りました。厚く感謝いたしますとともに、今後とも本府ば取り組んでおります文化財保護行政により一層のご理解、ご協力をお願い申し上げます。

平成22年10月

大阪府教育委員会事務局
文化財保護課長　野口　雅昭

例　　言

1．本書は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部の依頼を受けて実施した、都市計画道路和泉中央線整備事業に伴う府中遺跡、豊中遺跡、板原遺跡の発掘調査のうち、平成14年から平成18年度に実施した府中遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、文化財保護課調査第二グループの課長補佐高島徹の指示のもと、平成14年が主査亀島重則、平成15年度が技師阿部幸一、平成17年度が主査藤沢真依、平成18年度が副主査関真一が担当した。遺物整理は平成14年度から21年度まで、調査管理グループ主査三宅正浩、副主査藤田道子が担当した。

3．本調査の調査番号は平成14年度が02020、平成15年度が03017、平成17年度が05027、平成18年度が06017である。

4．本調査の写真測量は、平成14年度が富士測量株式会社、平成15年度が株式会社サンヨー、平成17年度が富士測量株式会社、平成18年度が株式会社日建技術コンサルタントに委託した。

5．本書に掲載した遺物の写真撮影は有限会社阿南工房に委託した。

6．平成14年度は土壌の花粉分析を川崎地質株式会社に委託した。

7．調査で作製した記録資料と出土遺物は大阪府教育委員会が保管している。

8．発掘調査･遺物整理に当たっては和泉市教育委員会文化財振興課灰掛薫、白石耕治、乾哲也、千葉太朗氏や京都大学文学部泉拓良氏をはじめとする考古学研究室の方々などから協力、助言を得た。記して感謝いたします。

9．本書の編集は阿部幸一が担当し、執筆は各担当者のほか、第３章第３節縄文土器は京都大学大学院生河本純一氏、第３章第７節石器を調査第２グループ副主査土屋みづほが執筆した。

10．発掘調査･遺物整理並びに本書の作成に要した経費は大阪府都市整備部が負担した。

11．本報告書は300部作成し、１部あたりの印刷単価は1,793円である。

目　　次

序文
例言

本　文　目　次

第１章　調査の経過と方法 …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査区名と調査の方法について …… 4
第２章　立地と環境 …… 5
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 6
第３章　調査結果 …… 10
　第１節　基本層序 …… 10
　第２節　縄文時代の遺構と遺物 …… 15
　　縄文土器 …… 25
　第３節　弥生時代前期の遺構 …… 91
　第４節　弥生時代 …… 93
　第５節　弥生時代後期から古墳時代遺構と遺物 …… 123
　第６節　中近世の遺構 …… 132
　第７節　各地区出土の石器 …… 134
第４章　02020－１，２，３区の花粉分析 …… 139

第５章　まとめ …… 165
　　報告書抄録

挿　図　目　次

第 １図　調査区位置図 …… 3
第 ２図　府中遺跡・和泉国府跡での主な調査地点 …… 3
第 ３図　和泉地域の地質図（「泉大津市史より」転載） …… 5
第 ４図　府中遺跡周辺の主な遺跡 …… 7
第 ５図　06017－１区、02020－１・２区、03017－１～７区、05027調査区基本土層断面図（北側断面）（折り込み）… 11・12
第 ６図　02020－３区　SK20・21土層断面図 …… 16
第 ７図　02020－３区　縄文時代遺構平面図・断面図 …… 16
第 ８図　02020－３区　SK20～25平面図・断面図 …… 17
第 ９図　06017－１区　第３遺構面平面図 …… 18
第 10図　06017－１区　SK12、SK14、SK15（平面図S=1/50・断面図S=1/40） …… 19
第 11図　06017－１区　SK13断面図 …… 19
第 12図　06017－１区　第４遺構面平面図 …… 20
第 13図　06017－１区　SX10平面図・断面図 …… 21
第 14図　02020－４区　SK21平面図・断面図 …… 21
第 15図　06017－１区　SK30平面図・断面図 …… 22
第 16図　06017－１区　SU52平面図 …… 22
第 17図　06017－１区　SU51平面図（折り込み） …… 23・24
第 18図　05027区　出土縄文土器 …… 26
第 19図　02020－３区　出土縄文土器 …… 27
第 20図　06017－１区　12出土縄文土器 …… 29
第 21図　06017－１区　13出土縄文土器(1) …… 31
第 22図　06017－１区　13出土縄文土器(2) …… 32
第 23図　06017－１区　14出土縄文土器 …… 34
第 24図　02020－１、２区出土縄文土器 …… 36
第 25図　06017－１区　第６、７層出土縄文土器 …… 38
第 26図　06017－１区　第８層出土縄文土器 …… 41
第 27図　06017－１区　炭集積１(SX10)・北西部炭集積２出土縄文土器 …… 44
第 28図　06017－１区　30出土縄文土器 …… 45
第 29図　06017－１区　SU51 出土縄文土器(1) …… 47
第 30図　06017－１区　SU51 出土縄文土器(2) …… 48
第 31図　06017－１区　SU52 出土縄文土器 …… 49
第 32図　02020－４区　出土縄文土器 …… 51
第 33図　06017－１区　第8'層出土縄文土器(1) …… 54
第 34図　06017－１区　第8'層出土縄文土器(2) …… 55
第 35図　06017－１区　第8'層出土縄文土器(3) …… 58
第 36図　06017－１区　第8'層出土縄文土器(4) …… 59
第 37図　06017－１区　第8'層出土縄文土器(5) …… 61
第 38図　06017－１区　第９層出土縄文土器(1) …… 63
第 39図　06017－１区　第９層出土縄文土器(2) …… 64
第 40図　出土地点・層位不明分縄文土器 …… 67

第 41図　03017－7区　遺構平面図 …… 91
第 42図　03017－7区　NR11土層断面図 …… 92
第 43図　02020－2区　弥生時代前期の遺構（河川）平面図 …… 92
第 44図　SZ01～SZ06（S=1/500） …… 93
第 45図　SZ01、SZ02（S=1/200） …… 94
第 46図　SZ01－ST01平・断面図（S=1/20） …… 94
第 47図　SZ01西北溝出土遺物１（S=1/4） …… 95
第 48図　SZ01西北溝出土遺物２（S=1/4） …… 96
第 49図　SZ01東北溝出土遺物１（S=1/4） …… 97
第 50図　SZ01東北溝出土遺物２（S=1/4） …… 98
第 51図　SZ01東北溝遺物出土状況（1/20） …… 98
第 52図　SZ01東南溝・SZ02西北溝遺物出土状況１（S=1/20） …… 99
第 53図　SZ01東南溝・SZ02西北溝遺物出土状況２（S=1/20） …… 99
第 54図　SZ01東南溝・SZ02西南溝遺物出土状況（S=1/20） …… 100
第 55図　SZ01東南溝・SZ02西北溝出土遺物（S=1/4） …… 101
第 56図　SZ02東北溝遺物出土状況（S=1/20） …… 104
第 57図　SZ02－ST02平・断面図（S=1/20） …… 105
第 58図　SZ02東北溝出土遺物（S=1/4） …… 106
第 59図　SZ02東南溝・SZ03西北溝出土遺物（S=1/4） …… 107
第 60図　SZ02西南溝出土遺物（S=1/4） …… 108
第 61図　SZ03、SZ04、SZ05、SZ06（S=1/200） …… 109
第 62図　SZ03西北溝遺物出土状況（S=1/20） …… 110
第 63図　SZ04西北溝遺物出土状況（S=1/20） …… 110
第 64図　SZ03西北溝出土遺物（S=1/4） …… 111
第 65図　SZ03・04東南溝、SZ05西北溝遺物出土状況（S=1/40） …… 112
第 66図　SZ03・04東南溝、SZ05西北溝出土遺物１（S=1/4） …… 113
第 67図　SZ03・04東南溝、SZ05西北溝出土遺物２（S=1/4） …… 114
第 68図　SZ03・04東南溝、SZ05西北溝出土遺物３（S=1/4） …… 115
第 69図　SZ06東南溝遺物出土状況（S=1/20） …… 118
第 70図　SZ05、SZ06、02020調査－１・２・３区、03017調査出土遺物（S=1/4） …… 119
第 71図　周溝埋土断面（S=1/4） …… 120
第 72図　02020調査、03017調査、05027調査　遺構平面図、航空写真（S=1/750）（折り込み） …… 121・122
第 73図　06017－1区　古墳時代の遺構平面図 …… 123
第 74図　06017－1区　SD06、SD07平面図・断面図 …… 124
第 75図　06017－1区　砂礫層出土土器実測図 …… 124
第 76図　02020－1区　弥生時代後期から古墳時代の遺構平面図 …… 125
第 77図　02020－1区　弥生時代後期から古墳時代の遺構平面図・断面図 …… 126
第 78図　02020－2区　弥生時代後期から古墳時代の遺構平面図 …… 127
第 79図　02020－2区　SK02、SK08、SK30、SD07平面図・断面図 …… 128
第 80図　03017－2区　SD01、SD03　断面図 …… 128
第 81図　03017－1区　SK29平面図・断面図 …… 129
第 82図　03017－1～3区　平面図 …… 129
第 83図　03017－1区　SK29出土土器実測図 …… 130
第 84図　02020－3区　SD09、NR02断面図 …… 131
第 85図　06017－1区　SD01、SK02、SD03平面図（S=1/80）・断面図（S=1/50） …… 132
第 86図　06017－1区　SK04平面図・断面図 …… 133
第 87図　06017－1区　SK36平面図・断面図 …… 133
第 88図　03017－7区　SK13、SK14平面図・断面図 …… 133
第 89図　出土石器実測図１ …… 135
第 90図　出土石器実測図２ …… 136
第 91図　調査区の配置および試料採取地点 …… 140
第 92図　02020－1区北壁断面図および採取位置 …… 140
第 93図　02020－2区北壁断面図および採取位置 …… 141
第 94図　02020－3区南壁⑴　断面図および採取位置 …… 141
第 95図　02020－3区南壁⑵　断面図および採取位置 …… 141
第 96図　02020－3区南壁⑶　断面図および採取位置 …… 141
第 97図　花粉分析処理フロー …… 143
第 98図　イネ科花粉の粒径比較（中村、1974） …… 145
第 99図　02020－1区北壁の花粉ダイアグラム（折り込み） …… 147・148
第100図　02020－2区北壁の花粉ダイアグラム（折り込み） …… 149・150
第101図　02020－3区南壁（1，3）の花粉ダイアグラム …… 152
第102図　02020－3区南壁⑵の花粉ダイアグラム …… 154
第103図　02020調査　花粉化石写真 …… 161
第104図　02020調査　花粉化石検出状況写真 …… 163

表　目　次

表１　府中遺跡・和泉国府跡・和泉寺跡発掘調査報告等一覧 …… 2
表２　都市計画道路泉中央線関係発掘調査一覧 …… 3
表３　縄文土器観察表（１～23） …… 68～90
表４　石器観察表 …… 138
表５　分析試料数量表 …… 140
表６　検出花粉化石の種類一覧表 …… 144
表７　02020－１区北壁の花粉化石組成表 …… 146
表８　02020－２区北壁の花粉化石組成表 …… 151
表９　02020－３区南壁(1，3)の花粉化石組成表 …… 153
表10　02020－３区南壁(2)の花粉化石組成表 …… 153
表11　02020－１区北壁検出花粉化石数量表 …… 158
表12　02020－２区北壁検出花粉化石数量表 …… 159
表13　02020－３区南壁(1，3)検出花粉化石数量表 …… 160
表14　02020－１区南壁(2)の検出花粉化石数量表 …… 160

図　版　目　次

巻頭図版１　06017調査　上　１・２区全景（東南から）
　下　１区出土縄文土器
巻頭図版２　03017調査・05027調査・02020調査　方形周溝墓群（東南から）
巻頭図版３　02020調査　方形周溝墓出土弥生土器
巻頭図版４　02020調査　上　１・２区全景（西南から）
　03017調査　下　上６区・下１区全景　右は和泉市調査地（北西から）

図版１　06017調査　１区　縄文時代中期末遺構面　上　全景（西北から）
　１区　中・近世遺構面　下　SK02（西北から）
図版２　06017調査　１区　中・近世遺構面　上　SP04（西から）
　１区　古墳時代遺構面　下　SD07（東南から）
図版３　06017調査　１区　縄文時代中期末遺構面　上　SD13（北から）
　下　SU10検出状況（南から）
図版４　06017調査　１区　縄文時代中期末遺構面　上　SU10（東南から）
　下　SU10（東南から）
図版５　06017調査　１区　縄文時代中期末遺構面　上　北西部炭集積（西南から）
　下　北西部炭集積（東北から）
図版６　06017調査　１区　縄文時代中期末遺構面　上　SK30（西南から）
　下　SU52（南から）
図版７　06017調査　１区　縄文時代中期末遺構面　上　SU51全景（西から）
　下　SU51出土縄文土器（西から）
図版８　03017調査　７区　弥生時代中期　上　SZ01西北周溝遺物出土状況（西北から）
　下　SZ01西北周溝遺物出土状況（西北から）
図版９　05027調査　弥生時代中期　上　SZ01・02周溝遺物出土状況（東南から）
　下　SZ01・02周溝完掘状況（東南から）
図版10　05027調査　弥生時代中期　上　SZ01西北周溝遺物出土状況（東南から）
　下　SZ01東北周溝遺物出土状況（西南から）
図版11　05027調査　弥生時代中期　上　SZ01東南周溝･SZ02西北周溝南半部遺物出土状況(東北から)
　下　SZ01東南周溝･SZ02西北周溝北半部遺物出土状況(東北から)
図版12　05027調査　弥生時代中期　上　SZ02東北周溝内遺物出土状況（西南から）
　下　SZ02東北周溝隅部遺物出土状況（西南から）
図版13　02020調査　３区　弥生時代中期　上　全景（東南から）
　下　SZ02東南周溝・SZ03・04西北周溝（東北から）
図版14　02020調査　３区　弥生時代中期　上　SZ02東南周溝･SZ03･04西北周溝遺物出土状況（西南から）
　下　SZ03・04東南周溝・SZ05西北周溝（南から）
図版15　02020調査　３区　弥生時代中期　上　SZ03･04東南周溝･SZ05西北周溝遺物出土状況（西南から）
　下　SZ03・04東南周溝・SZ05西北周溝遺物出土状況（北から）
図版16　02020調査　３区　弥生時代中期　上　SZ03・04東南周溝・SZ05北西周溝遺物出土状況（南から）
　下　SZ03・04東南周溝・SZ05西北周溝遺物出土状況（西から）
図版17　02020調査　３区　弥生時代中期　上　SZ03・04・05・06（南から）
　３区　縄文時代晩期　下　SD21（南西から）
図版18　02020調査　１区　縄文時代晩期　上　NR01西肩部（東北から）
　４区　古墳時代　下　全景（東北から）
図版19　03017調査　１区　古墳時代前期　上　SK29（西北から）
　１区　弥生時代前期　下　NR11（西北から）
図版20　03017調査　１区　古墳時代　上　全景（東南から）
　２区　下　SD01・03（東から）
図版21　03017調査　７区　弥生時代中期　上　全景（北西から）
　下　全景（西から）

図版22　縄文土器01
図版23　縄文土器02
図版24　縄文土器03
図版25　縄文土器04
図版26　縄文土器05
図版27　縄文土器06
図版28　縄文土器07
図版29　縄文土器08
図版30　縄文土器09
図版31　縄文土器10
図版32　縄文土器11
図版33　縄文土器12
図版34　縄文土器13
図版35　縄文土器14
図版36　縄文土器15
図版37　縄文土器16
図版38　縄文土器17
図版39　縄文土器18
図版40　縄文時代19（焼土）
図版41　弥生土器01　05027調査　SZ01西北溝出土遺物
図版42　弥生土器02　05027調査　SZ01西北溝（1009・1010）、SZ01東北溝（1011・1013～1015）出土遺物
図版43　弥生土器03　05027調査　SZ01東北溝出土遺物
図版44　弥生土器04　05027調査　SZ01東南溝・SZ02西北溝出土遺物
図版45　弥生土器05　05027調査　SZ01東北溝（1030・1031・1033・1034）、SZ02西北溝（1038）、SZ02西南溝（1037）出土遺物
図版46　弥生土器06　02020調査　SZ02東南溝・SZ03西北溝出土遺物
図版47　弥生土器07　02020調査　SZ03東南溝・SZ05西北溝出土遺物
図版48　弥生土器08　02020調査　SZ03東南溝・SZ05西北溝出土遺物
図版49　弥生土器09　02020調査　SZ03東南溝・SZ05西北溝出土遺物
図版50　弥生土器10　02020調査　SZ03西北溝（1061・1062）、SZ04東南溝（1063）SZ06東南溝（1064・1065）出土遺物
図版51　弥生土器11　02020・03017調査　02020－１区～３区（1068・1070～1072）、03017調査出土遺物
図版52　弥生土器12　03017調査　SK29出土遺物
図版53　石器１
図版54　石器２

付　図

付図１　06017調査－１区、02020調査－１・２・４区平面図
付図２　03017調査－１～７区平面図
付図３　03017調査－７区、05027調査区、02020調査－３区平面図（S=1/100）

第１章　調査の経過と方法

第１節　調査に至る経過

府中遺跡一帯は、元々、和泉国府跡として知られていた地域である。今回報告する調査地の北東約500mにある泉井上神社付近がその中心と推定されており、国府跡の発掘調査は昭和40年にまで遡る。その後、国府跡推定地の周辺にも遺跡の広がることが確認され、府中遺跡として周知されることとなった。

府中遺跡の発掘調査は昭和50年以来、和泉市教育委員会によって連年続けられ、昭和55年には方５町の国衙復元案も提示されている。このような中で、昭和59年、大阪府教育委員会は、和泉市役所北交差点から東側の府中遺跡の一部及び和泉国府推定範囲の隣接地で、都市計画道路和泉中央線拡幅工事が予定されていることを知り、現地踏査を行った。その結果、当該地に濃密な遺物の散布が認められた。このため、府土木部（現都市整備部）に対し工事着手前に事前の発掘調査が必要である旨申し入れ、発掘調査実施のための協議に入った。協議の結果、直ちに発掘調査に入ることとなり、同年11月５日から北側の工事予定地約2,400㎡の調査を行った。昭和61年には南側約300㎡についての発掘調査も実施し、和泉市役所北交差点以東の調査は終了した。この時の調査結果は、『府中遺跡発掘調査概要』・『府中遺跡発掘調査概要Ⅱ』として報告されている。

都市計画道路和泉中央線整備事業に伴う発掘調査が協議の俎上に上ってきたのは、上記の調査後14年を経た平成12年のことである。和泉市役所北交差点から国道26号線までの延長約630mについて道路を拡幅し、ＪＲ阪和線と立体交差化するもので、阪和線以西では豊中遺跡、板原遺跡が事業予定地内に含まれていた。立体交差のために現道部の切り下げを行う大規模な工事であり、遺跡の状況を把握するため、試掘・確認調査を行うこととした。平成13年７月に実施した試掘・確認調査は、市街地のため、小規模なものに止まったが、遺構・遺物の存在が確認され、事業予定地全域について事前の発掘調査が必要であると判断された。

試掘・確認調査の結果を受けた本発掘調査は、平成14年度から22年度まで毎年行われた。市街地の交通量が多い主要道路を切り替えながら整備するという事業内容のため、発掘調査は工事予定箇所ごとに対応するしかなく、年度ごとに場所が大きく離れていたり、細切れになったりという調査となった。各年度ごとの調査箇所、面積、期間、担当者等は表の通りである。

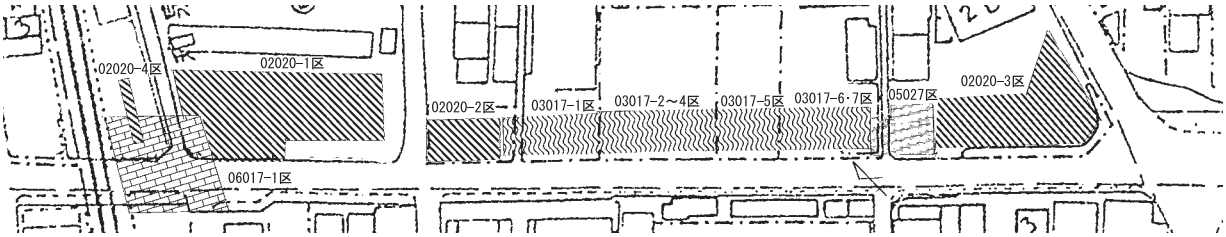
調査が９年という長期間にわたり、担当者も多数に上る。今回の報告は、14，15，17，18年度に実施した府中遺跡について行うもので、府中遺跡の19年度以降分及び豊中遺跡、板原遺跡の調査報告は、今後継続して行う予定である。

表１　府中遺跡・和泉国府跡・和泉寺跡発掘調査報告等一覧

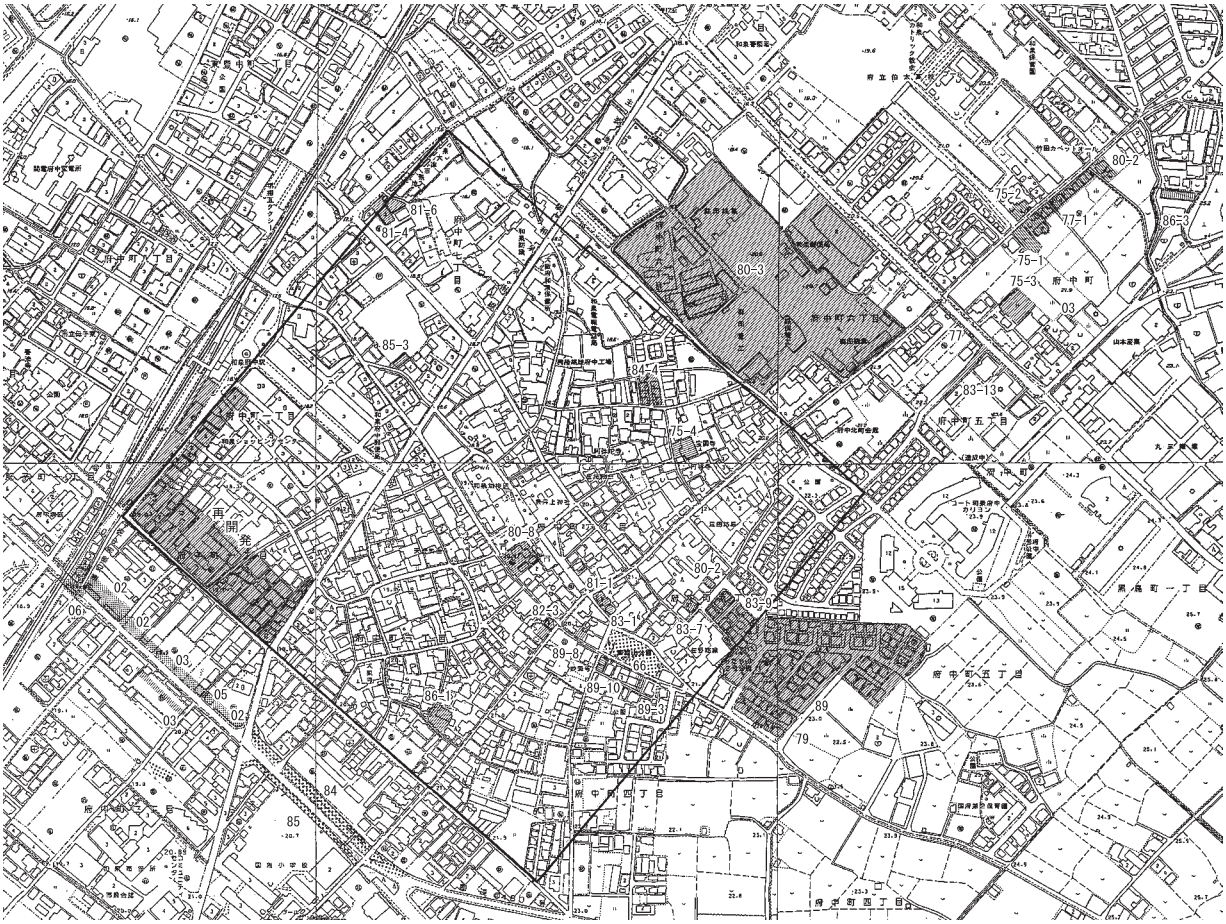
執筆者	書　名	発行所	発行年	調査名称等
藤澤一夫・谷本武・堀江門也	和泉国府跡発掘調査概要	大阪府教育委員会	1966	
灰掛薫・吉川和則	府中遺跡発掘調査概要	和泉市教育委員会	1976.3	
灰掛薫・吉川和則	府中遺跡発掘調査概要・Ⅱ	和泉市教育委員会	1978.3	
灰掛薫・野田芳正	府中遺跡発掘調査概要・Ⅲ	和泉市教育委員会	1980.3	
灰掛薫・野田芳正	府中遺跡発掘調査概要・Ⅳ	和泉市教育委員会	1980.3	国衙方５町復元案掲載
灰掛薫	府中遺跡群発掘調査概要	和泉市教育委員会	1981.3	府中遺跡（武田地区），（木下地区）
灰掛薫・佐藤正則・白石耕治	府中遺跡群発掘調査概要Ⅱ	和泉市教育委員会	1982.3	府中遺跡81-4, 81-6
灰掛薫	府中遺跡群発掘調査概要Ⅲ	和泉市教育委員会	1983.3	府中遺跡81-6, 和泉寺跡82-1
灰掛薫	府中遺跡群発掘調査概要Ⅳ	和泉市教育委員会	1984.3	府中遺跡83-1
高島徹・松村隆文	府中遺跡発掘調査概要	大阪府教育委員会	1985.3	都市計画道路和泉中央線整備事業
灰掛薫・森茂	府中遺跡群発掘調査概要・Ⅴ	和泉市教育委員会	1985.3	府中遺跡84-4
灰掛薫・森茂	府中遺跡群発掘調査概要・Ⅵ	和泉市教育委員会	1986.3	和泉国府跡84-5, 85-3
藤澤眞依	府中遺跡発掘調査概要・Ⅱ	大阪府教育委員会	1987.3	都市計画道路和泉中央線整備事業
灰掛薫	府中遺跡群発掘調査概要・Ⅶ	和泉市教育委員会	1987.3	府中遺跡86-3, 和泉国府跡86-1
灰掛薫	府中遺跡群発掘調査概要・Ⅷ	和泉市教育委員会	1988.3	府中遺跡87-2, 和泉国府跡87-1. 87-11
灰掛薫	府中遺跡群発掘調査概要・Ⅸ	和泉市教育委員会	1989.3	府中遺跡88-3, 88-5, 和泉国府跡88-2
灰掛薫	府中遺跡群発掘調査概要・Ⅹ	和泉市教育委員会	1990.3	府中遺跡86-3, 和泉国府跡86-1
灰掛薫	和泉市埋蔵文化財発掘調査概報１	和泉市教育委員会	1991.3	和泉国府跡89-13, 90-5
灰掛薫	和泉市埋蔵文化財発掘調査概報２	和泉市教育委員会	1992.3	府中遺跡90-6, 和泉国府跡90-7
灰掛薫	和泉市埋蔵文化財発掘調査概報３	和泉市教育委員会	1993.3	府中遺跡92-3, 和泉国府跡92-4
灰掛薫	和泉市埋蔵文化財発掘調査概報５	和泉市教育委員会	1995.3	府中遺跡92-10, 94-1, 和泉国府跡93-1, -2, -6
白石耕治・森茂	和泉市埋蔵文化財発掘調査概報８	和泉市教育委員会	1998.3	和泉国府跡（府中遺跡）96-4
白石耕治・森茂	和泉市埋蔵文化財発掘調査概報９	和泉市教育委員会	1999.3	和泉国府跡（府中遺跡）98-7, -8
白石耕治・乾哲也	和泉市埋蔵文化財発掘調査概報12	和泉市教育委員会	2002.3	府中遺跡00-4
乾哲也	府中遺跡　01-116 地点の発掘調査	和泉市教育委員会	2002.5	府中遺跡01-116
亀島重則	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報６	大阪府教育委員会	2003.3	府教委01012
乾哲也	府中遺跡　03-095 地点の調査	和泉市教育委員会	2003.11	府中遺跡03-095
亀島重則	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報７	大阪府教育委員会	2004.3	府教委02020
阿部幸一	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報８	大阪府教育委員会	2005.3	府教委03017
山田隆一	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報８	大阪府教育委員会	2005.3	府教委03048
和泉市教育委員会	発掘ニュースレター Vol.１	和泉市教育委員会	2005.6	和泉府中駅東側再開発に伴う発掘調査
和泉市教育委員会	発掘ニュースレター Vol.２	和泉市教育委員会	2006.1	和泉府中駅東側再開発に伴う 第２次発掘調査
藤澤眞依	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報10	大阪府教育委員会	2006.9	府教委05027
和泉市教育委員会	発掘ニュースレター Vol.３	和泉市教育委員会	2007.3	和泉府中駅東側再開発に伴う 第３次・第４次発掘調査
土江文子・横田明日香	府中遺跡　04-061 地点の発掘調査	和泉市教育委員会	2007.3	府中遺跡04-061
関真一	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報11	大阪府教育委員会	2007.11	府教委06017

表２　都市計画道路和泉中央線関係発掘調査一覧

	調査番号	調査地	現地調査期間	調査面積(㎡)	概要報告等	刊行年	備　考
	－	府中町3丁目	昭和59年11月５日～60年３月31日	2,415	府中遺跡発掘調査概要	1985.３	
	－	府中町3丁目	昭和61年10月１日～62年３月31日	300	府中遺跡発掘調査概要･Ⅱ	1987.３	
1	01012	府中町1丁目･肥子町	平成13年７月９日	27	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報6	2003.３	試掘･確認調査
2	02020	府中町1丁目	平成14年７月15日～15年２月15日	1,748	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報7	2004.３	
3	03017	府中町1丁目	平成15年６月13日～15年11月28日	876	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報8	2005.３	
4	03020	肥子町	平成15年７月14日～16年３月15日	1,015	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報8	2005.３	
5	04017	肥子町	平成16年６月10日～17年３月31日	1,226	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報9	2005.11	
6	05027	府中町1丁目	平成17年７月14日～17年９月16日	165	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報10	2006.９	
7	05037	肥子町	平成17年８月24日～17年10月12日	140	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報10	2006.９	
8	06017	府中町1丁目･肥子町	平成18年11月１日～19年３月23日	960	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報11	2007.11	
9	07001	府中町1丁目･肥子町	平成19年４月９日～20年３月10日	800	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報12	2008.11	
10	08002	府中町1丁目･肥子町	平成20年４月３日～21年２月28日	2,000	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報13	2009.11	
11	09004	府中町1丁目･肥子町	平成21年５月20日～21年９月30日	850	大阪府教育委員会文化財調査事務所年報14	2010.11	刊行予定



第１図　調査区位置図



第２図　府中遺跡・和泉国府跡での主な調査地点

第２節　調査区名と調査の方法について

発掘調査地は和泉府中駅から約250m南側で、拡幅を計画している道路沿いに事業所や店舗、民家が軒を並べていた。平成13年（2001年）に試掘調査の結果、工事予定地全域で発掘調査が必要であると判断されたことから、都市整備部と協議し、用地が確保された所、工事工程の関係で優先度の高い場所から順に実施することとなった。 このため調査は年度毎に数ヵ所に分散して実施した年と一ヵ所に纏まって実施できた年がある。

調査区名について

調査区の表示は、各担当者が年度ごとに１区から順に付与した。その番号を踏襲し、各年度の調査番号と調査区を組み合わせて、02020－１区、03017－７区のように表示したが、05年度は１ヵ所のみであり 05027調査、または、05027区と記している。

遺構番号について

遺構番号は、調査担当者が各調査区毎に遺構面や遺構の種類にかかわらず１から順に通し番号を与えているので、極力この番号を踏襲した。しかし、一部で同じ番号を付けた遺構があり、編集段階で新たな番号を付したが、本書で記載しなかった遺構もあるので、重複を避けるため遺構番号に飛び番号や欠番が生じている。

遺構記号は平城宮跡で使用され、その後、平成22年に纏められた「発掘調査のてびき」（文化庁文化財記念物課発行）で紹介されている遺構記号に準拠した。

本書で使用した遺構記号は

SD（溝）、SE（井戸）、SK（土坑、貯蔵穴）、SP（ピット、柱穴）、ST（墓、埋葬施設、周溝墓の主体部）、SU（遺物集積）、SX（その他で、本書では屋外炉〈火処〉に使用）、SZ（方形周溝墓）、NR（河川）などである。

遺構番号は前に遺構記号を付け、SD01、SK02、SP13のように、前に遺構略称を付けた。方形周溝墓はSZ01のように二桁番号を使用し、その周溝はSZ01北西溝などと記している。

本文で複数の調査区に渡って記述しているものは、02020－１区SD １のように調査番号―調査区―遺構番号の順で示したが、見出し（02020－３区など）に調査区名を掲示したものについては、本文中に遺構記号と番号だけを記したものがある。

測量と地区割り

今回報告する調査区では測量受託者が基準点とトラバース測量により国土座標の５m交点毎に測量杭を配置し、空中写真測量を実施したが、複数面で遺構を確認した調査区では1/20 や1/10で実測図を作成した。 使用したのは国土座標第Ⅵ系（基点は東経135°、北緯35°）である。

高さは、東京湾標準高度 T.P.（Tokyo Peil）で表したが、調査地はT.P.＋16 ～＋19mの範囲内にあるので、「＋」は省略した所がある。

第２章　立地と環境

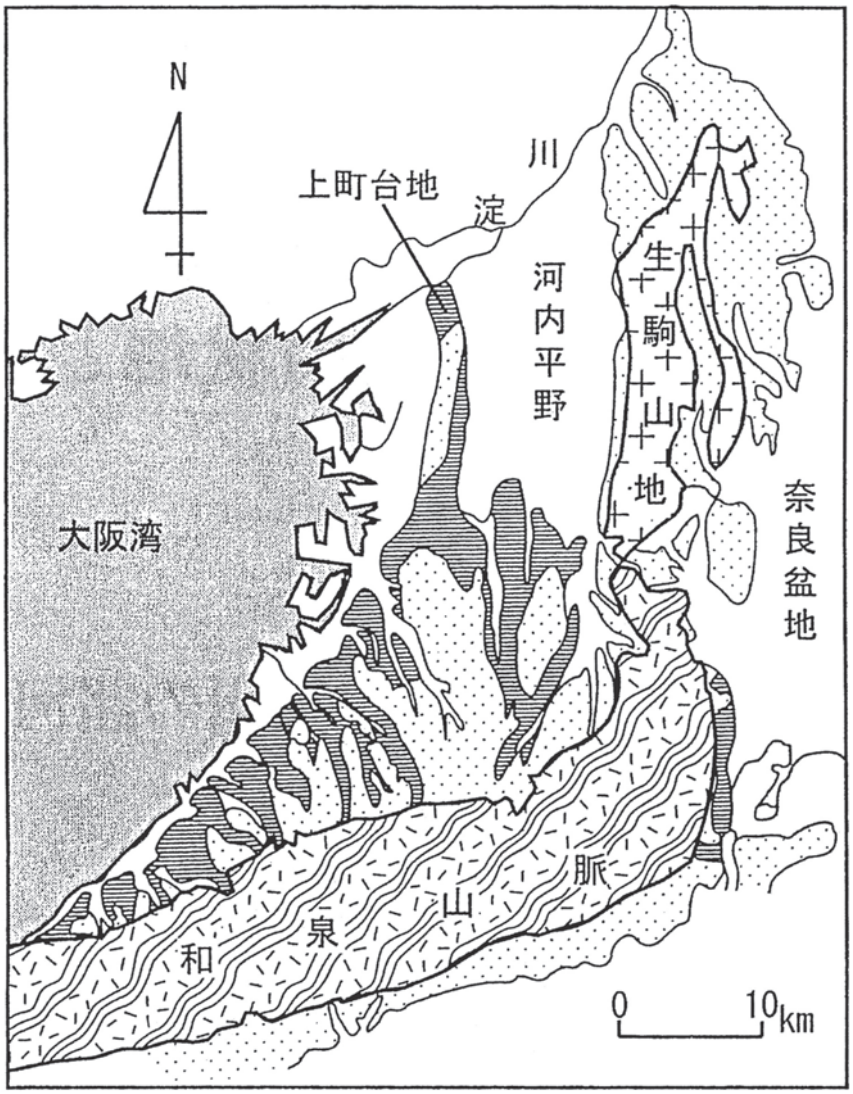
第１節　地理的環境

和泉地域は、標高886mの三国山を最高峰とする和泉山脈が、858mの和泉葛城山、625mの高城山と北東から高度を下げながら南西に連なり、大阪府と和歌山県を分ける行政界となっている。この山脈は白亜紀（6500万～14500万年前）頃に礫岩や砂岩、泥岩等が交互に堆積して形成された堆積岩からなる和泉層群と呼ばれる地層からなり、大阪府側は標高200～300mの山々からなる前山を造り出している。前山の大阪湾側は標高50～60mの丘陵地帯で、鮮新統から更新統（500万～１万年前）に堆積した大阪層群と呼ばれる粘土や砂礫が交互の堆積した地層で構成されており、槙尾川や父鬼川など、和泉山脈に源流を持つ河川が小谷を刻んでいる。

府中遺跡が所在する地域は、標高30m付近を頂部とする低位段丘面で、槙尾川や牛滝川などの河川が形成した扇状地が段丘化したもので、和泉山脈や信太山丘陵を供給源とする砂岩や泥岩で形成されている。

低位段丘面の前面にある沖積平野の発達は弱く、槙尾川や男里川の河口部にみられる程度である。

海岸平野の前面には上町台地の基部から加太まで約50㎞の海岸線に沿って狭い砂堆面が形成されていたが、浜寺や二色浜に代表される砂浜は、昭和30年代後半からの沿岸部開発で埋め立てられ、大阪湾沿岸で自然の砂浜が残るのは数％といわれている。



山地・丘陵　段丘層　大阪層群　沖積層

第３図　和泉地域の地質図（「泉大津市史」より転載）

第２節　歴史的環境

府中遺跡が立地する標高40 ～ 10mまでの中位～低位段丘面は、海岸線に向かってなだらかに傾斜している。和泉山脈やその前庭部の山丘部を源流とする河川は、現代では流路を固定され、段丘を深く浸食しているが、元々は段丘面を縦横に流れて大阪湾に注いでおり、その河川沿いや伏流水が噴出するような所に多くの集落が立地している。

和泉市内で旧石器時代の遺跡は少なく、石津川流域にある野々井遺跡で国府型より古い要素を持つルヴァロア型石核が出土しているほか、和泉市の観音寺山遺跡、大床（父鬼）遺跡、高石市の大園遺跡や岸和田市の山直北遺跡、遺跡ではないが和泉葛城山山頂付近でも国府型ナイフが採集されている。

旧石器時代末から縄文時代早期にかけてのものとしては、土器を伴っていないが、大園遺跡で12点の有舌尖頭器が出土しているほか、10ヵ所以上で有舌尖頭器の出土が報告されている。なかでも野々井遺跡ではチャート製のものが出土しており、サヌカイト製以外の石器使用として注目される。

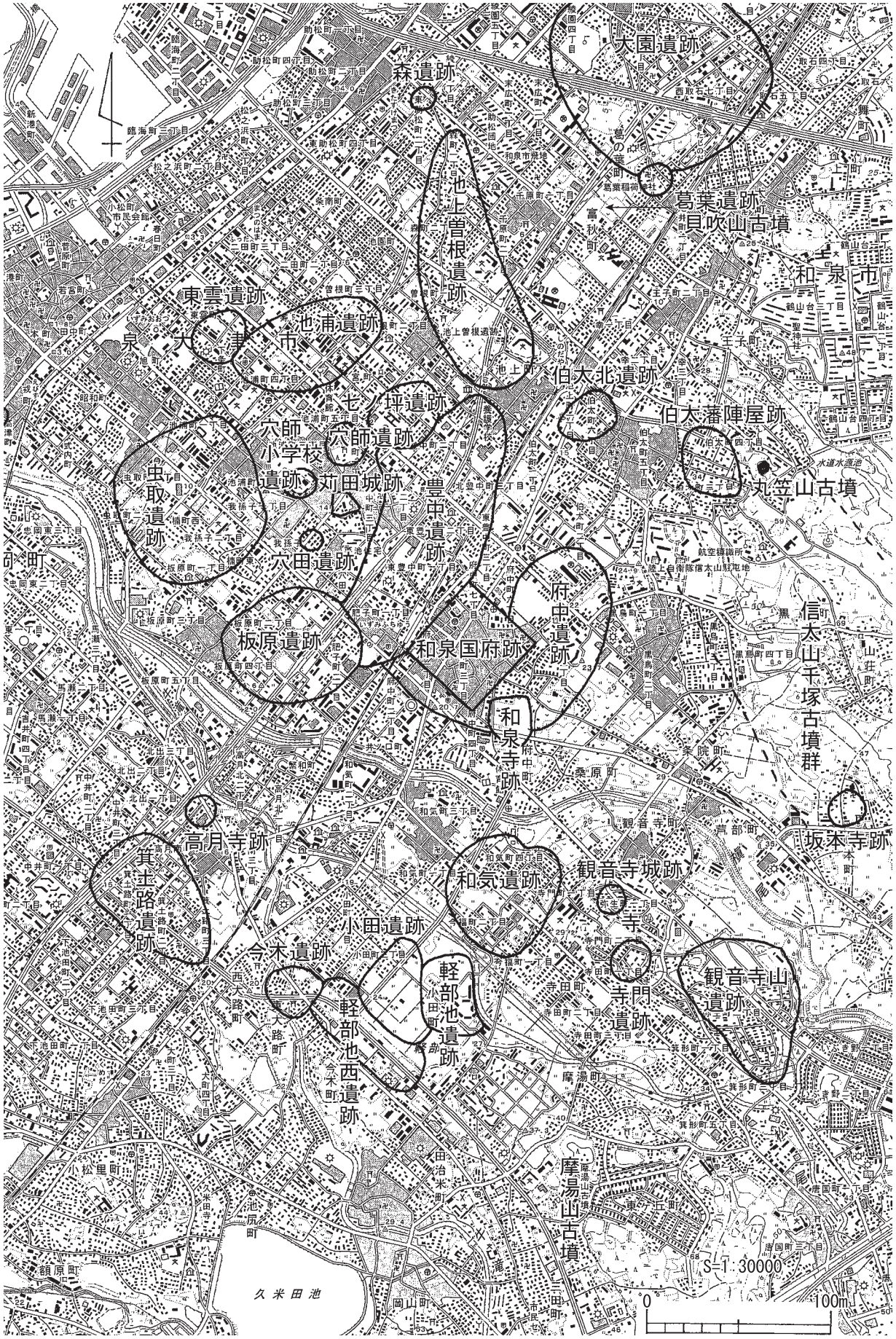
縄文時代早期として、和泉市域では府中遺跡と同じ槇尾川水系の低位段丘面上に立地する池田寺遺跡で押形文土器、山間部に近い中位段丘山上に立地する仏並遺跡でも条痕調整を施す早期末から前期初めに位置づけられる土器が出土している。堺市域でも小阪遺跡、太平寺遺跡で土器が出土している。

縄文時代前期では、北白川下層式の土器が太平寺遺跡や小阪遺跡、大歳山式土器が平井遺跡、小阪遺跡などで出土している。

このように、和泉地域では縄文時代早期から前期の遺物が出土する遺跡は少ないが、中期以降、遺物が出土する遺跡は増加する。泉州北部では、平井遺跡、小阪遺跡、太平寺遺跡で引き続き中期の土器が出土している。泉州中央部の府中遺跡や隣接する板原遺跡、豊中遺跡で中期の土器が出土しているほか、春木川河口近くの砂州上に立地する春木八幡山遺跡は中期から晩期までの土器が出土しており和泉地域の縄文遺跡として著名である。また槇尾川水系の牛滝川沿いに立地する箕土路遺跡では鷹鳥式土器、和泉葛城山山頂部でも船元式土器が出土している。

中期末以降、土器を出土する遺跡は急激に増加する。府中遺跡では中期末に位置づけられる北白川Ｃ式土器が多数出土しているほか、後期や晩期の土器が出土しており、遺物の状況から集落が継続して営まれたと考えられる。また、槇尾川流域の池田寺遺跡や万町北遺跡、牛滝川流域の軽部池西遺跡、小田遺跡、山ノ内遺跡、山直中遺跡などで後期の土器が出土している。先に挙げた仏並遺跡では中期末から後期にかけて５棟の竪穴住居跡や土坑などの遺構と多数の土器と共に土製仮面が出土している。一方泉南地域でも向田遺跡や淡輪遺跡で竪穴住居跡が検出されているほか、泉州北部の四つ池遺跡でもこの時期の竪穴住居が出土している。

縄文時代晩期前半の土器が出土する遺跡は少ないが、府中遺跡でこの時期の土器を多量に含む河道が検出されている。晩期後半になると府中遺跡をはじめ、万町北遺跡、春木八幡山、四つ池



第４図　府中遺跡周辺の主な遺跡

遺跡、小阪遺跡、西浦橋遺跡、鈴の宮遺跡などで突帯文土器が出土している。また、大津川に流入する和田川流域の西浦橋遺跡では土坑墓群が検出されている。

弥生時代に入ると、堺市の四ッ池遺跡や泉佐野市の船岡山遺跡で縄文晩期の突帯文土器と弥生前期の土器が共伴する遺跡が見られる。本遺跡の西に位置する泉大津市の虫取遺跡や泉南市の男里遺跡では晩期の突帯文土器と前期後葉の土器が出土しているが、時期的な隔たりが大きく評価が難しい。池浦遺跡では前期中葉の土器や溝が確認されているが、中期には続かず、短期間で廃絶したと考えられている。この他にも、岸和田市の春木八幡山遺跡でも前期前半から中頃の土器が出土している。前期後葉後頃には池浦遺跡の直ぐ東に池上遺跡が立地し、南北250m、東西180mの環濠で囲まれた面積約30000㎡の集落を形成する。

中期にはいると、池上遺跡では、南北約310m、東西約250mの環濠が掘削され、面積約56000㎡の和泉地域中央部の拠点的な集落に発展し、後期後半まで盛行する。池上遺跡の周辺でも、中期には槇尾川下流の低湿地を開発して府中遺跡でも集落が成立し、数ヵ所で竪穴住居跡が検出されている。また、府中遺跡の近辺では虫取遺跡、槇尾川中流では和気遺跡、池田寺遺跡や万町北遺跡、軽部池遺跡、池田下遺跡、などで竪穴住居跡などの遺構が検出されている。一方、北の石津川流域の台地に立地するの四ッ池遺跡でも環濠が確認されている。

南の槇尾川の支流で南から北西流して大津川（槇尾川）に合流する松尾川や牛滝川流域では田治米遺跡や下池田遺跡、大町遺跡のほか、春木八幡山遺跡、栄の池遺跡、田治米菅原神社遺跡、箕土路遺跡、春木八幡山遺跡、軽部池西遺跡等で遺構や遺物が見つかっており、低位段丘面の小河川沿いに多数の集落が立地している。

弥生時代後期に入ると池上遺跡は衰退し、環濠は維持されなくなるが、槇尾川を見下ろす標高50 ～ 70mの丘陵上に観音寺遺跡や惣ヶ池遺跡などの高地性集落と呼ばれる村が形成される。一方、府中遺跡や万町北遺跡では後期の竪穴住居や方形周溝墓が検出されており、中期から継続して集落が営まれていた。

古墳時代では、前期に本遺跡の南西約３キロ、松尾川の支流である牛滝川を見下ろす久米田丘陵に築造された墳丘長約130mの前方後円墳である久米田貝吹山古墳、北東約4.5キロの信太山丘陵の西北端に墳丘長約94mの和泉黄金塚古墳や丸笠山古墳、牛滝川と松尾川に挟まれた東山丘陵の先端近くに墳丘長約200mの摩湯山古墳や墳長径約43mの方墳である馬子塚が築造される。なかでも和泉黄金塚古墳は３基の粘土槨が検出され、その１基から「景初三年」銘の神獣鏡が出土したことで著名である。

古墳時代中期以降は信太山丘陵には信太貝吹山古墳やカニヤ塚古墳、鍋塚古墳、玉塚古墳、狐塚古墳といった円墳や帆立貝形古墳屋80基以上の古墳からなる信太山古墳群が６世紀まで続いて築造される。一方、牛滝川左岸の久米田丘陵でも久米田古墳群として括られる風吹山古墳や無名塚古墳、光明塚古墳、長坂古墳など10数基の古墳が相次いで築造される。

集落に目を移すと、府中遺跡や北に接する豊中遺跡、板原遺跡、和気遺跡では弥生時代後期か

ら古墳時代を通じて集落が営まれる。本遺跡の北西に接する豊中遺跡では古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物、溝が検出されている。

槇尾川右岸の低位段丘末端部に立地する七ノ坪遺跡では古墳時代前期の竪穴住居や掘立柱建物、木棺墓や水田跡が検出されている。貝吹山古墳に近い大園遺跡は古墳時代中期の掘立柱建物のみで構成される集落として著名である。万町北遺跡では古墳時代の竪穴式住居90棟、掘立柱建物が約30棟見つかっており、槇尾川中流を支配した豪族の集落と考えられている。

奈良時代に入ると、霊亀２年（716）に和泉監が置かれ、大鳥、和泉、日根の３郡がこの配下にはいるが、天平２年（740）には再び河内国に統合される。その後、天平宝字元年（757）にあらためて和泉国が設置され、国府は国名の謂われとされる「和泉の清水」を祀る泉井上神社を含む和泉府中駅南東に置かれたと考えられている。

古代寺院は、国分寺建立の詔が発布された時期は河内国に含まれており、国分寺は建立されず、平安時代になって、和泉郡の安楽寺が国分寺に定められる。この他、和泉国で約30ヵ寺が知られているが、槇尾川流域では、茅渟県主が建立氏族と考えられる和泉寺跡、坂本臣の氏寺とされる坂本郷に所在する坂本寺跡、池田郷に所在し池田首が建立氏族とされる池田寺跡の４ヵ寺が知られている。この他、和泉郡内には、信太郷に所在する信太首の信太寺跡のほか木嶋郷（現貝塚市）の秦廃寺、八木郷（岸和田市）の小松里廃寺、掃守郷（同）の春木廃寺、別所廃寺、山直郷の田治米廃寺などがある。このほか、行基が関わったとされる49院のうち、和泉国に10院が所在している。また、和泉国では網曳御厨が置かれ、内膳司に魚介類を貢納していた。所在地は詳らかではないが、府中に近い泉大津市の我孫子付近が有力とされている。

和泉地域の条里に目を移すと、大鳥郡内では、石津川の中下流で、河道方向に沿った条里地割りが観察できるが、和泉郡では大津川（槇尾川）下流で海岸線を基線とする条里地割りが槇尾川や松尾側の中流まで観察できる。

平安時代後期頃でも和泉国では国衙領が広い面積を占め、領域型の荘園は王家領の宇多庄、摂関家領の大泉庄、春日社領の春木庄、石清水領の蜂田庄が知られる程度である。

参考文献

『泉大津市史』第１巻上　本文篇１泉大津市史篇さん委員会　2004

『古代和泉郡の歴史的展開』和泉市史紀要第11集　和泉市史篇さん委員会 2006

『弥生創世記　―検証縄文から弥生へ―』大阪府立弥生文化博物館　2003

『和泉黄金塚古墳とその時代展―古墳と首長居館のすがた』和泉市いずみの国歴史館2001他

第３章　調査結果

第１節　基本層序

調査区の配置に従い北西から南東に06017－１区、02020－２区、02017－１～７区、05027区の順に記述する。ＪＲ阪和線西側の06017－２区も府中遺跡に含まれるので断面図を掲載したが、豊中板原遺跡の報告で取り上げる予定であるので説明は割愛した。

06017調査区

06017－１区

ＪＲ阪和線踏切東側の道路部分である。北壁はＪＲ阪和線の下を潜る高圧線や電話の埋設管や上水道管で攪乱されており、土層観察断面を設定できなかったため南壁を反転して掲載したが、こちらも掘削の基点となる旧耕土層は攪乱され、残っていなかった。調査区付近の地表面はT.P.18.7mで、2020－１、４区のとの位置関係から旧耕土はT.P.17.9m前後と考えられる。中世後半から近世の遺構はT.P.17.7～17.8mで検出される。

第４、15層　にぶい黄褐色粗砂から砂層で、古墳時代の遺構検出面である。

第５、16、17層　黒褐色砂混シルト～にぶい黄褐色砂や褐灰色シルトで、縄文時代中期末頃の堆積層である。

第６層　褐灰色砂混シルトで縄文時代中期末の堆積層である。堆積土から比較的短期間に堆積したと考えられる。

第７、18層　褐灰色砂質シルトから灰黄褐色シルト層で、上面は縄文時代中期末の遺構面である。上面のレベルはT.P.16.9～17.1mである。層内に粒化した炭化物を含んでいる。

第８層　砂混じりのにぶい黄褐色シルトで、縄文時代中期末頃の遺物包含層である。

第19層　にぶい黄褐色シルト縄文時代中期末頃の土器を包含する。

第９、11、20層　９層は灰色砂、11層は灰白色の砂～シルト層、20層は暗灰黄色砂層で、縄文時代中期末以前に堆積した層である。層中に礫を多く含んでいる。遺物は出土しなかった。

（この土層断面と遺物取り上げ時の土層との関係を検討できなかったので、本文29頁以下の縄文土器の記述における各層とは対応していないので注意されたい。）

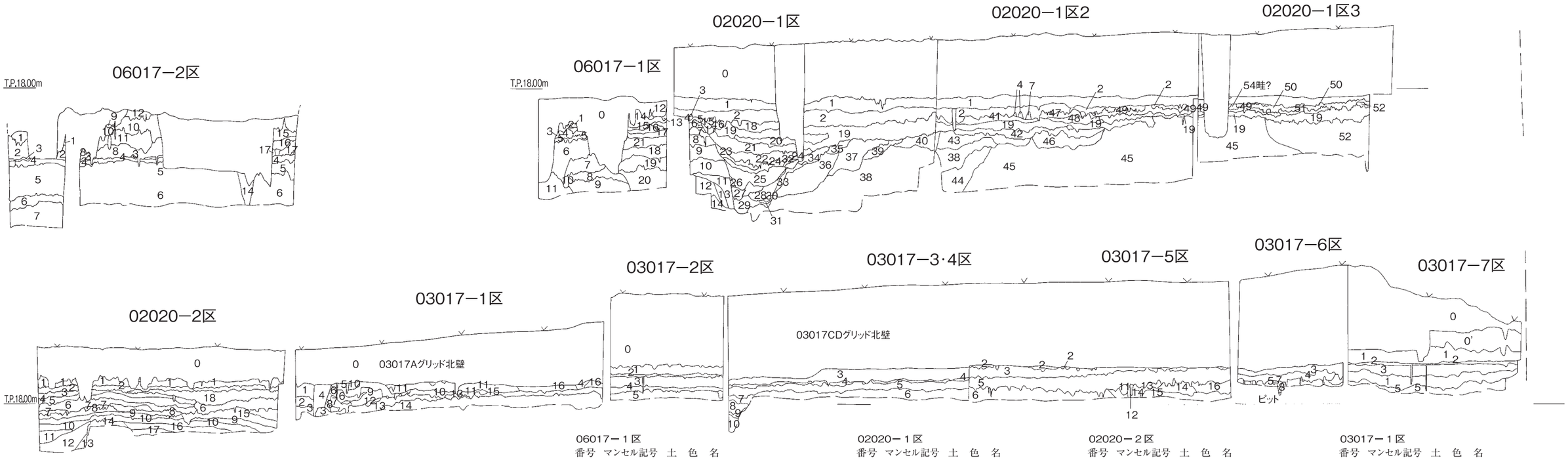
02020調査区

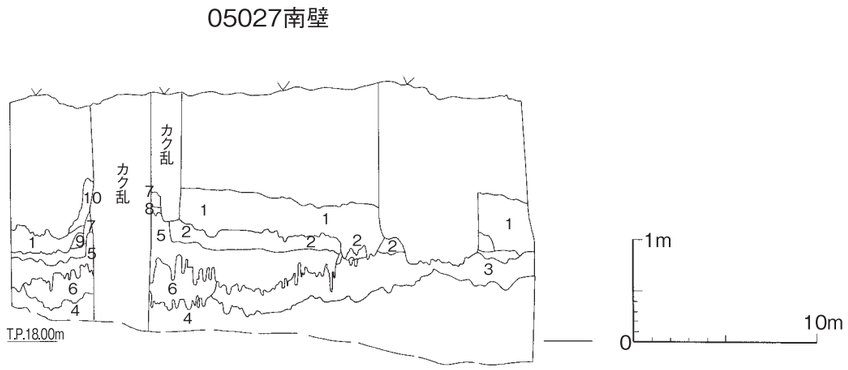
02020－１区

第０層　盛土

第１層　旧耕土で下面はT.P.18.7mである。

第２、50層　黄灰色から灰色シルト質土。中世頃の遺物を包含し、上面で中近世の遺構か観察される。耕作溝を検出している。





06017−１区

番号	マンセル記号	土　色　名
1	10YR4/1	褐灰色砂質土
2	10YR4/1	褐灰色礫混砂
3	10YR4/4	褐色砂礫
4	10YR4/3	にぶい黄褐色粗砂
5	10YR3/2	黒褐色砂混シルト
6	10YR5/1	褐灰色砂礫混シルト
7	10YR5/1	褐灰色砂質シルト
8	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト混砂
9	7.5Y5/1	灰色砂
10	10Y4/1	灰色シルト
11		砂～粗砂
12	10YR5/4	にぶい黄褐色砂
13	10YR5/6	黄褐色砂
14	10YR5/6	黄褐色砂質シルト
15	10YR4/3	にぶい黄褐色砂
16	10YR5/4	にぶい黄褐色砂（シルト混じり）
17	10YR4/1	褐灰色シルト（砂礫混り）
18	10YR4/2	灰黄褐色シルト（砂礫混り）
19	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト（砂混り）
20	2.5Y5/2	暗灰黄色砂
21	10YR4/2	灰黄褐色シルト

05027区

番号	マンセル記号	土　色　名
1	10BG5/1	耕土（青灰色土）
2	5Y6/1	灰色土
3	10YR7/4	にぶい黄橙色土
4	10YR6/6	明黄褐色土
5	10YR3/2	黒褐色土
6	10YR6/2	灰黄褐色土
7	10YR5/1	褐灰色土
8	10YR6/8	明黄褐色土
9	10YR6/1	褐灰色土
10	7.5YR4/1	褐灰色土

06017−２区

番号	マンセル記号	土　色　名
1	10YR5/2	灰黄褐色砂混シルト
2	5YR5/2	灰褐色砂礫
3	5GY4/1	暗オリーブ灰色粘質シルト
4	10YR4/1	褐灰色シルト
5	10YR5/2	灰黄褐色粘質シルト
6	2.5GY5/1	オリーブ灰色シルト
7	2.5GY4/1	暗オリーブ灰色砂礫
8	10YR5/2	灰黄褐色砂礫
9	7.5Y6/1	灰色砂混土
10	10YR3/1	黒褐色土
11	10YR5/1	褐灰色砂礫
12	10YR5/2	灰黄褐色砂混土
13	5Y6/4	オリーブ黄色粘質シルト
14		５・６層に炭化物が多く混入する範囲
15	10YR4/2	灰黄褐色砂質土
16	10YR6/1	褐灰色砂礫
17	2.5Y6/4	にぶい黄色粘質シルト

02020−１区

番号	マンセル記号	土　色　名
1		耕土
2	2.5Y5/1	黄灰色シルト質土
3	2.5Y5/3	黄褐色粘質シルト
4	2.5Y5/3	黄褐色シルト
5	2.5Y5/1	黄灰色砂質土
6	5Y5/2	灰オリーブ色砂質土
7	5Y5/1	灰色シルト質土
8	5Y5/1	灰色シルト質土
9	2.5Y5/2	暗灰黄シルト質土
10	5Y5/1	灰色シルト質土
11	7.5Y6/1	灰色粘質シルト
12		砂礫
13		砂礫（２～３cm）
14		砂礫
15	2.5Y4/1	黄灰色シルト
16	2.5Y5/2	暗灰黄色シルト
17	2.5Y4/1	黄灰色シルト質土
18	5Y6/1	灰色シルト質土
19	2.5Y5/1	黄灰色シルト
20	5Y6/1	灰色シルト
21	5Y6/1	灰色粘質シルト
22	5Y5/1	灰色シルト
23	2.5Y5/1	黄灰色シルト
24	2.5Y5/1	黄灰色粘質シルト
25	7.5YR3/1	黒褐色粘質シルト
26	5GY7/1	明オリーブ灰色粘質シルト
27	5Y4/1	灰色粘土～粘質シルト
28		砂～礫をわずかに含む
29	10BG6/1	青灰色シルト質土
30		砂礫
31	7.5Y4/1	灰色粘土
32	10YR5/1	褐灰色粘土
33		砂礫
34	7.5Y5/2	灰オリーブ色粘質土
35	7.5Y5/1	灰色砂質土
36	5Y7/3	浅黄色粘質土
37	2.5Y5/2	暗灰黄色礫混砂質土
38		砂礫層
39	5Y5/2	灰オリーブ色砂礫（粘土混じり）
40	2.5Y6/2	灰黄色砂混粘質土
41	10YR4/1	褐灰色シルト質土
42	7.5Y6/1	灰色粘質シルト
43	7.5Y6/2	灰オリーブ色砂
44		砂礫（ラミナーあり）
45	5Y5/2	灰オリーブ色を帯びた砂礫（拳大まで）
46	5Y5/2	灰オリーブ色砂礫
47	2.5Y5/1	黄灰色シルト
48	2.5Y5/1	黄灰色シルト質土
49	10YR6/1	褐灰色粘質シルト
50	5Y6/1	灰色シルト質土
51	10YR5/2	灰黄褐色砂
52	2.5Y5/1	黄灰色砂礫

02020−２区

番号	マンセル記号	土　色　名
0		盛土
1		耕土
2	5Y7/1	耕土・床土（灰白色土）
3	5Y7/1	灰白色シルト質土
4	5Y7/1	灰白色シルト質土
5	10YR5/2	灰黄褐色シルト質土
6	2.5Y6/2	灰黄色シルト質土
7	10YR5/2	灰黄褐色砂礫土
8	5YR5/1	褐灰色シルト質土
9	5Y7/2	灰白色シルト質土
10	10YR5/1	褐灰色シルト質土
11	10YR6/1	褐灰色砂質土
12	10YR6/1	褐灰色シルト質土
13	10YR5/1	褐灰色砂質土
14	5Y7/2	灰白色シルト質土
15	7.5YR4/1	褐灰色シルト質土
16	2.5Y6/1	黄灰色シルト質土
17	5Y7/2	灰白色シルト混粘土
18	5Y7/1	＝３灰白色シルト混粘土
19	10YR5/2	灰黄褐色シルト質土

03017−１区

番号	マンセル記号	土　色　名
1	2.5Y5/2	暗灰黄色粘質土
2	2.5Y5/3	黄褐色土
3	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色粘質土
4		攪乱
5	5Y4/2	灰オリーブ色粘質土
6	2.5Y5/2	暗灰黄色砂質土
7	10YR5/2	灰黄褐色砂質土
8	2.5Y4/3	オリーブ褐色粘質土
9	10YR5/2	灰黄褐色砂質土
10	10YR5/2	灰黄褐色砂質土
11	2.5Y4/3	オリーブ褐色粘質土
12	10YR5/2	灰黄褐色粘質微砂
13	7.5YR3/1	黒褐色粘質土
14	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色粘質土
15	2.5Y3/1	黒褐色粘土

03017−２・３・４・５区

番号	マンセル記号	土　色　名
0		盛土
1	10Y4/1	耕土（灰色土）
2	5Y7/2	灰白色砂質土
3	10Y6/2	オリーブ灰色粘土
4	7.5YR3/1	黒褐色粘質土
5	7.5YR4/1	褐灰色粘質土
6	2.5Y5/4	黄褐色粘質土
7	2.5Y7/3	浅黄色土（炭化物を含む）
8	5Y6/1	灰色砂礫と
	2.5Y7/2	灰黄色粘土の互層
9	10YR7/2	にぶい黄橙色粘土
10	7.5YR6/1	褐灰色粘土
11	2.5Y5/1	黄灰色粘土
12	2.5Y5/4	＝６
13	2.5Y7/2	灰黄色粘質土
14	2.5Y8/2	灰白色粘質土
15	2.5Y5/3	黄褐色粘質土
16	7.5YR4/2	灰褐色粘質土

03017−６・７区

番号	マンセル記号	土　色　名
1	2.5Y4/1	灰色土（耕土）
2	2.5Y6/2	灰黄色シルト質土（床土）
3	7.5Y5/1	灰色土
4	2.5Y5/2	暗灰黄色土
5	2.5Y5/3	黄褐色土
6	7.5YR4/2	灰褐色粘質土
7	10YR4/2	灰黄褐色粘質土（ピット）
8	10YR4/1	褐灰色シルト（ピット）

第５図　06017−１区、02020−１・２区、03017−１～７区、05027調査区基本土層断面図（北側断面）

第19層　黄灰色シルトで、土師器や須恵器片を含んでいる。古墳時代後期から奈良時代頃の堆積層と考えられるが、下面でこの時期の遺構は確認できなかった。

第20～37層　20層灰色シルト～37層暗灰黄色礫混じり砂質土はSD12の堆積土である。シルトから粘質シルトが堆積しており、緩慢な流水であったと思われる。古墳時代初め頃の遺物が出土しているが、量は少ない。

第８、９、10、42、46層　灰色～灰黄色系のシルトや砂礫で弥生時代前期頃の河川NR11の堆積層である。

第38、44、45、52層　砂礫層で、縄文時代中期以前に形成された層である。

02020－２区

第０層　盛土

第１、２層　灰色土、灰白色土で、旧耕作土。

第３、18層　灰白色シルト質土で、中世頃の土器を含んでいる。

第４、５層　灰白色～灰黄褐色シルト質土で、土師器片を含んでいる。

第６～17層　灰黄褐色シルト質土や褐灰色砂質土などで弥生時代前期の河川NR11の堆積土である。

03017調査区

03017－１区

第１、11層　暗灰黄色～オリーブ褐色粘質土で弥生時代後期～古墳時代前期頃の遺物を含んでいる。層厚0.1～0.15mを測る。

第２層　黄褐色砂混じり土で、河川NR11の最上層堆積土。上面で古墳時代前期の遺構が検出される。上面はT.P.18.0～18.2mを測る。

第３、13、14層　暗オリーブ褐色～黒褐色粘土層　河川NR11の上部に厚く堆積する砂礫混りの粘土層で、弥生時代後期～古墳時代初め土器や縄文時代後晩期の土器片が出土する。この地区ではNR11を幅1.2mのトレンチ状に約1.5m掘削したが河道底を確認することはできなかった。

03017－２～５区

第０層盛土

第１、２層　旧耕土で１層は灰色土、２層は灰白色土で床土である。

第３層　オリーブ灰色粘土　上面はT.P.18.5m前後で、耕作溝や杭列が確認される。層内に土師器や須恵器片、弥生土器を多く含んでいるが、細かく砕かれている。中近世頃に耕作土として利用されていたのであろう。

第４層　黒褐色粘質土で、03017－５区で消滅する。２区で検出した溝SD01はこの層を除去した面で検出している。層厚は薄いが土師器や須恵器片を含んでいる。

第５、６層　褐灰色粘土～黄褐色粘土層　NR11の上部堆積土である。遺物は含まない。

第７～10層　03017－２区で検出した溝SD01の埋積土で、２区での深さは0.1mであったが東に深くなり、３区では0.4mを測った。

03017－６、７区

盛土は水田を埋めて駐車場用地として造成されたときに道路面より0.2m以上高く盛土されている。第0'層はスラグで、水捌けをよくするために敷かれたもの。

第１層　灰色土の旧耕土層で、上面はT.P.18.9m付近である。

第２層　灰黄色シルト質土で床土。

第３層　灰色土で河川NR11の廃絶後に堆積する層である。上面はT.P.18.6mで層厚は0.1～0.2mである。後弥生時代後期末から古墳時代の遺物を包含している。NR11は廃絶後も周囲よりやや低くなっていたのか方形周溝墓は肩部に沿って築造される。この層の堆積によりほぼ平坦な地形となる。

第４～６層　暗灰黄色土や灰褐色粘土、黄褐色土でNR11を埋積する土層である。５層の下は人頭大までの川原石で形成される砂礫層で、低位段丘面を構成する土層の一部である。

05027調査区

05027調査区は、旧耕作土（耕土、床土）を除去した面で、縄文時代から古墳時代と中近世の各時代の遺構が検出される。本来は第5層の上にも土壌が存在していたと考えられるが、中近世頃の大規模な耕地開発で削平されたのではないかと考えられている。

第１層　灰色土旧耕土

第２層　灰黄色シルト質土　床土

第３層　灰色土　遺物の出土状況から縄文時代後晩期頃に形成された土層と考えられる。

第５層　黄褐色土で弥生時代の方形周溝墓の上層に堆積する。耕作土として利用されたのか、この土壌を利用して畦がつくられている。

第６層　黒褐色土　弥生時代の方形周溝墓の溝下層に堆積する土層である。

第４層　暗灰黄色土　2002年～2008年の調査から縄文時代中期頃に堆積した土層と考えられるが、この地区では中期に遡る遺物は出土していない。

第２節　縄文時代の遺構と遺物

本遺跡ではこれまでの調査でも縄文時代の遺物が各所で出土しているが、今回の調査で初めて遺構が検出された。遺構が検出されたのは02020－１・３・４区、及び06017－１区である。このうち06017－１区では縄文時代の遺構面を２面確認しており、各々１区上層・下層とした。

これら調査区のうち06017－１区と02020－１・４区は隣接する。06017－１区（上層）と02020－１区の遺構面検出レベルはT.P.17.2m～ T.P.17.6mであり、06017－１区（下層）と02020－４区で検出された遺構面検出レベルはT.P.17.1mである。さらに後者については調査時の検討により遺構面のベース層が共通することも確認しており、同一遺構面と判断した。

このように各調査区の発掘成果を検討し整理していく過程で、隣接する調査区については縄文時代の遺構面が２面存在することを確認できた。それは06017－１区と02020－１・４区が隣接していたため､各々の調査成果を直接比較し遺構面の対応関係を整理することができたためである。しかし、02020－３区はこれらの調査区より約220m離れた山側の調査区であり、遺構面の対応関係を直接比較することはできない。

一方、整理作業を進める中で、各調査区より出土した遺物が時期的なまとまりを有していることが判明した。詳細は後述することにし、ここでは概略を述べておく。

遺物整理の結果、02020－３区出土の縄文土器は全て縄文時代の後期中葉、後期末及び晩期に属するものであり、当該区で検出された遺構の時期もおおよそ同じであろう。一方、06017－１区と02020－１区・４区より出土したものは、縄文時代中期末ごろの時期を示すことから、大きく２時期存在することが判明した。

さらに、06017－１区では、縄文時代中期末の遺構面を２面確認している。そこで、縄文時代後期～晩期と中期末に分けて報告する。

１．縄文時代後期～晩期

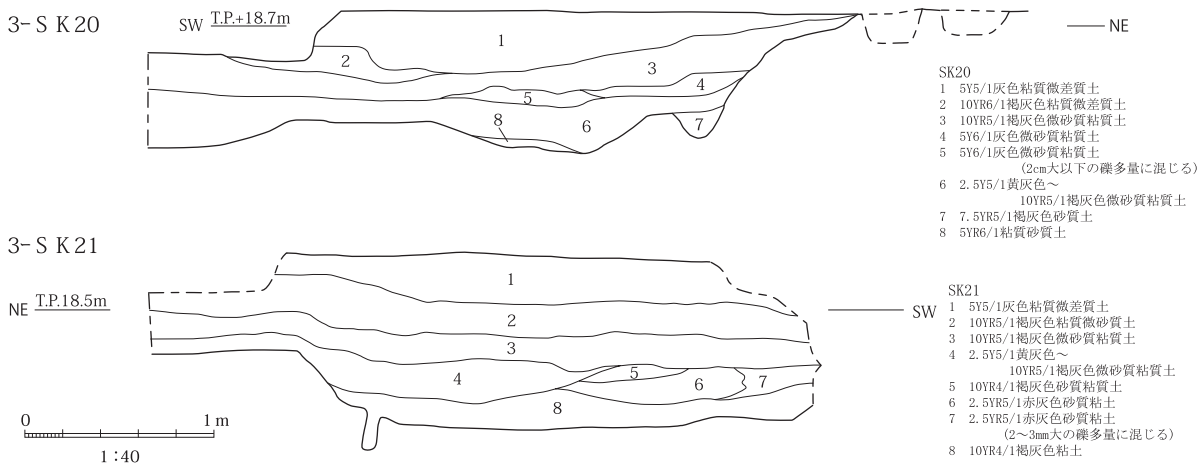
02020－３区の遺構

当該期の遺構面は先述したように、今回報告する調査区の最も南東側、つまり山側である02020－３区で検出されている。縄文時代中期末の遺構を確認した06017－１区上層の遺構検出面レベルと比較すると0.8mほど高くなっている。

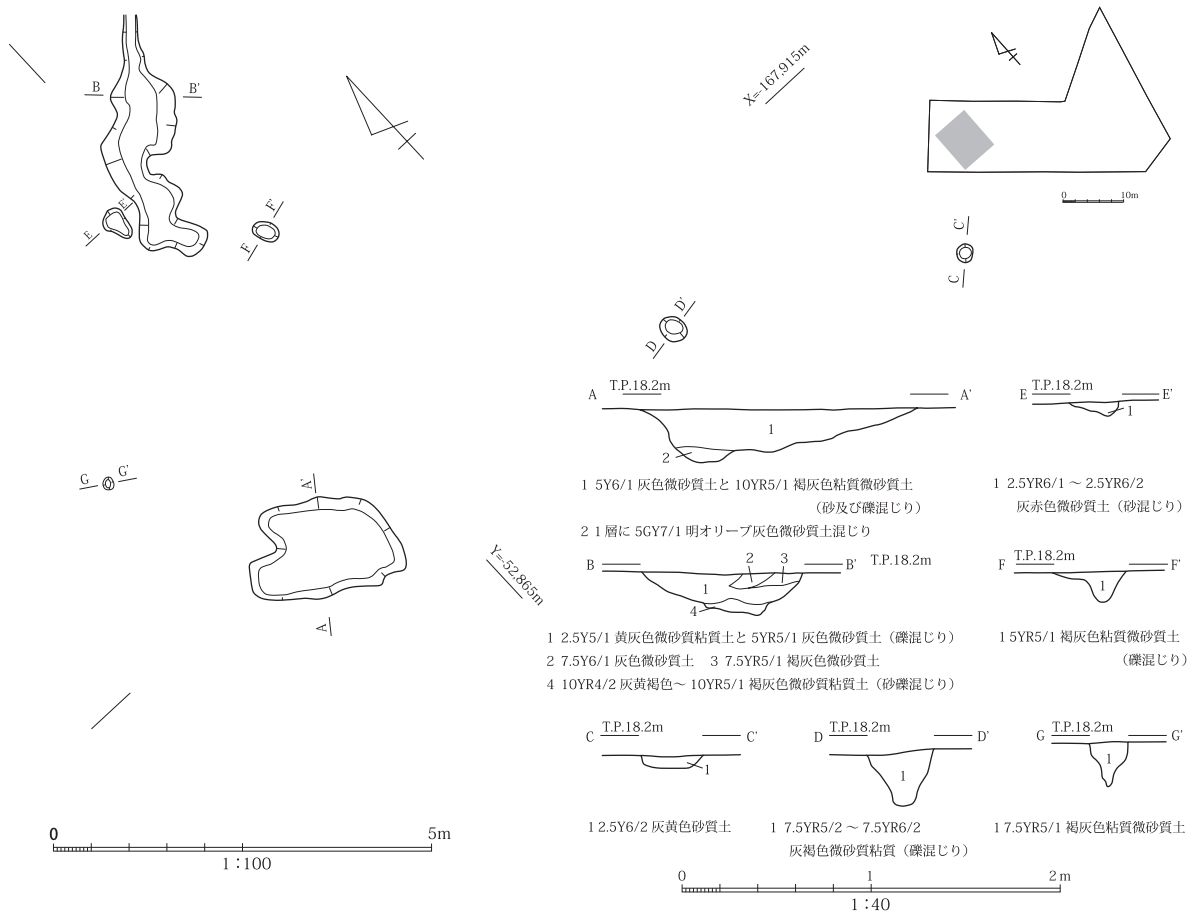
遺構は大きく２ヵ所に分かれて検出されているが、その検出レベルに差が認められる。一つは調査区のほぼ中央で検出された土坑群で、SK20 ～ SK25である。検出レベルはT.P.18.7m付近で、幅３ｍほどの土坑が重なって検出されており、深さは約0.6mを測る。

南西側は調査区外であり、ほとんどの土坑の全長は不明であるが、SK20を計測すると長さは約5.6mである。SK ３もSK20と幅が似ていることから、同規模の土坑の可能性がある。

もう１ヵ所はこれら土坑群よりやや西側に位置し、不定形な土坑とピットが複数検出されている。検出面のレベルはT.P.18.1mほどで、先の土坑群と異なっている。そのため、これら遺構の



第６図　02020－３区　SK20・21土層断面図

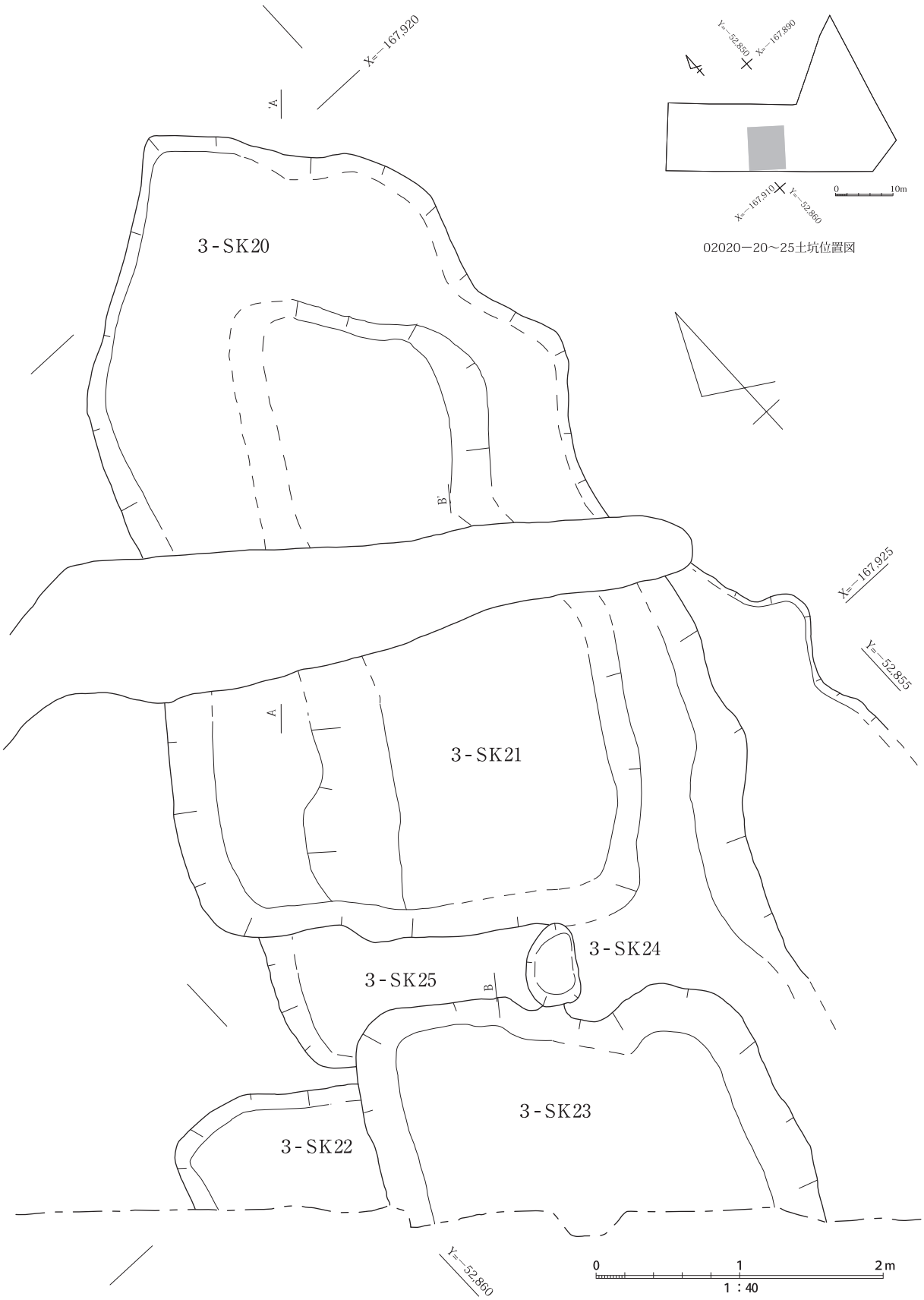


第７図　02020－３区　縄文時代遺構平面図・断面図

時期は異なる可能性が高い。

土坑は２基確認されており、深さはいずれも0.2 ～ 0.3mである。このうち、北側の土坑は北端が確認されておらず、形状も土坑より流路に近い様相を呈している。

検出されたピットは５基であり、ピットの底が尖るように狭まるピットも確認でき、木杭状のものが存在した可能性がある。深さは概ね0.2mであった。



第８図　02020－３区　SK20 ～ 25平面図･断面図

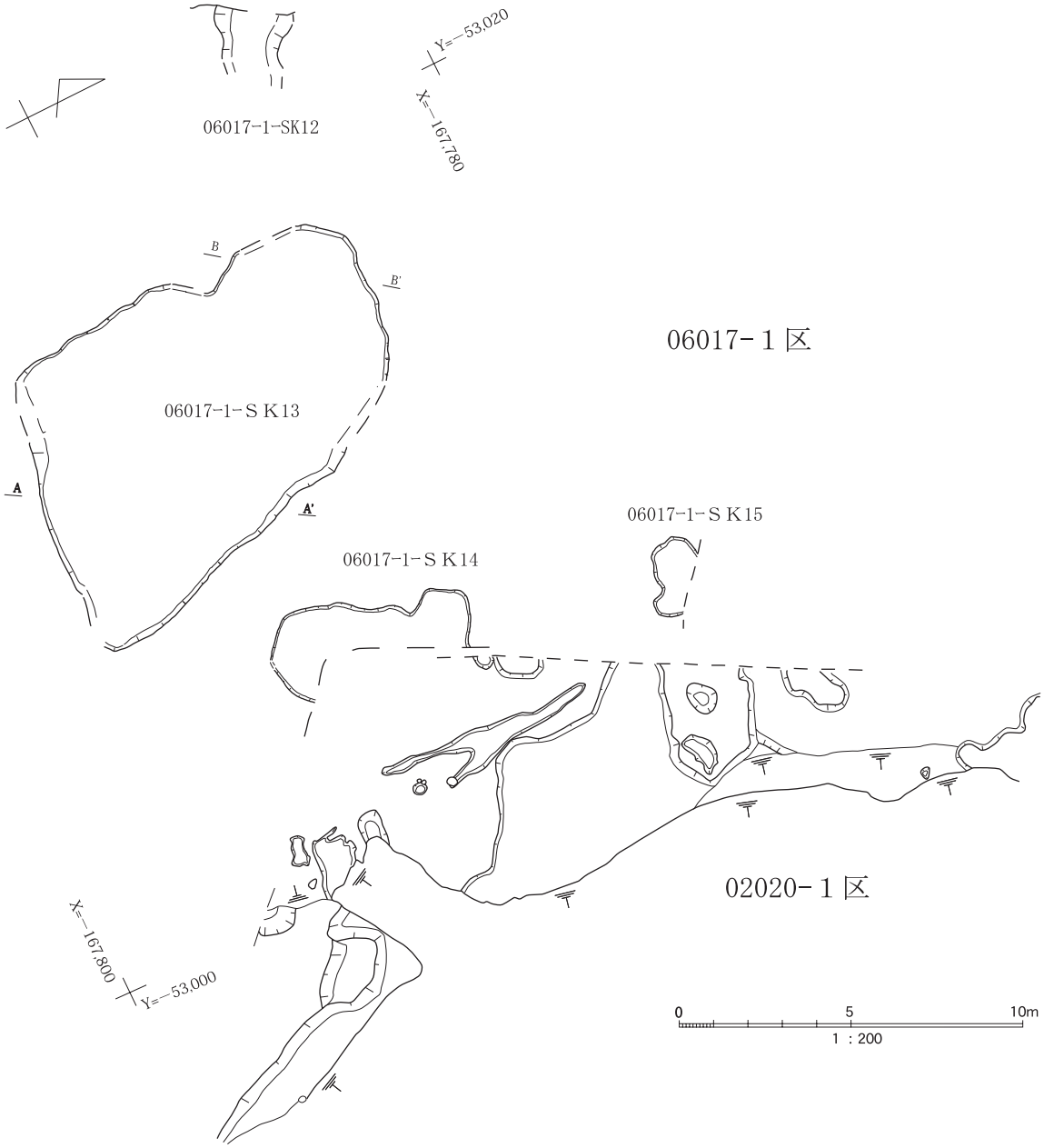
２．縄文時代中期末の遺構面(1)

ここで報告するのは、06017－１区上層と02020－１区で検出された遺構面である。当遺構面は東側が高く西側へ向かって傾斜している。遺構面のベースは黄褐色～褐色の砂混じりシルトで構成され、層中には縄文土器の破片が含まれていた。

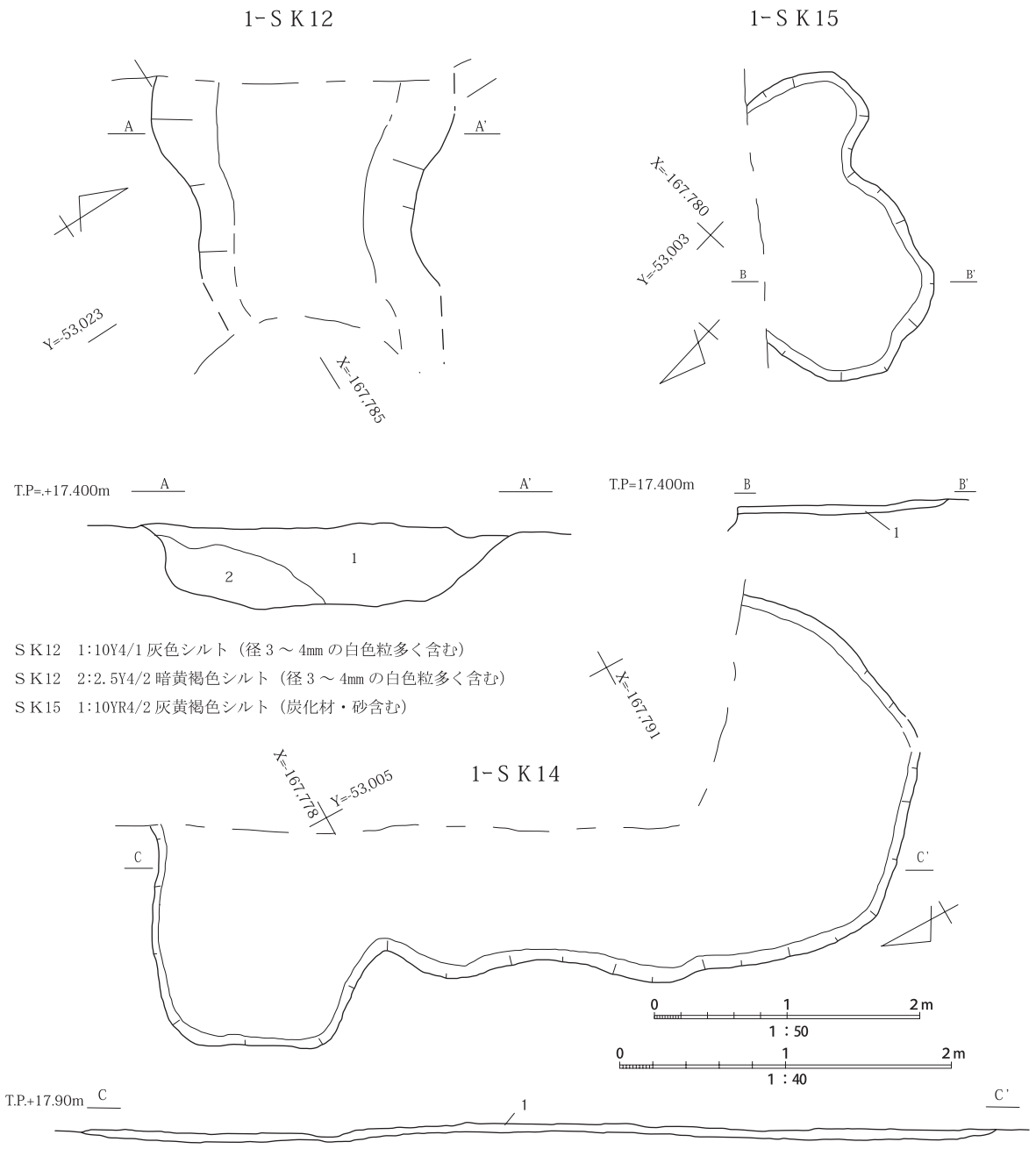
06017－１区上層で確認された遺構は計４基（06017－1－SK12 ～ 15）である。

06017－1－SK12は06017－１区西端で確認された深さ0.4m、幅2.0mの遺構である。東西両端がかく乱で破壊されているため、平面形状は不明である。掘削した結果、調査区北西部に向かって遺構の底が深くなっている様相が確認された。

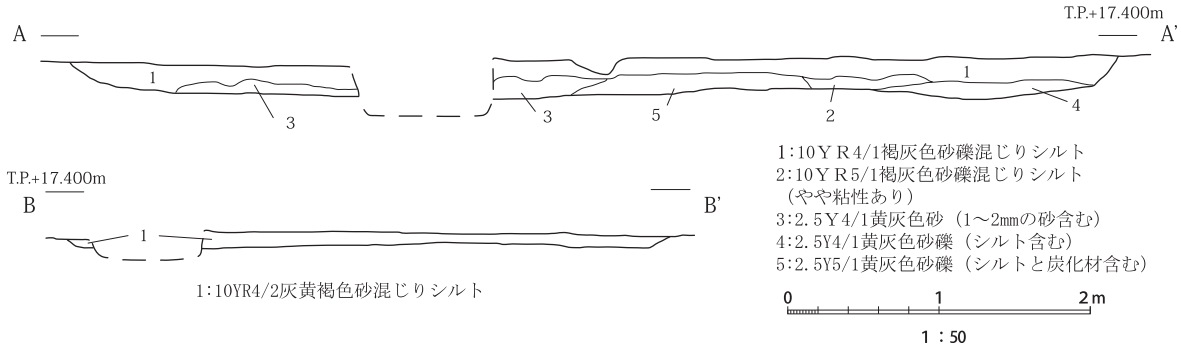
なお、遺構埋土に径３～４㎜の白色粒が多量に含まれており、特に２層に多く認められた。



第９図　06017－１区　第３遺構面平面図



第10図　06017－１区　SK12、SK14、SK15（平面図S=1/50・断面図S=1/40）



第11図　06017－１区　SK13断面図

06017－１－SK13は調査区南側で確認された。長径約13.5m、短径約10m、深さ約0.3mの不整形な土坑である。埋土から縄文土器片が多数出土したが、いずれも小片で接合できるものは無かった。

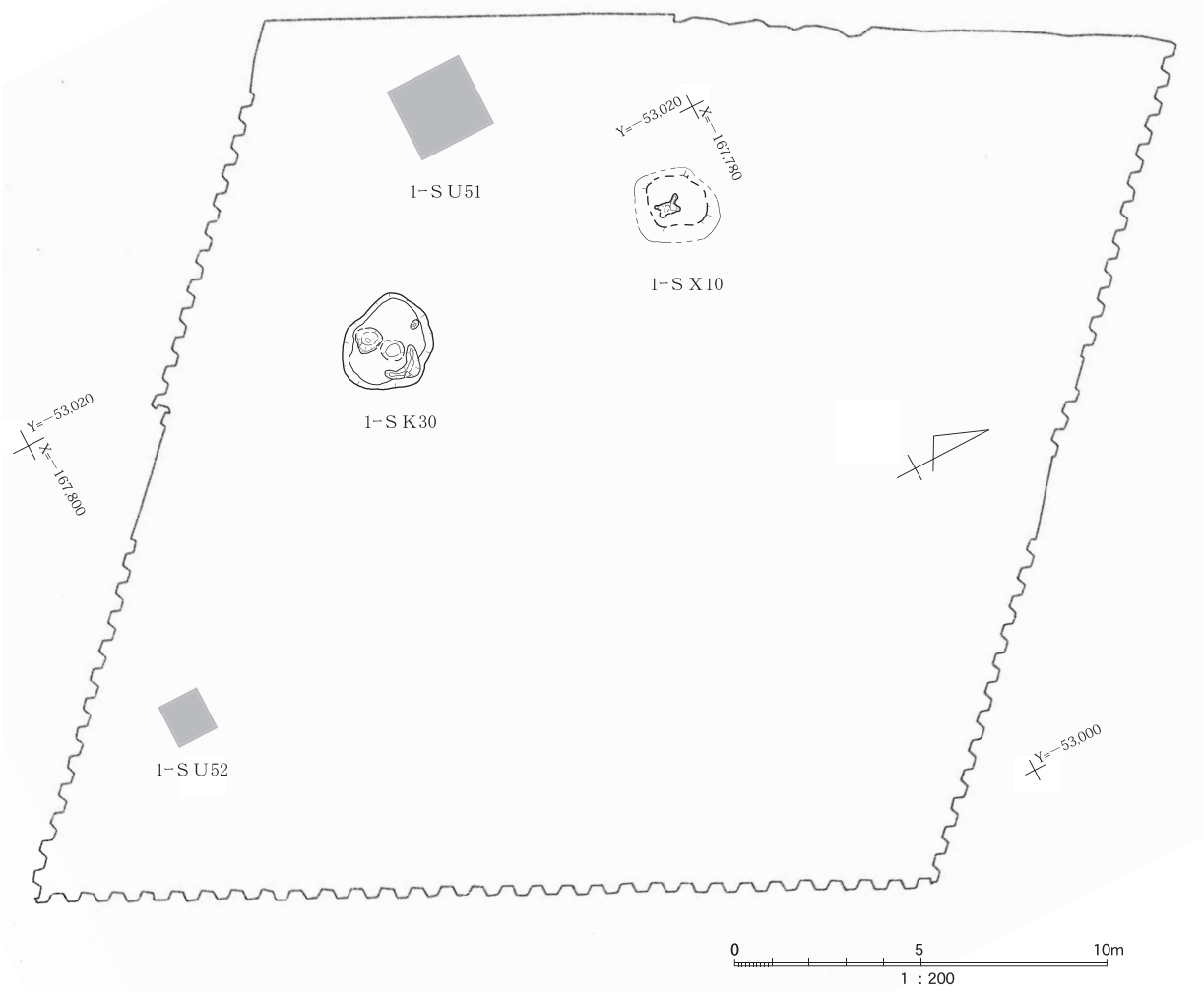
06017－１－SK14と06017－１－SK15はともに浅い土坑状の遺構であり、埋土は褐灰色～灰黄褐色のシルトあるいは砂礫で、06017－１－SK15の埋土には炭化材が多く含まれていた。

02020－１区はその多くの部分が攪乱を受けていた。わずかに残存した部分で確認された遺構は、南北方向の自然流路と不定形な土坑である。

３．縄文時代中期末の遺構面(2)

06017－１区の下層と、02020－４区で検出された土坑についてここで報告する。

当遺構面でのレベルは、06017－１区でT.P.16.9m～17.1m、02020－４区でT.P.16.9mとほぼ共通している。そのベースとなる層は上層の遺構面と同じ褐色の砂質シルトであるが、06017－１区東側では拳大の礫が多く含まれ、ほぼ礫層に近い状態となる。この遺構面のベース層にも縄文土器が多く含まれ、縄文時代中期末を示している。これはすでに報告した、上層に含まれる土器と同じ時期であり、明確な時期差を認めることはできない。当遺構面では遺構を２基、土器溜り



第12図　06017－１区　第４遺構面平面図

２ヵ所を確認した。

06017－１－SX10は調査区西部分にあり、上層の掘削時より炭化材が多く認められた個所で、発掘作業中は炭集積と呼称していた。掘削が進むにつれ、大きい炭化材の量が増加したため、掘削を中止し周辺の平面精査を行った。しかし、明確に遺構を認識できず、炭化材集中個所の土層観察を行うため断割りを行った。

結果、中央部のくぼみに炭化材が集積する低い土盛状のような遺構を土層断面で観察した。周辺精査を進めたところ、遺構面のベースである砂質シルト層と同じ土を使用した２ｍ四方の隅丸方形を呈する土盛状遺構を確認することができた。

中央部には４隅が突出する不定形なくぼみがあり、その４隅には良好な状態で棒状の炭化材が残存していた。

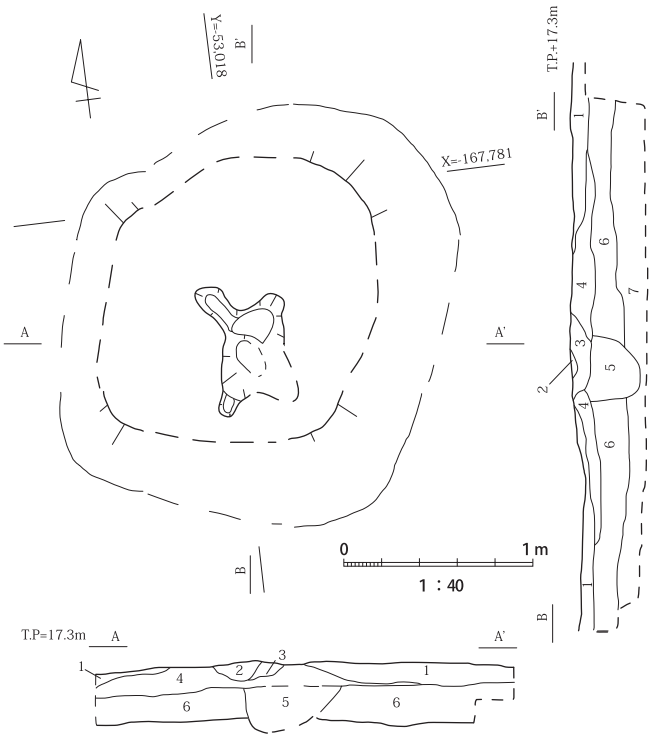
以上の状況から、土盛状遺構において火を使用した状況を想定し、いわゆる屋外炉あるいは火処とよばれる遺構と考える。

なお、この中央部のくぼみとその周囲において土が赤く変色しているなどの被熱を示す痕跡は観察できなかった。

この土盛状遺構を除去すると直径0.3～0.4mの土坑が検出され、その埋土にも炭化材が混ざっていた。土盛状遺構の直下にあるため、何らかの関係があるのかも知れない。

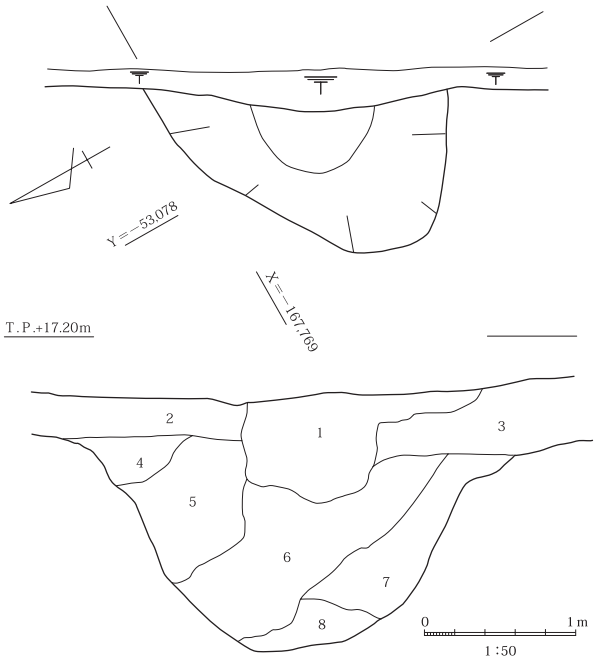
なお、調査区北西側でも炭が集中して認められたが、遺構は検出されなかった。

02020－４区では長軸約２ｍ、短軸約１ｍ、深さ1.2mほどの土坑が検出されている。



1：10YR4/3にぶい黄褐色砂礫混じりシルト
2：黄褐色砂質土（炭化材が大量に混じる）
3：10YR2/2黒褐色土（炭化材）
4：10YR4/1褐灰色砂礫混じりシルト
5：10YR5/4にぶい黄褐色シルト（炭化材多く混ざる）
6：10YR4/1褐灰色砂礫混じりシルト
7：10YR4/2灰黄褐色砂質土（ややしまる）

第13図　06017－１区　SX10平面図・断面図



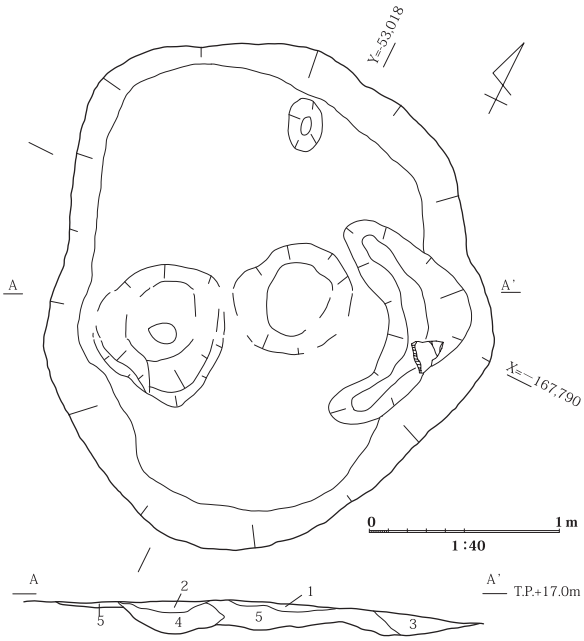
1 2.5Y5/2暗灰黄色砂礫（上層河川堆積層）　2 2.5Y6/2シルト質粘土
3 2.5Y6/1～5/1シルト質粘質土　4 2.5Y6/1黄灰色～6/2灰黄色粘土
5 10YR6/1褐灰色～10YR5/2灰黄褐色シルト質粘土
6 N4/0～N5/0灰色粘土（炭粒混じり）　7 N4/0～N5/0灰色砂質粘土
8 5Y7/1～7/2灰白色砂礫

第14図　02020－４区　SK21平面図･断面図

06017－１－SK30は、調査区の南西部で検出された長軸2.6m短軸2.2m深さ0.1mの遺構である。調査の結果、並んだ浅い土坑が３ヵ所認められたが、各々の土坑に切りあい関係はなかった。東端の土坑底からは縄文土器の口縁部片が貼りついた状態で出土している。

土器溜りは調査区の南西と南東の２ヵ所で確認された。出土順により前者を06017－１－SU51、後者を06017－１－SU52と呼称した。

06017－１－SU51は調査区南西端のT.P.17m前後で確認された。範囲は東西約３m南北約２mで、縄文土器の深鉢の口縁部、底部、胴部の破片が河原石とともに出土している。



1:7.5Y6/2灰白色砂層　2:10ＹＲ6/2灰黄褐色砂層　3:2.5Ｙ5/2暗灰黄褐色粘質土
4:2.5Ｙ4/2暗灰黄色粘質土　5:2.5Ｙ7/1灰白色～2.5Ｙ7/2灰黄色砂層

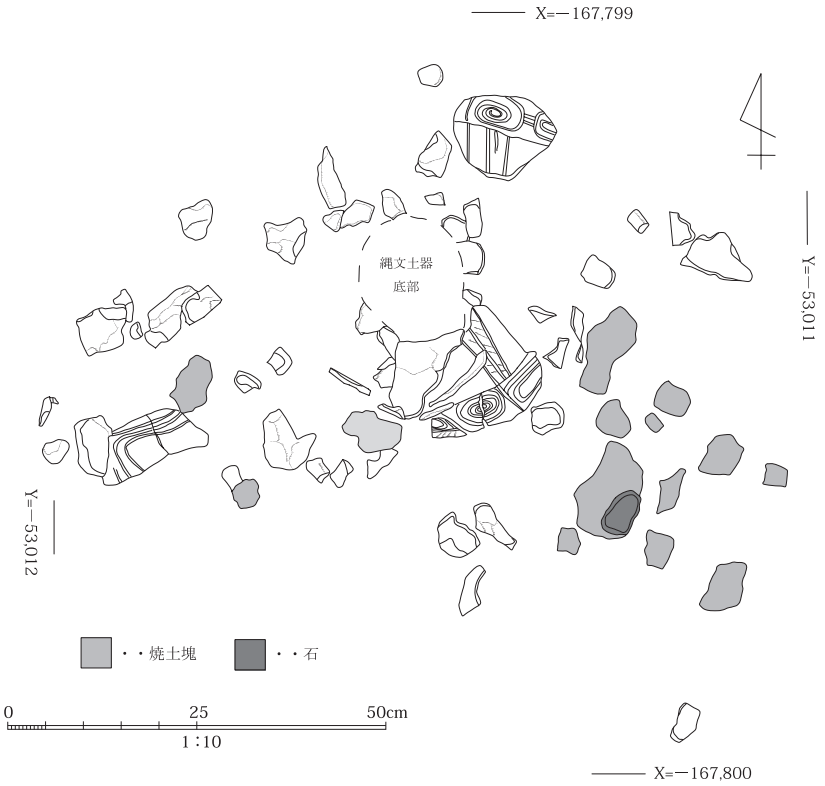
第15図　06017－１区　SK30平面図・断面図

調査時に底部と口縁部を複数認めることができたが、土器の全形がわかる個体は口縁部が完存していた第29図－257の個体のみである。

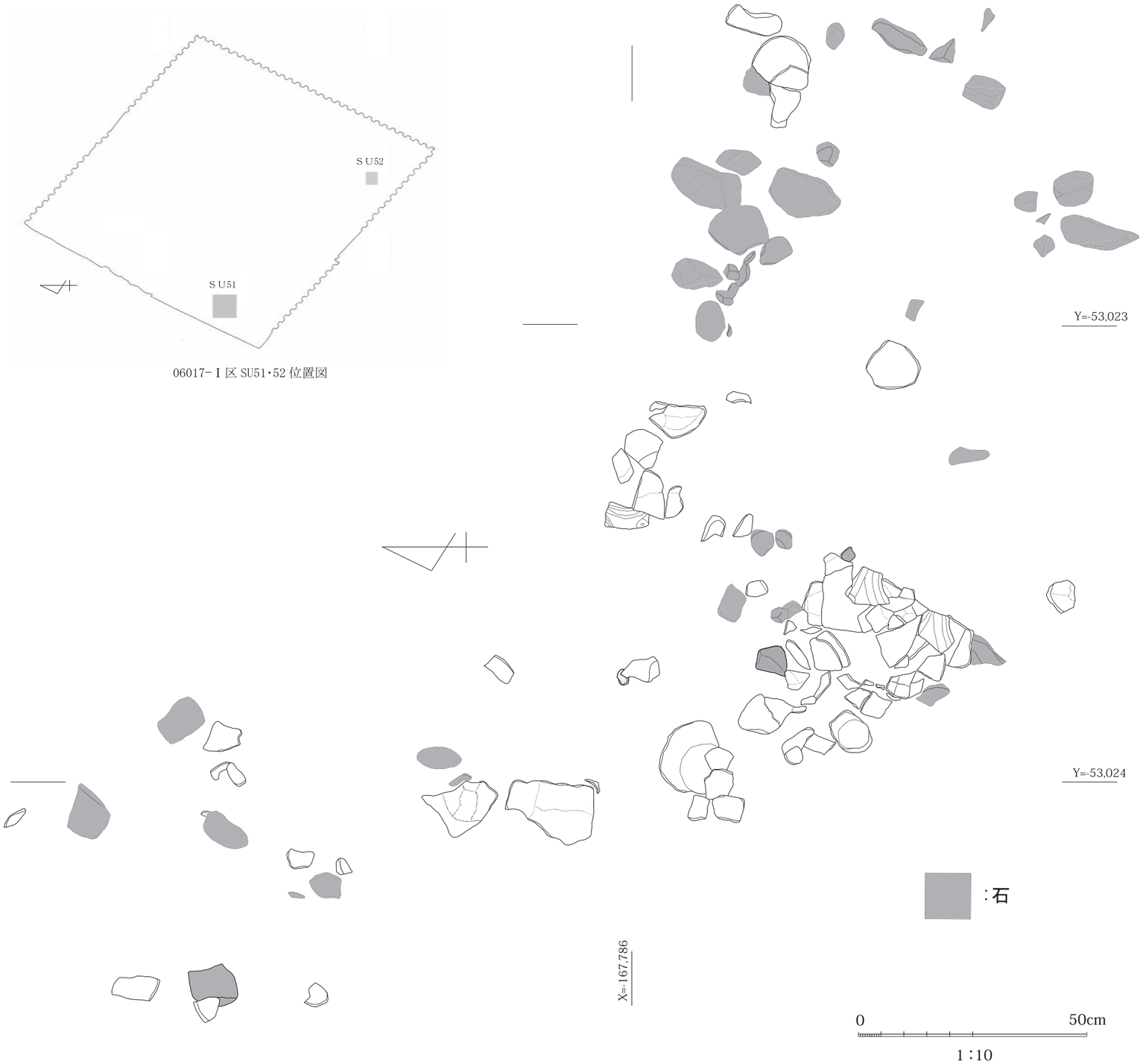
060171－SU52は調査区南部のT.P.17.3m付近で検出され、縄文土器の深鉢と共に、複数の焼土塊が出土した。SU51と異なり、１m四方の限られた場所に遺物が集中していた。完形に復元された土器（第30図－277）はこの中央部で南東方向に倒れた状況で出土した。周辺からは多数の焼土塊が出土している。これら焼土塊の胎土は精良で、縄文土器の胎土と明らかに異なる。外面は明るい赤褐色や灰褐色を呈し、内面は明るい黄褐色である。

大きさは手のひらに収まる程度のものが多く、四角く整えられているように観察できる個体もあるが、多くは無造作に手で握ったような不整形なものが多い。

今回の調査から、その性格を明らかにする成果を得ることはできなかった。



第16図　06017－１区　SU52平面図



第17図　06017－１区　SU51平面図

縄　文　土　器

京都大学大学院文学研究科
河　本　　純　一

縄文後・晩期の土器

縄文後・晩期の土器は、05027区および02020－３区から出土した。

05027区出土縄文土器（001 ～ 017　第18図、表３－１、図版22）

05027区からは116点の縄文土器が出土した。後期中葉の北白川上層式３期から一乗寺Ｋ式期の土器および、後期後葉の宮滝式期の土器と考えられる。

北白川上層式３期～一乗寺Ｋ式（001 ～ 004）

主に横方向の多重沈線により文様が施される土器群。

001、002は口縁部。ともに内湾し、口端を丸くおさめ、横方向に展開する多重沈線により文様を描く。001は、波状口縁になり、左端に渦巻文を施していた可能性がある。002は、外面に縄文(LR?)を施したのち、押し引き沈線により文様を描く。真ん中の１条だけが沈線の施文方向が異なり、右から左へと施している。沈線の末端には刺突を施す。

003、004は胴部。003には、２条の沈線が施されている。004には、浅く不鮮明であるが、縄文(RL?)が施されているようである。

宮滝式（005、006）

凹線および巻貝圧痕による文様が施される土器群。

005、006は口縁部。005は、口縁部が外反し、口端を面取りしている。２条の凹線を引き、粘土粒を貼り付けた上から巻貝による扇状圧痕を施している。外面からの押圧により、器壁内面に凹凸が生じている。006は、３条の凹線を施している。

無文粗製土器（007 ～ 014）

丸みを帯びる胴部や内折する口縁部など、主に後期中葉に帰属するものと考えられる。

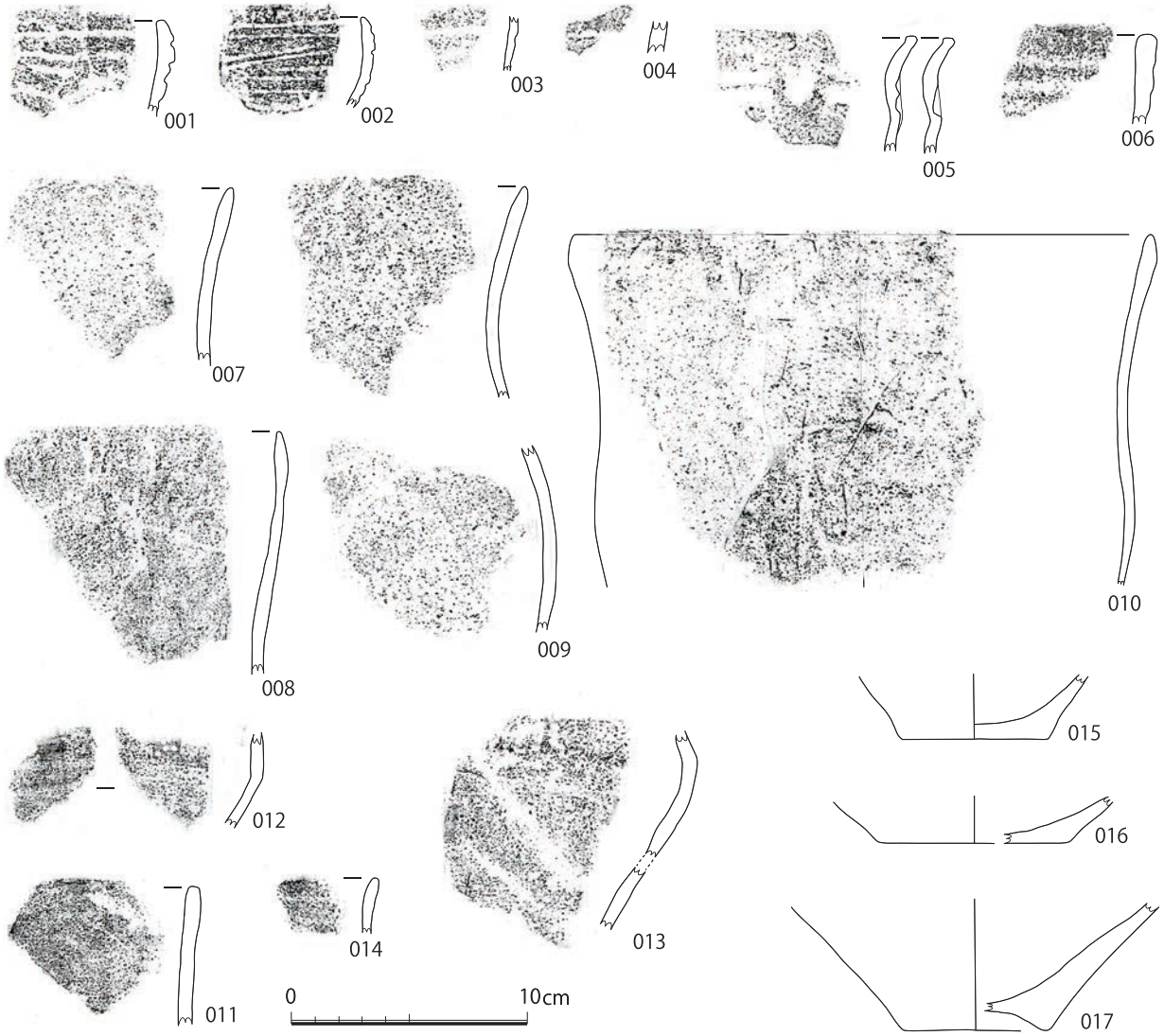
007 ～ 011は深鉢口縁部。007 ～ 010は､口縁部が外反する。007は､口端を先細らせておさめる。008は、全体的に外反気味の口縁部が、口端近くで短く内傾する。口端は先細りする。009は、口端を先細らせ、丸みのある胴部をもつ。010は、口端がやや肥厚し、丸みを帯びる。ゆるやかに胴部に接続し、胴部は丸みを帯びる。口径はおよそ24㎝程度になると考えられる。011は、口縁がほぼ直立し、口端を面取りしている。宮滝式まで下る可能性もある。

012、013は深鉢頸部。012は、口縁部が内折し、内外両面に巻貝条痕が見られる。013は、口端を欠くが、口縁部が大きく内湾するものと考えられる。

014は小型の鉢の口縁部か。口端がわずかに外反し、やや丸みを帯びておさめられる。

底部（015 ～ 017）

015、016は平底、017は凹底。



第18図　05027区出土縄文土器

02020－３区出土縄文土器（018 ～ 048　第19図、表３－１，２、図版22, 23 ）

02020－３区からは101点の縄文土器が出土した。018 ～ 020の３点が後期後葉の宮滝式期になるほかは、晩期中葉から後葉の滋賀里Ⅲｂ～Ⅳ式期の土器と考えられる。

宮滝式（018 ～ 020）

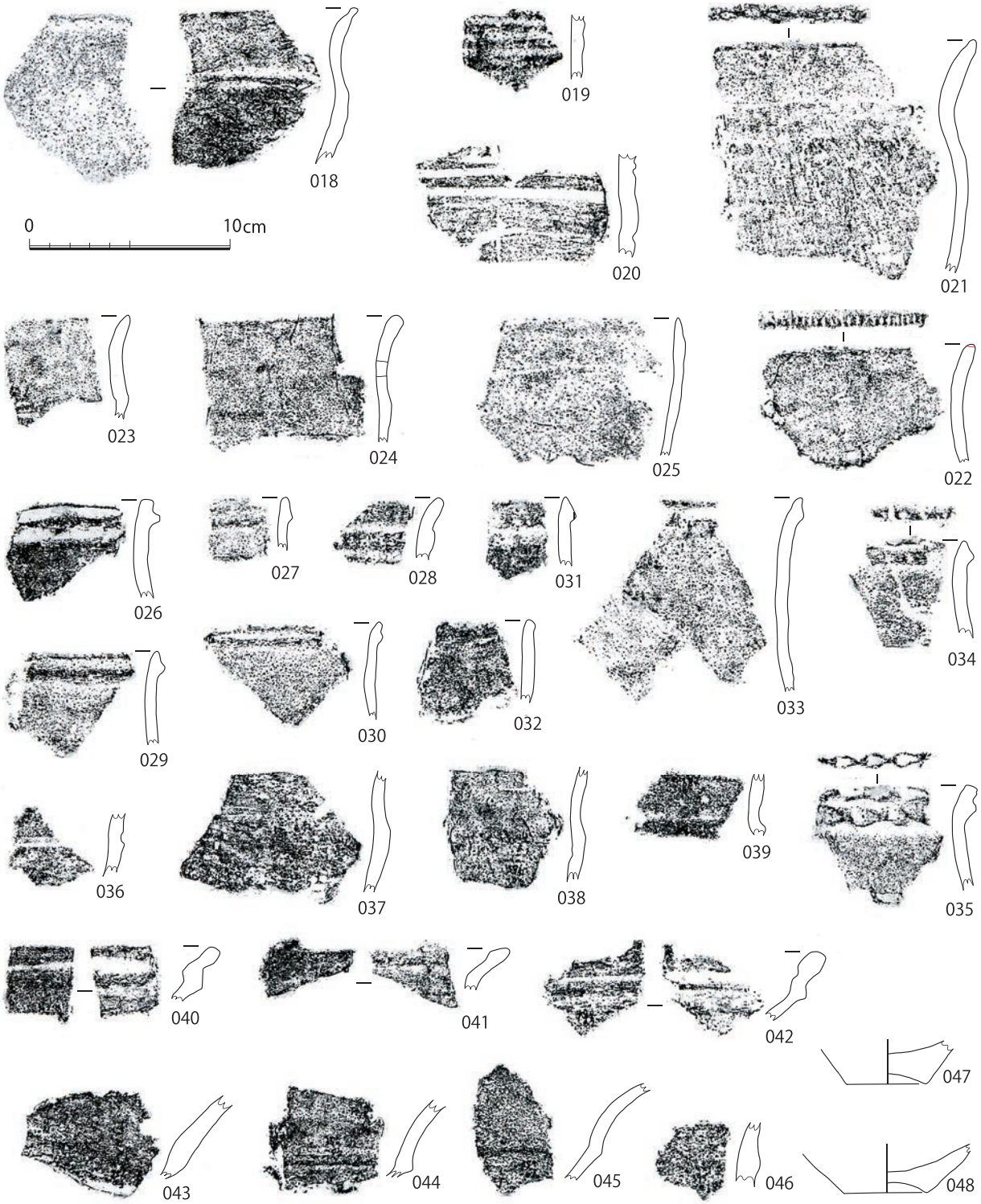
018は、口縁部～胴部。口縁部は外反し、丸みを帯びた胴部をもつ。口端内面直下に１条、外面屈曲部に２条の凹線を施す。

019、020は胴部。019には、３条の凹線が施されている。020は、凹線間の間隔が広くなっており、やや新しい様相を呈する。３条の凹線の下に１条の弧状凹線を施す。最も上の凹線上に、１ヵ所の刺突を加える。凹線中には巻貝による条痕が観察される。

滋賀里Ⅲb式（021 ～ 025）

口縁部が外反し、凸帯をもたない土器群。

021 ～ 025は口縁部。021は口縁部が外反し、口端に浅い菱形の刻み目を施す。022は、口端に細かい刻み目を施す。頸部には半截竹管による爪形文らしき痕跡が残っているが、磨滅を受けて



第19図　02020－３区出土縄文土器

おり、よく分からない。023は口縁部が短く外反し、口端を丸くおさめる。波状口縁になる可能性がある。024は、口端が面取りされつつも、やや丸みを帯びている。口端がやや外傾する。補修孔が１つみられる。025は、口端を先細らせておさめている。屈曲部をもたず、体部と口縁部との区別がみられない。滋賀里Ⅲb式期に限られるものではないが、凸帯を有していないことから、ひとまずこの群にまとめた。021、023、024は胴部外面をケズリによって器面調整していると考えられる。

滋賀里Ⅳ式（026 ～ 035）

口縁部が外反し、外面に１条の凸帯をもつ土器群。

026 ～ 035は口縁部。

026 ～ 030は口端から少し下がったところに、刻みのみられない凸帯をもつ。026は、断面四角形の凸帯で、口端を丁寧に面取りしている。027は、口端を丸くおさめる。口縁部は直立気味になる可能性がある。器壁が薄いため、口径が小さいものになると考えられる。028は、低く太めの凸帯をもつ。凸帯より上で外反し、口端を丸くおさめている。029は、断面三角形の凸帯で、口端を先細らせておさめている。030は、口端を先細らせておさめている。028 ～ 030は、摩滅のために凸帯および口端上の刻み目が観察できなくなった可能性もある。

031、032は口端近くに凸帯をもつ。031は、凸帯上に菱形の刻み目がみられる。口端を先細らせておさめる。032は、口縁部がやや外に張り出し、直立気味になっている。口縁端部には無文の凸帯らしき高まりがみられる。

033 ～ 035は口端から少し下がったところに、刻み目凸帯をもつ。033は、頸部と体部との境に、ゆるい段がみられる。口端は先細らせておさめる。凸帯上に菱形の刻み目を施す。034は、凸帯がやや口端に近い。凸帯上および口端に、押し引きによる菱形の刻み目を施す。口端は先細らせておさめる。035は、口縁部が外反しながらも、やや内傾気味になっている。凸帯上および口端に、押し引きによる菱形の刻み目を施す。

深鉢胴部（036 ～ 039）

036は、横方向に凹線が施されている。外面下半はケズリ調整をしている可能性がある。037は、下半がやや丸みを帯びる。036、037は後期後葉に伴うものである可能性がある。038は、口端まで残っている可能性もあるが、摩滅のため断定できない。039は、刻みのない丸みを帯びた凸帯が施されている。

浅鉢（040 ～ 046）

口縁部は外反し、口端で屈曲し鍵形を呈する。肩部には鋭く稜をつくりだす。滋賀里Ⅲｂ～Ⅳ式期に伴う浅鉢と考えられる。

040 ～ 042は口縁部。040は、口端を内外に肥厚させ、面取りしている。041、042は口縁部に突起がみられる。041は、口端が丸みを帯び、内面側に肥厚している。042は、口端を肥厚させ、内面直下に１条の凹線を施す。

043 ～ 046は肩部。043には、補修孔が１つみられる。045は、下半をケズリ調整している可能性がある。046は、やや丸みを帯びる肩部である。

底部（047、048）

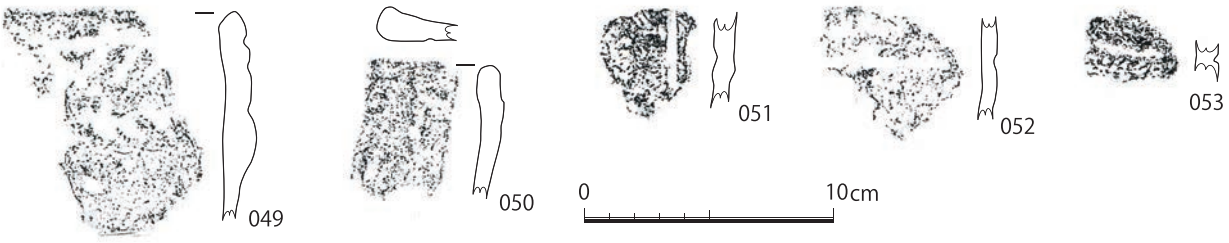
047、048は、ともに凹底。

中期末の遺構面(1)検出遺構出土縄文土器

02020－１、２、４区および06017－１区からは、中期末、北白川C式期の土器が出土した。以下、中期末土器の分類・記述にあたっては、多くを【泉1985】に拠る。しかし、これに拠るだけでは、的確に分類しきれないものもあった。そこで、口縁部外面に蛇行隆帯を施す深鉢A1類g、椀形を呈する浅鉢E類という新たな分類も加えている。

06017－１区12出土縄文土器（049 ～ 053　第20図、表３－２，３、図版29）

06017－12からは、44点の縄文土器が出土した。



第20図　06017－１区 12 出土縄文土器

深鉢Ａ類（049）

口縁下にすぐ口縁部文様帯のくる、水平口縁もしくは主文様部が波状を呈する深鉢。

深鉢A1類（049）

深鉢A類のうち、口縁部と胴部とを、隆帯で区分する土器。

049は、低い隆帯で、口縁部と胴部を区分。口縁直下の１条の沈線と隆帯とで口縁部区画文を作り、区画内に羽状沈線を施す。

深鉢Ｃ類（050）

突起状山形口縁をもつ、胴がきつくくびれた深鉢。

深鉢C3類（050）

深鉢Ｃ類のうち、口縁端部の文様が省略された土器。

050は、口縁に沿って２条の沈線を施しているようだが、摩滅が激しく断定できない。

胴部（051 ～ 053）

胴部ｉ類（051）

垂下沈線や縦位縄文がみられるものを胴部ｉ類とする。

051は、１条の垂下沈線と、縄文(LR?)が施されている。

胴部ii類（052、053）

曲線的な文様がみられるものを胴部ii類とする。

052は、２条の連弧状沈線が施されている。053は、やや湾曲する１条の沈線が施されており、連弧状となる可能性がある。沈線施文後に、縄文を施しているようだが、摩滅のため原体は特定できない。

06017－1区13出土縄文土器（054 ～ 103　第21, 22図、表３－３～５　図版24, 25）

06017－１区13からは、213点の縄文土器が出土した。

深鉢Ａ類（054 ～ 058）

深鉢A1類（054 ～ 058）

054は、隆帯で口縁部と胴部、および区画文間を区分する。隆帯は、区画文部全周を囲むものではなく、逆Ｔ字形に巡らされる。口縁部には沈線により二重長方形区画文を描く。口端をやや内側に屈曲させており、端面が内側に傾く。胴部には４条の垂下沈線が施されている。主文様を欠くことから、ひとまず深鉢A1類eとして扱う。055は、残りが悪いため断言は避けるが、やや高めの隆帯で口縁部と胴部とを分け、沈線を伴い区画文をつくる。区画文内には斜行する短沈線を充填したものと思われる。口縁部は強く内湾し、口端に１条の沈線を施す。056は、口縁部に沈線を伴い区画文をつくる。直線的に右上がりする隆帯が見られることから、主文様部が三角形になると考えられる。つなぎ文部には、右上がりの沈線が１条見られるが、残りが悪く、文様の全体像は分からない。胴部には、隆帯直下に２条の沈線を伴う横走縄文(LR)帯をつくる。左端において下方の沈線が垂下しており、この縄文帯も垂下するものと考えられる。057は、隆帯上に縄文(LR)を施す。口縁部には、沈線により区画文をつくる。残りが悪く、区画文の全容は分からないが、横方向の沈線が１条見られる。胴部には、やや左上がりの沈線を２条引き、沈線間に縄文を施す。058は、深鉢Ｂ類である可能性もある。

深鉢A6類（059 ～ 061）

深鉢Ａ類のうち、口縁部文様帯が消失した土器。

059は口端が内側に傾く。口縁に沿った沈線と右上がりの沈線があるが、残りが悪く文様の全容は分からない。060は口端が内側に傾く。口端直下に横走沈線を引き、その下部に縄文(LR?)を施したものと思われる。061は摩滅が激しく文様の全容は分からないが、２条の沈線が見られ、沈線内に赤色顔料が残存している。

深鉢Ｂ類（062、063）

口縁部から１段下がったところに、隆帯で楕円形区画文を横に連ねた文様を施す土器。

062は、器面に文様の痕跡が見られず、口縁部が無文であったと考えられるので、深鉢Ｂ類として扱った。しかし、摩滅により文様が消滅した深鉢Ａ類である可能性もある。

深鉢B1類（063）

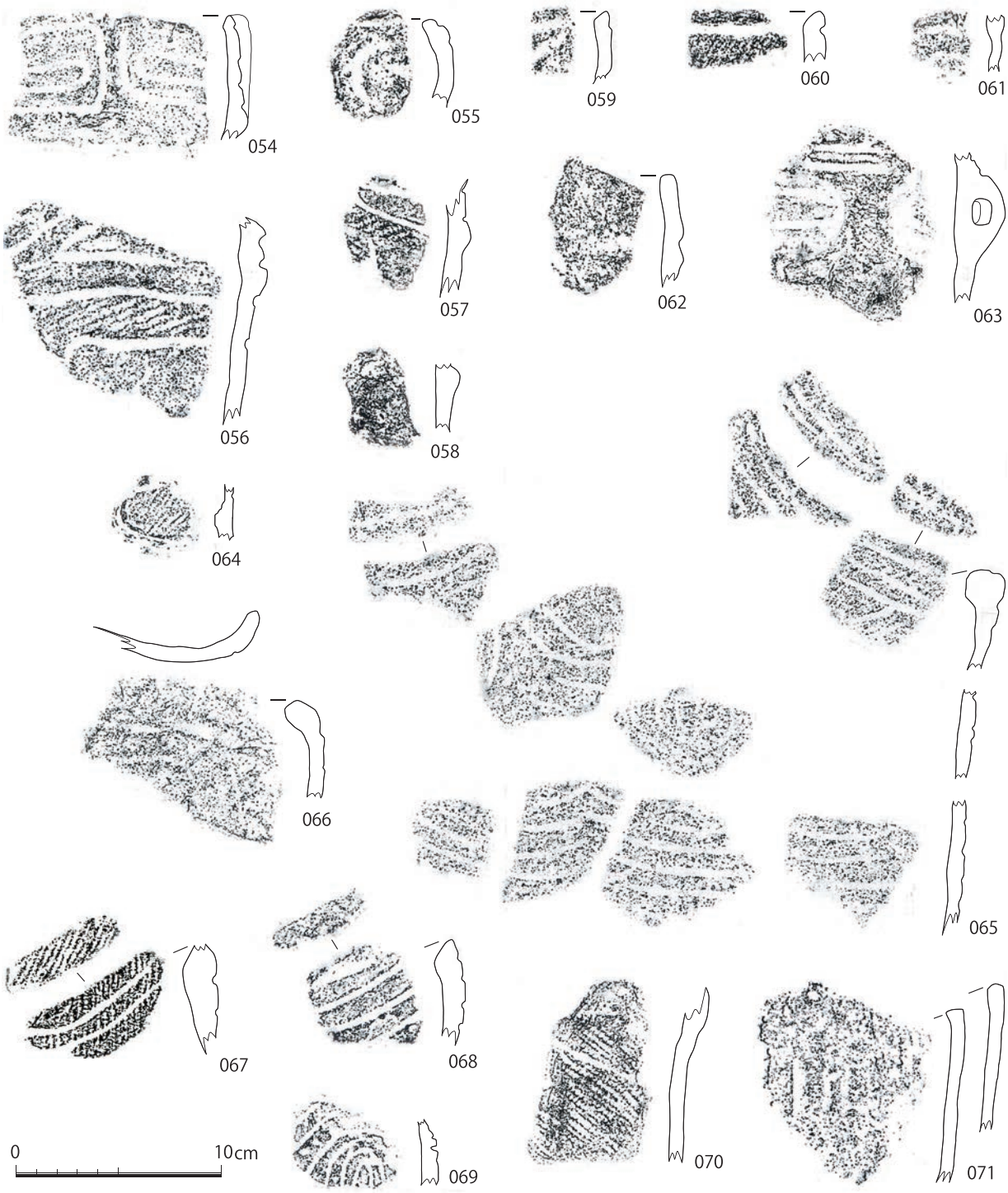
深鉢Ｂ類のうち、楕円形区画文のつなぎ部が、橋状把手となる土器。

063は、把手部およびそれ以下の胴部に縄文(LR?)を施している。つなぎ文部に、隆帯と沈線とで楕円形区画文をつくる。区画内は無文である。また、口端直下に２条の横走沈線を施す。

深鉢Ａ、Ｂ類　区画文部片（064）

深鉢Ａ、Ｂ類にみられる区画文部の破片。小破片ゆえに、Ａ、Ｂ類のどちらか断定できない。

064は、沈線による楕円形区画の内側に縄文(RL?)を施す。蛇行沈線を施す胴部の可能性もある。



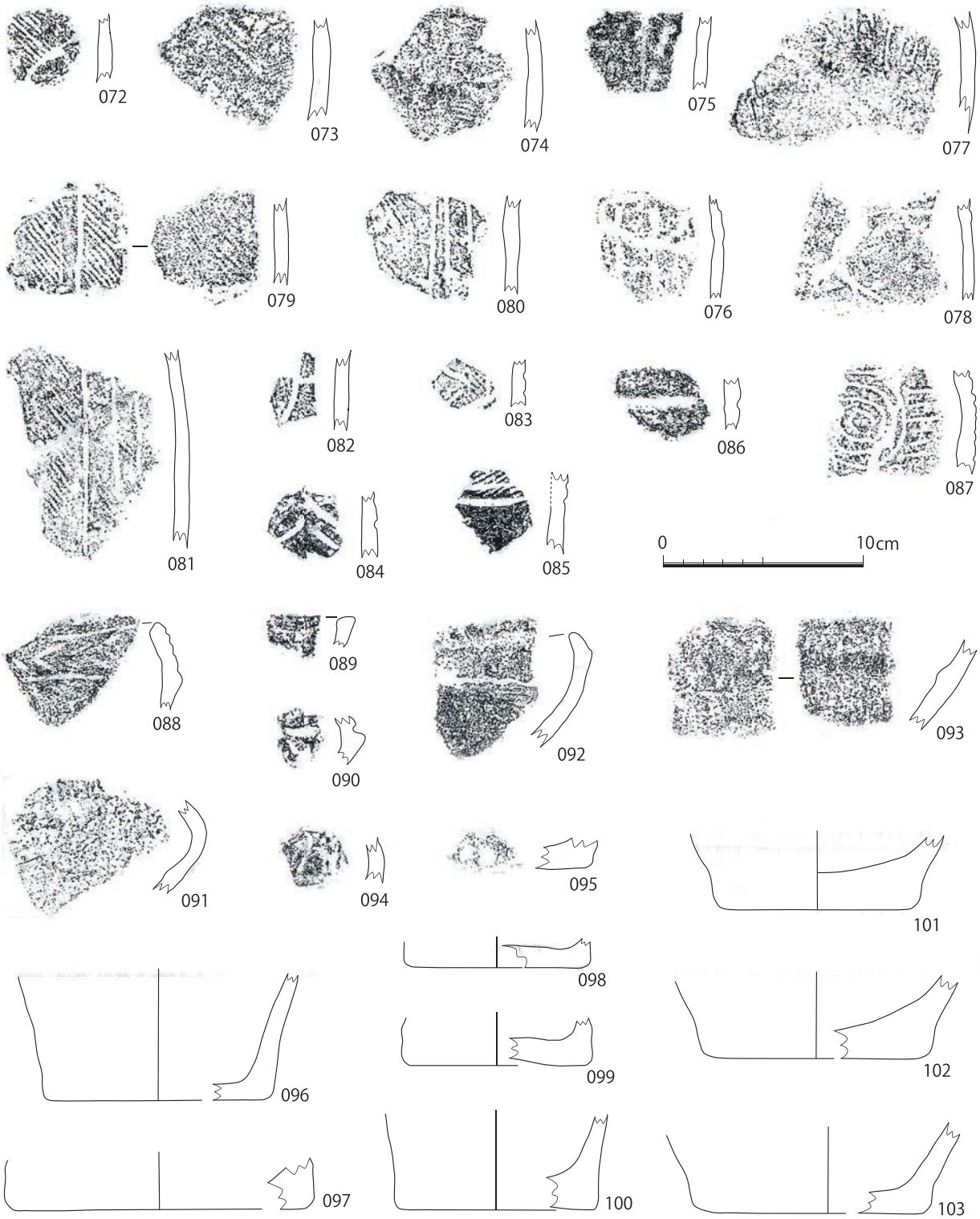
第21図　06017－１区 13 出土縄文土器(1)

深鉢Ｃ類（065 ～ 069）

深鉢C2類（065）

深鉢Ｃ類のうち、口端に１条の沈線を施す土器。

065は、口端を内側に肥厚させ、端面に沈線を１条施す。外面には、口縁に沿って３条の沈線を引き、沈線間に縄文(LR?)を施す。同一個体と考えられる破片が多くありながら接合はできず、正確に文様構成を把握することはできないが、山形口縁の波頂部下に渦巻文を主文様として描き、その下に４(または５)条の連弧状沈線を施したものと思われる。浅鉢になる可能性もある。



第22図　06017－１区 13 出土縄文土器(2)

深鉢C3類（066 ～ 068）

066は波頂部。口端を内側に肥厚させる。摩滅が激しいため断定は避けるが、口縁に沿って２条の沈線を施していると考えられる。067は、口縁に沿って３条の沈線を引いたのち、縄文(LR)を施す。口端がやや内側に傾き、端面にも縄文を施す。また、口端に向かって器壁の厚さが増す。068は、口縁に沿って４条の沈線を施す。口端は内側に傾き、端面に縄文(LR?)を施す。

深鉢Ｃ類胴部（069）

069は、やや縦長の楕円形渦巻文（または同心円文）と口縁に沿った沈線とが組み合わさった文様が施されている。渦巻文と口縁に平行する沈線との間には刺突が施されている。

深鉢Ｄ類（070）

縄文だけで器面を飾る土器。

070は、頸部がやや外反しつつも、肥厚し直立する口縁部をもつ。縄文（LR）を口縁部では横に、胴部では縦に転がして施している。口端を欠いており、深鉢A1、A2類の頸部以下の破片である可能性もある。

深鉢Ｆ類（071）

無文の深鉢。

071は、口縁部に小突起をもつ。残存形状からは、浅鉢ではなく深鉢になると考えられる。

胴部（072 ～ 087）

胴部ⅰ類（072 ～ 083）

072 ～ 074は縄文帯のみがみられる。いずれも縄文（LR）を縦方向に施しているようだ。

075 ～ 078は沈線のみがみられる。075は１条、076は２（または３）条、077は８条の垂下沈線が施されている。077のような、多くの沈線が密に施されるものは類例が少ない。078には大きく蛇行垂下する沈線が１条施されている。

079 ～ 083は縄文帯、沈線の両方がみられる。079は、外面に縄文（LR）および２条の垂下沈線を施している。内面にも縄文を施している類例の少ないものである。080 ～ 082には、３条の垂下沈線がみられ、沈線間や沈線の脇に縄文（LR）が施されている。082は、左２条の沈線がやや曲がっており、曲線的な文様を描く可能性もある。083は、蛇行沈線１条と垂下沈線１条の間に縄文（LR）を施している。

胴部ⅱ類（084、085）

084、085には、連弧状沈線が２条施されている。085の沈線間には縄文（LR?）が施されている。

胴部ⅲ類（086、087）

胴部ⅰ、ⅱ類に含まれないものを一括して胴部ⅲ類とする。

086は横方向の沈線が１条見られる。垂下沈線になる可能性もある。087は横方向の沈線８条、円、渦巻文を組み合せた文様をもつ。中期末以外の時期の土器である可能性がある。

浅鉢Ａ類（088 ～ 091）

「く」字形に内折した口縁部の有文浅鉢。

088は、口縁部の縦幅が狭く、屈曲がみられることから浅鉢になると考えられる。低い隆帯（または肥厚）により、口縁部と胴部とを分け、口縁部には、沈線で区画文を形成し、区画内に２段の羽状沈線を充填する。右側に向かって区画文幅が大きくなるので、波状口縁になると考えられる。口縁部に沈線で区画文を形成することから、ひとまず浅鉢A2類として扱う。

089は小型ゆえに浅鉢と考えた。口縁に沿って１条の沈線を施している。090は口縁部に沈線を１条施す。091は口縁部に、区画文をつくる１条の沈線のほかに、垂下する３条の短沈線と１条の横方向の沈線が施されている。壷のような器形になる可能性もある。

浅鉢Ｂ類（092）

口縁部が「く」字形に内折した無文の浅鉢。

092は口縁部が屈曲し、短く立ち上がる。右側で口縁部幅がやや広がっており、波状口縁になる可能性がある。中期末以外の時期の土器である可能性もある。

浅鉢Ｃ類（093）

外反する口縁の浅鉢で、口縁内面に文様帯を有する浅鉢。

浅鉢C3類（093）

内面肥厚帯が無文の土器

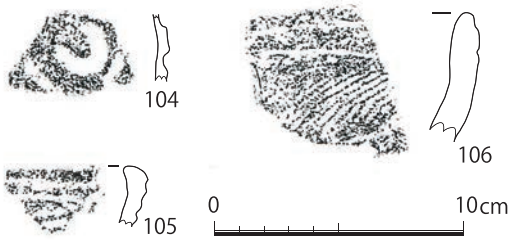
093は外面が無文で、内面に１条の凸帯を有している。

器種不明（094、095）

094には、貼り付けられていた粘土の剥がれた痕跡がみられる。095の外面には指頭圧痕が２ヵ所認められる。台付深鉢の台上部になる可能性がある。

底部（096 ～ 103）

099がやや凹底気味になる以外は全て平底になる。096 ～ 100は直線的に立ち上がり、101 ～ 103は底面直上でややくびれる。



第23図　06017－１区 14 出土縄文土器

06017－１区14出土縄文土器

（104 ～ 106　第23図、表３－５、図版30）

06017－１区14からは、８点の縄文土器が出土した。

胴部（104）

104は胴部ⅱ類。渦巻文が施されている。

浅鉢Ａ類（105）

浅鉢A1類（105）

浅鉢Ａ類のうち、多条の沈線で口縁部文様を描く土器。

105は口縁部に沈線を４条施し、口端を内側にやや肥厚させている。波状口縁の可能性もある。小型ゆえに浅鉢と考えたが、深鉢C3類になる可能性もある。

浅鉢Ｅ類（106）

屈曲がみられず、椀形になるものを浅鉢Ｅ類とする。

106は、残存形状から見る限り、椀形になると考えられる。口縁下に１(または２)条の横方向の沈線を引き､沈線以下に縄文(RL?)を施す。中期末では有文の椀形浅鉢がほとんど見られないため、時期の下るものの混入である可能性もある。

中期末の遺構面(1)ベース土内出土縄文土器

02020－１、２区出土縄文土器（107 ～ 142　第24図、表３－５，６、図版26）

02020－１、２区からは、318点の縄文土器が出土した。

深鉢Ａ類（107 ～ 114）

深鉢A1類（107 ～ 112）

107は、口縁部に沈線を伴う隆帯が曲線的に施されている。区画文内には、沈線による文様を施しているが、残りが悪く文様構成の全容はよく分からない。胴部には、垂下沈線が７条みられ、右端の１条は上端を右方へ屈曲させている。この沈線の脇に縄文を転がしたような凹みがみられるが、浅く不明瞭でよく分からない。108は、隆帯と沈線とで区画文をつくり、区画文内に羽状沈線を充填する。隆帯上には縄文(RL?)を施している。主文様を欠くことから、ひとまず深鉢A1類eとして扱う。109は、やや内湾する口縁部で、口端がやや内側を向き、端面に縄文(LR)を施している。外面には横方向に２条の沈線を施す。上方の沈線と口端との間には縄文を施し、沈線間は無文としている。深鉢A1類の口縁部区画文部であると考えるが、深鉢A6類の口縁部である可能性もある。

110は、口縁部と胴部とを区分する隆帯が右方で上へ曲がる。浅いため断定はできないが、押し引き沈線を伴い、口縁部区画文を形成したものと思われる。111は、口縁部に隆帯と沈線とにより区画文を作る。隆帯および沈線が右上がりになっており、主文様部近くの破片であると考えられる。胴部には隆帯直下に横方向の沈線が１条みられる。112は隆帯より上に２条の横方向の沈線がみられる。区画文をつくる沈線の一部の可能性がある。

深鉢A6類（113、114）

113は口端が内側に傾く。口縁直下に３条の連弧状沈線を施し、連弧の集束点の下には垂下沈線を施したようだ。外面および端面に縄文(LR?)を施したような凹みが見られるが、摩滅のため断定できない。口縁部文様が消失していることから、深鉢A6類としたが、連弧文を重視するなら深鉢A4類とすべきかもしれない。また、深鉢Ｃ類の可能性も残している。114は口端直下に横方向の沈線を１条施す。

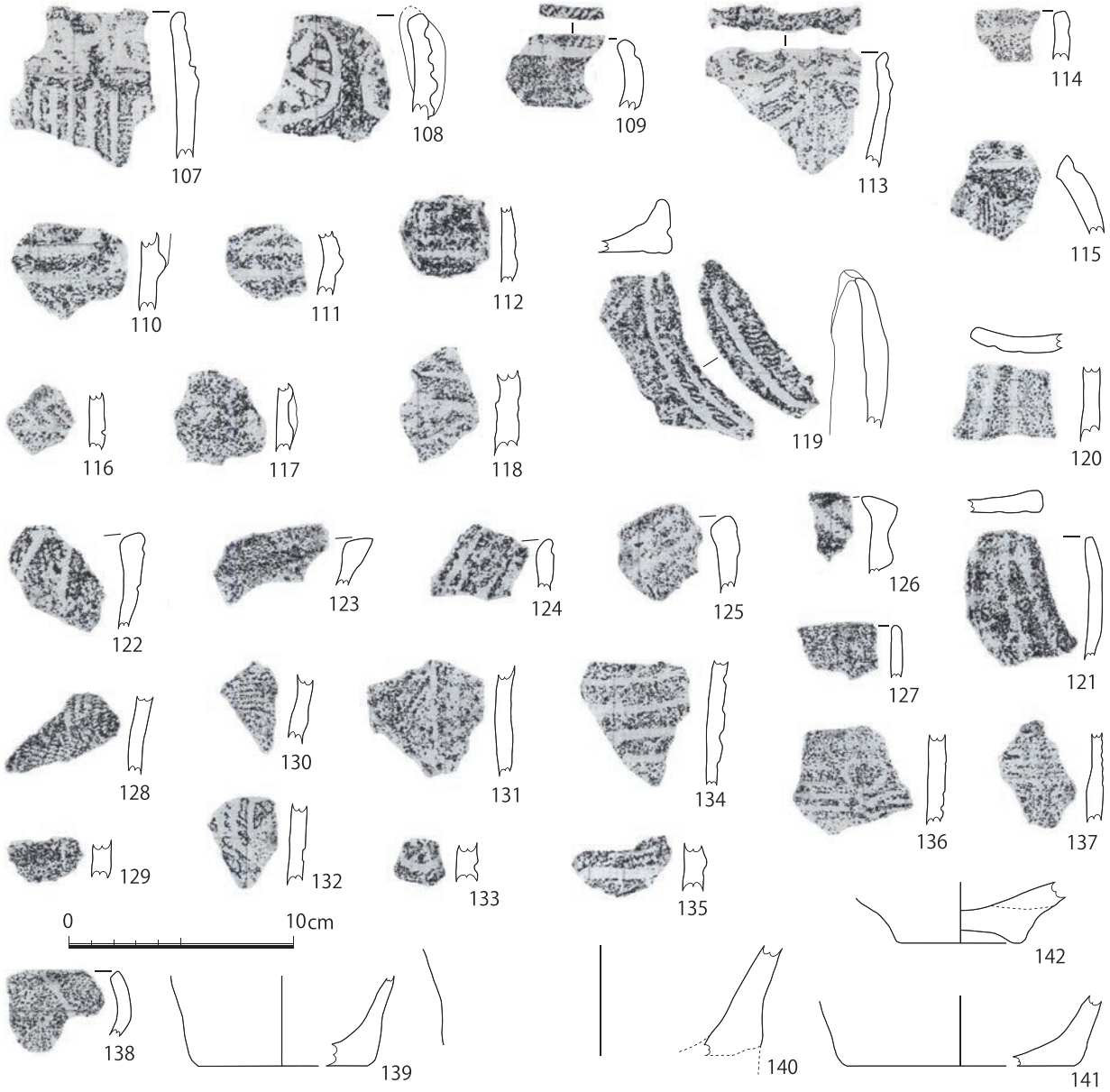
深鉢Ｂ類（115）

深鉢B1類（115）

115は、橋状把手の把手上半部か。上部にやや右上がりの短沈線を１条施し、その下に縄文(RL?)を施している。

深鉢Ａ、Ｂ類　区画文部片（116 ～ 118）

116は横方向の２条の沈線により区画文をつくり、区画文内に羽状沈線を充填する。117は隆帯のみで区画文をつくる。区画文内は無文としている。隆帯間が狭いため、深鉢Ｂ類の可能性がある。118は沈線により円形の区画文を描き、区画文内に右下がりの短沈線を充填している。深鉢Ｃ類の可能性もある。



第24図　02020－１、２区出土縄文土器

深鉢Ｃ類（119 ～ 126）

深鉢C2類（119）

119は波頂部。波頂部右端が小突起状を呈する。口端を内側に折り曲げ、端面に上端を渦巻状にした１条の沈線と縄文(LR?)を施す。外面には口縁に沿って２条の沈線を引き、沈線の周囲には縄文を施している。

深鉢C3類（120 ～ 126）

120は、口端に肥厚がみられず、口縁に沿って２条の沈線を施している。121は、口端がやや内側に厚みを増す。口縁に沿って２条の沈線を施している。122は、口端が肥厚し、口縁に沿うような沈線と垂下沈線の間に縄文(LR?)を施す。123は、口端が内側に肥厚し、内側に傾く。口縁に沿って１(または２)条の沈線を施す。124は､口端がやや厚みを増す。口縁に沿って２(または３)条の沈線を施している。口端に縄文を施したと思われる凹みがみられるが、摩滅が激しくよく分

からない。125は、口縁部がやや肥厚し、口縁に沿って２条の沈線を施す。126は、口端を内側に拡張させる。口縁部外面には、隆帯らしき高まりが確認できる。

深鉢Ｆ類（127）

127は、薄手で口端が丸く、直口気味となることから、後期中葉以降に下る可能性がある。

胴部（128 ～ 137）

胴部ⅰ類（128 ～ 132）

128は縄文帯のみがみられる。縄文原体はRLか、巻貝擬縄文のようにも見える。

129は沈線のみがみられる。垂下沈線を１条施す。

130 ～ 132は縄文帯、沈線の両方がみられる。130は縄文(LR)帯、垂下沈線１条を施す。131は縄文(RL)帯、垂下沈線１条を施す。132は３条の垂下沈線のうち、右２条が下端で右へ曲がり、左１条が左へ曲がる。垂下沈線間をつなぎ、区画文内を無文とする胴部区画文の下端部と考えられる。沈線間には縄文(LR)を施している。

胴部ⅱ類（133、134）

133には、曲線的な文様を描くと考えられる２条の沈線が施されている。

134は５条の連弧状沈線を施す。沈線間に縄文(RL?)を施したように見えるが、摩滅のためよく分からない。

胴部ⅲ類（135 ～ 137）

135は横方向の沈線を２条施す。沈線の左側には縄文(LR)が施されている。136は中心部に円を描き、その下に下方向の矢羽状沈線を施す。この中心部文様の左右に４条ずつ横方向に多重沈線を施す。137は横方向に７(８?)条の多重沈線を施す。上半分は内湾気味で、器壁が薄くなっている。136、137は中期末以外の時期の土器である可能性がある。

浅鉢Ｂ類（138）

138は、やや内湾気味であり、口端が内側に傾いている。

底部（139 ～ 142）

139 ～ 141は平底。いずれも底面直上でややくびれる。142は凹底、後期中葉以降に下る可能性が高い。

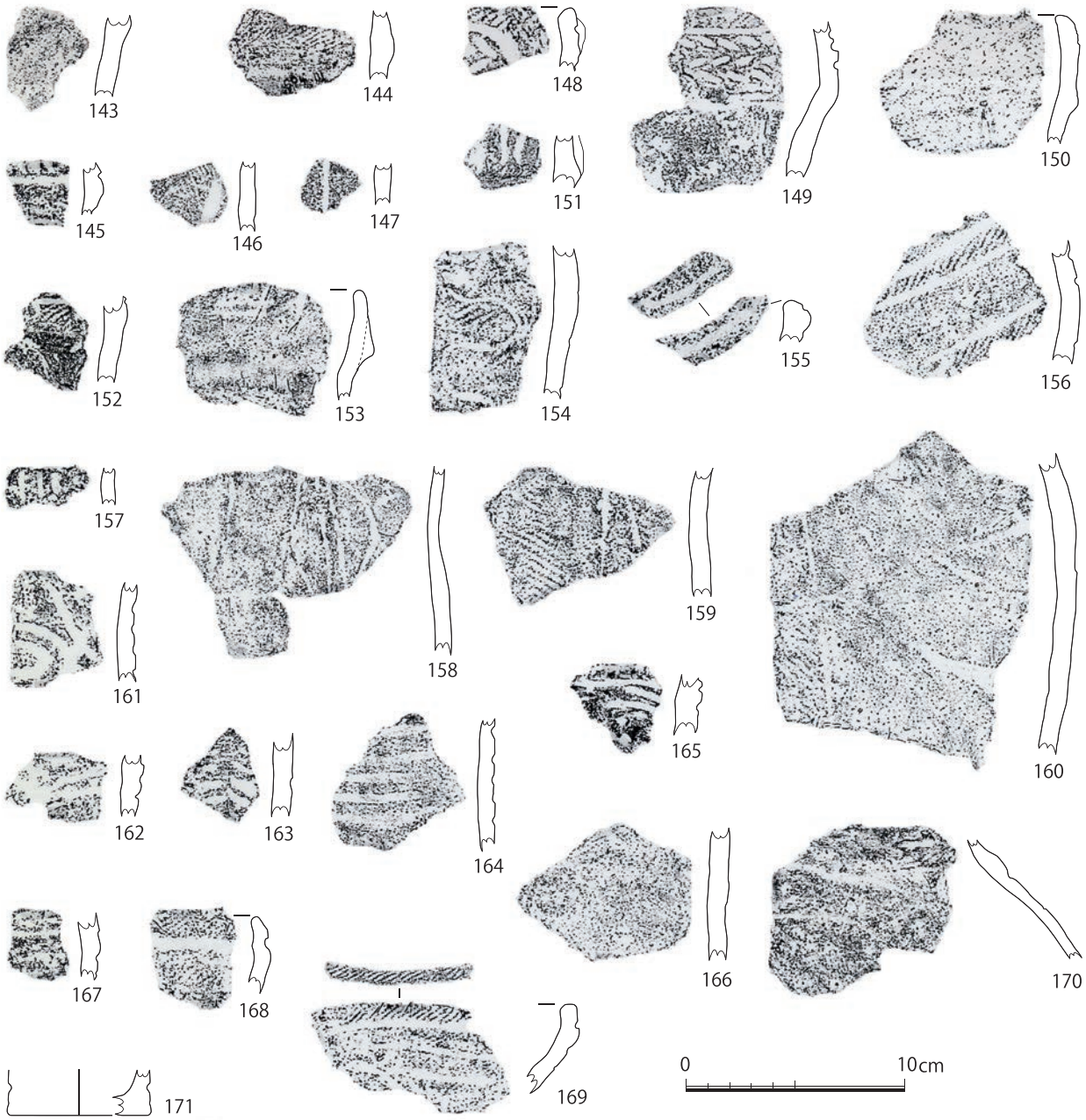
06017－１区第６層出土縄文土器（143 ～ 147　第25図、表３－６、図版27）

06017－１区第６層からは、29点の縄文土器が出土した。

深鉢Ａ類（143、144）

深鉢A1類（143、144）

143は、口縁部外面に、横方向に蛇行する隆帯が施されている。このような深鉢をひとまず、深鉢A1類gとする。144は、口縁部に横方向の縄文(LR?)を施している。深鉢D2類である可能性もある。



第25図　06017－１区第６、７層出土縄文土器

深鉢Ａ、Ｂ類　区画文部片（145）

145は隆帯の上下に横方向の沈線を施し、区画文部に左下がりの短沈線を充填している。

胴部（146、147）

胴部ｉ類（146、147）

146は縄文帯のみがみられる。縄文(LR?)を施す。

147は縄文帯、沈線の両方がみられる。１条の垂下沈線と縄文を施す。縄文原体は摩滅のためよく分からない。

06017－１区第７層出土縄文土器（148～171　第25、表３－６，７、図版27）

06017－１区第７層からは、176点の縄文土器が出土した。

深鉢Ａ類（148 ～ 154）

深鉢A1類（148 ～ 153）

148は、隆帯と沈線とで区画文をつくり、区画内には羽状沈線を充填する。口端直下に縄文(LR)を施す。149は、口端直下に縄文(LR)を施す。口縁部に沈線で区画文をつくり、区画文内に羽状沈線を充填する。本来、隆帯を施していたと考えられる部分は剥離している。胴部に垂下沈線を２条施す。150は、沈線により区画文をつくり、区画文内に羽状沈線を充填する。151は、隆帯上に縄文(LR)を施す。やや高めの隆帯により区画文間を分け、つなぎ文部と考えられるところに、垂下短沈線を充填する。152は、隆帯上に縄文(LR)を施す。口縁部には横方向の沈線１条、胴部には垂下沈線を１条施す。153は、幅広く肥厚させた口縁部に弧状沈線を施す。胴部に施文はみられない。別器種に分類すべきかもしれないが、類例がないため、ひとまず深鉢A1類とした。

深鉢A6類（154）

154は、口縁部から胴部にかけて蛇行沈線を１条施す。上半部が内湾気味に肥厚し、この部分のみに縄文(LR)が施されている。蛇行沈線の左側に垂下沈線と思われる沈線が１条みられる。

深鉢Ｃ類（155、156）

深鉢C2類（155）

155は口端を内側に肥厚させ、端面に沈線を１条施す。外面には口縁に沿う沈線を１条施す。

深鉢C3類（156）

156は口縁に沿う２条の沈線間に縄文(LR?)を施した縄文帯が２つ存在する。口端を欠いており、他器種である可能性もある。

胴部（157 ～ 166）

胴部ⅰ類（157 ～ 160）

157、158は沈線のみがみられる。157は垂下沈線を３条施す。158は右端の１条が蛇行し、残りの４条は２条１単位の垂下沈線束となる。これらの沈線束間に、上弦の弧状沈線を施すことで、胴部区画文をつくる。

159、160は縄文帯、沈線の両方がみられる。159は垂下沈線１条、垂下縄文帯(LR?)１条を施す。160は垂下沈線を１条施し、この脇に縄文帯を施したようだが、浅いためよく分からない。また、これとは別の縄文帯(LR?)が１条施されている。

胴部ⅱ類（161 ～ 164）

161は、渦巻文と２条の沈線を施す。この沈線が口縁に沿うものとなり、深鉢Ｃ類の口縁部である可能性もある。

162は３条、163、164は５条の連弧状沈線が施されている。

胴部ⅲ類（165、166）

165は横方向に４条の沈線を施す。166には、何かしらの施文具によると思われる擦痕が部分的にみられる。

浅鉢Ａ類（167 ～ 169）

167は、口端を欠いている。口縁部外面には、刺突列を２段配し、その下に横方向の沈線を１条施している。やや小型であることから浅鉢と考えた。168は、口端直下に横方向の沈線を１条引いており、口端との間に縄文(LR)を施している。169は、口縁部が短く立ち上がり、端面に縄文(LR)を施している。口端直下に横方向の沈線を１条引き、口端との間に縄文を施している。体部には、横方向の沈線２条と、渦巻文の一部と考えられる曲線的な沈線が見られる。椀形である可能性もある。

器種不明（170）

170は、隆帯により口縁部と胴部とを区分し、隆帯上に縄文(LR)を施す。胴部には曲線的な沈線が２条みられる。壺のような器形になる可能性がある。

底部（171）

171は平底。側面に横方向の沈線を１条施している。

06017－１区第８層出土縄文土器（172 ～ 216　第26図、表３－７～９、図版28）

06017－１区第８層からは、308点の縄文土器が出土した。

深鉢Ａ類（172 ～ 176）

深鉢A1類（172 ～ 174）

172は、口端を短く内折させる。隆帯と沈線とにより渦巻区画文をつくるもの(深鉢A1類b)と考えられる。隆帯上および隆帯と隆帯との間の空白域に刺突を充填させる。残存部位は主文様部となる渦巻文の一部と考えられる。173は、その残存部分には文様がみられない。174は、胴部に垂下沈線を２条施し、そのうち１条は上端を弧状に曲げている。

深鉢A6類（175、176）

175は、口端直下にやや曲線的な横方向の沈線を１条施す。176は、横方向の２条の沈線の間に縄文(LR?)を施している。

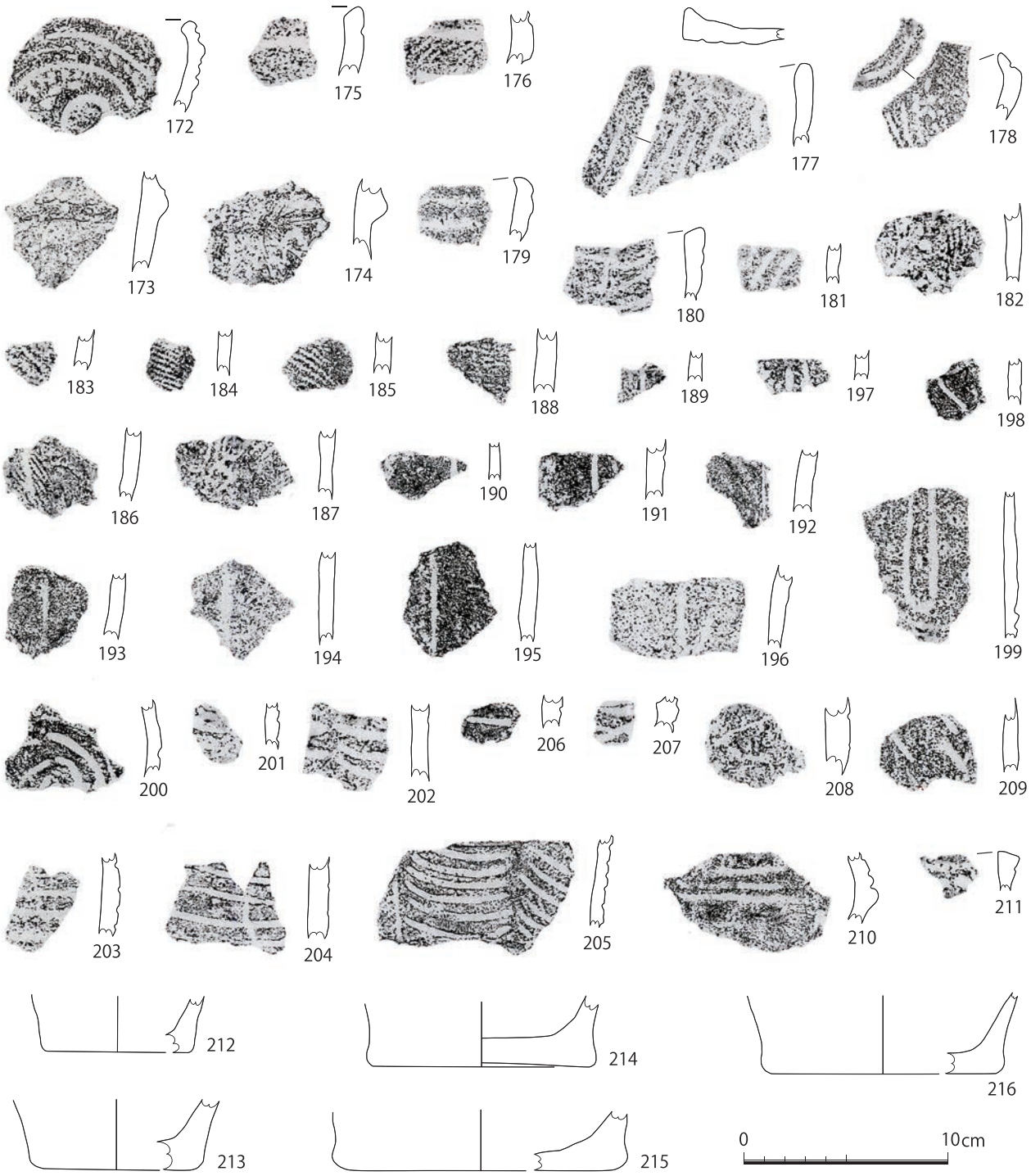
深鉢Ｃ類（177 ～ 181）

深鉢C2類（177、178）

177は波頂部。口端を内側に肥厚させ、端面に１条の沈線を施す。外面には、口縁に沿って５条の沈線が施され、曲線的な文様と考えられる中心部文様の上端がわずかにみえる。178は、口端を内折させ、端面に１条の沈線を施す。外面に３条の垂下沈線、２列の垂下刺突列、垂下縄文帯(LR)を施す。口縁の形状に沿わず独立して縦方向に展開する文様構成となる可能性があり、類例を知らない。

深鉢C3類（179、180）

179は口端を内側に肥厚させる。口縁に沿って２条の沈線を施す。180は、口端に向かうにつれ器壁の厚さが増す。口縁に沿って３条の沈線を施す。



第26図　06017－１区第８層出土縄文土器

深鉢Ｃ類胴部（181）

181内面に屈曲がみられ、深鉢Ｃ類の口縁に沿った３条の沈線が施されたものと考えられる。

深鉢Ｄ類（182）

深鉢D1類（182）

深鉢Ｄ類のうち、直口ないし、やや外反した口縁の土器。

182は縄文(RL)を上半では横方向に、下半では縦方向に施す。内面がわずかに内湾し、口端を欠く深鉢D1類の口縁部と考えた。

胴部（183 ～ 209）

胴部ⅰ類（183 ～ 199）

183 ～ 188は１条の垂下縄文帯のみがみられる。このうち、183 ～ 187はLR。188は、節が確認できないほど浅く施されているため原体は特定し難いが、RLの可能性がある。

189 ～ 199は沈線のみがみられる。189 ～ 196は１条、197は２条の垂下沈線が施されている。198は蛇行沈線を１条施す。199は２条の垂下沈線を下端で結び、さらにその下に横方向の沈線を１条施している。

胴部ⅱ類（200 ～ 205）

200は渦巻文の一部か。沈線は破線状を呈する。沈線間に縄文(LR?)を施したような凹みがみられるが、浅いため原体を断定できない。

201 ～ 205は連弧状沈線がみられる。201、202は３条、203、204は４条、205は７条の連弧状沈線が施されている。203は垂下沈線となる可能性もある。205は連弧状沈線だけでなく、縄文(RL)を伴う１条の垂下沈線も施される。縄文は連弧文内にも部分的に施されている。

胴部ⅲ類（206 ～ 209）

206は１条、207は２条、横方向の沈線が施されている。206は連弧文の一部である可能性もある。208は、横方向と右上がりする沈線がそれぞれ１条施されている。209は右下がりの短沈線４条、左下がりの短沈線１条がみられ、羽状に短沈線を施していた可能性がある。

浅鉢Ａ類（210、211）

浅鉢A1類（210）

210は口端を欠いている。口縁部に横方向の沈線が３条施されているが、これらは左側で上に曲がっており、この破片の左側に主文様部があったものと考えられる。右端に縄文(LR?)が部分的にみられる。

浅鉢A3類（211）

浅鉢Ａ類のうち、つなぎ部の文様に刺突を用いる土器。

211は、小型で口端直下に刺突がみられることから、浅鉢A3類と考えた。他器種である可能性もある。

底部（212 ～ 216）

いずれも平底。212、213は直線的に立ち上がり、214 ～ 216は底面直上でややくびれる。

中期末の遺構面(2)検出遺構出土縄文土器

06017－１区炭集積１(SX10)出土縄文土器（217 ～ 224　第27図、表３－９,10、図版29）

06017－１区炭集積１(SX10)からは、47点の縄文土器が出土した。

深鉢Ａ類（217、218）

深鉢A1類（217、218）

217は、隆帯と沈線とにより区画文間を区分する。胴部には、垂下沈線を１条、その脇に縄文(LR)を施している。218は、明らかな隆帯はみられないが、口縁部と胴部との境が、やや肥厚し屈曲している。口縁部に、２条の沈線により区画文をつくる。区画文内には羽状沈線を充填する。波状口縁。浅鉢の可能性もある。

深鉢Ｃ類（219）

深鉢C3類（219）

219は口縁に沿って２条の沈線が施されている。

胴部（220 ～ 222）

胴部ⅰ類（220）

220は１条の縄文(LR)帯を施している。

胴部ⅱ類（221）

221は渦巻文を描いたのち、縄文(LR)を施す。

胴部ⅲ類（222）

222は縄文原体と思われるもので凹んだ痕跡と、何かしらの施文具による擦痕が見られる。

浅鉢Ｃ類（223）

浅鉢C3類（223）

223は、口縁部内面を肥厚させる。外面に曲線的な文様の一部であると思われる沈線が１条施されている。

浅鉢Ｄ類（224）

無文の浅鉢で、皿形を呈するもの。

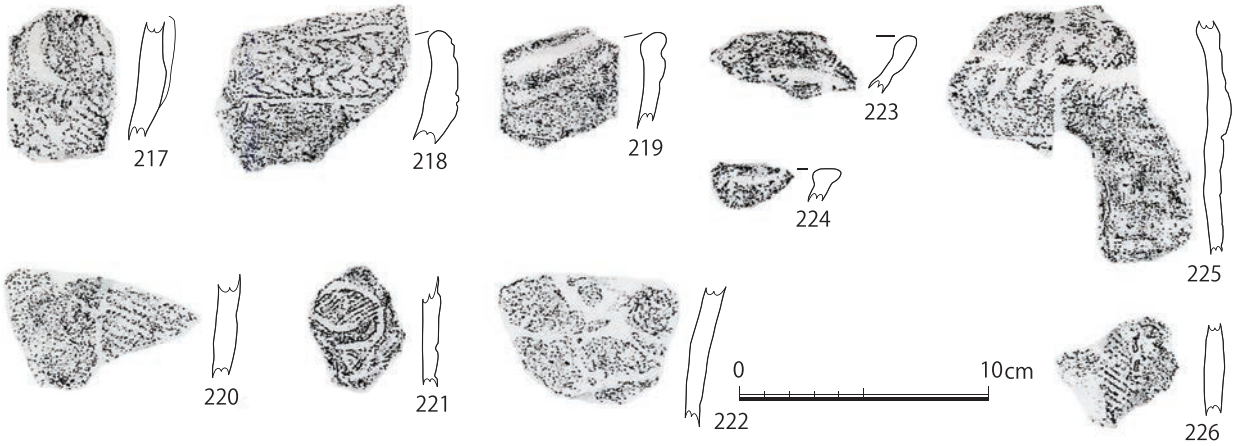
224は皿形になるとは限らないが、小型で無文の浅鉢と考えられることから、ひとまず浅鉢Ｄ類に含めた。口端をナデて、口端を内外に拡張させている。

06017－１区炭集積２(北西部炭集積)出土縄文土器（225、226　第27図、表３－10、図版29）

06017－１区炭集積２(北西部炭集積)からは、39点の縄文土器が出土した。

深鉢Ａ、Ｂ類　区画文部片（225）

225は、低めの隆帯により口縁部と胴部とを区分しているようだが、摩滅のためよく分からない。２条の沈線で区画文をつくり、区画文内に右上がりの短沈線を充填する。区画文の下には、横方向の沈線を３(４)条施していたようだが、摩滅のためよく分からない。



第27図　06017－１区炭集積１（SX10）・北西部炭集積２出土縄文土器

胴部（226）

胴部ｉ類（226）

226には、１条の縄文(LR)帯が施されている。

06017－１区30出土縄文土器（227 ～ 248　第28図、表３－10、図版30）

06017－１区30からは、129点の縄文土器が出土した。

深鉢Ａ類（227 ～ 234）

深鉢A1類（227 ～ 229）

227は、やや波状を呈する口縁に沿って１条の沈線を施し、その下に１条の沈線を伴う隆帯で渦巻区画文をつくる(深鉢A1類b)。主文様部は渦巻文となり、つなぎ文部および、主文様部と隆帯との間にできる空白区間には、刺突を充填している。228は、やや内側に屈曲させた口端の直下約１㎝の間に縄文(LR?)を施す。その下には、渦巻もしくは多重円を描く主文様部を隆帯が囲んでいる(深鉢A1類d)。つなぎ文部には羽状沈線を充填している。主文様部が波状を呈する。229は、２条の沈線で区画文を作り、区画文内に右上がりの短沈線を充填している。波状口縁の可能性がある。

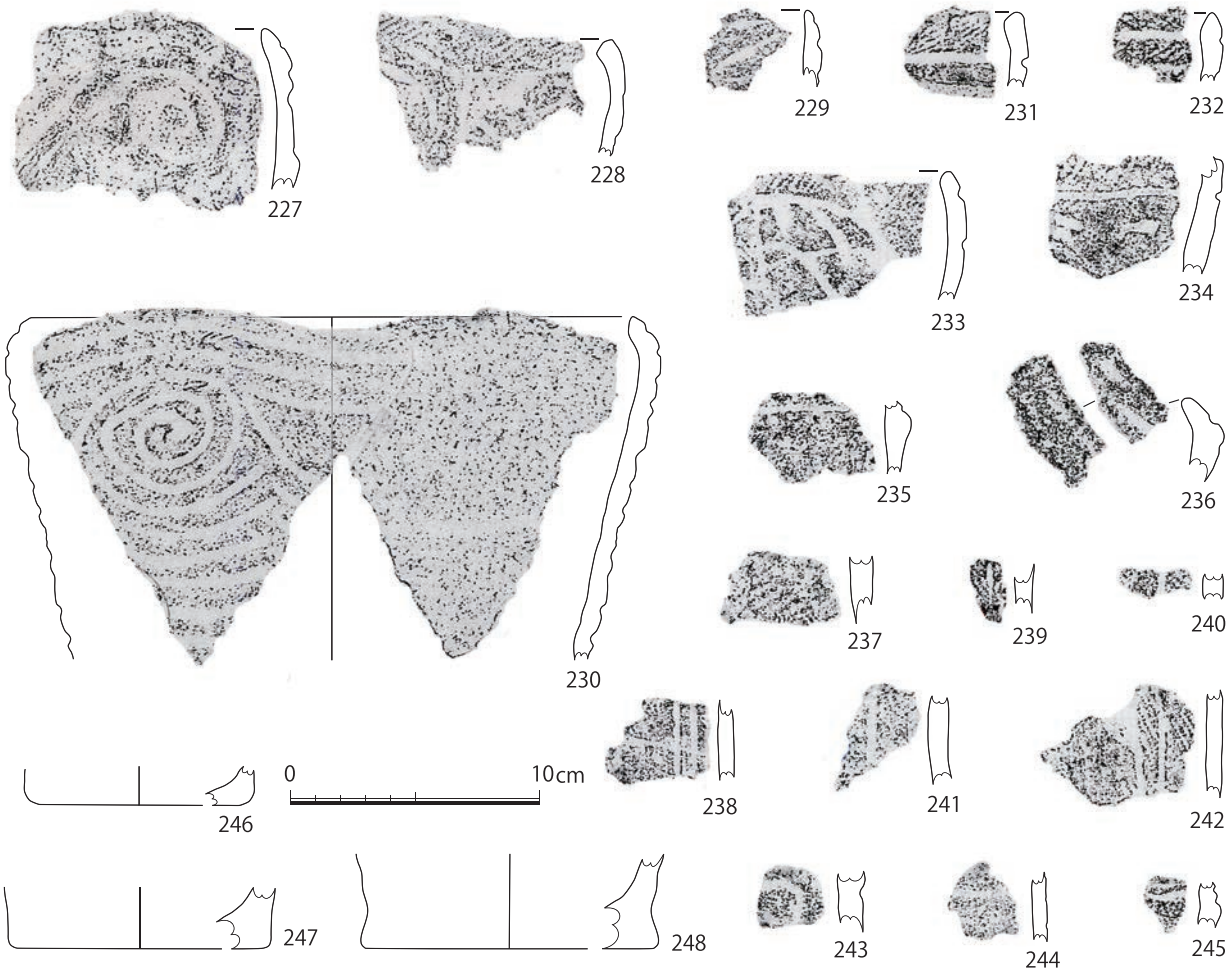
深鉢A4類（230）

深鉢Ａ類のうち、口縁部と胴部とを、多条沈線による連弧文で区分する土器。

230は､口端を内側に屈曲させ､縄文(LR)を施す。波状を呈する口縁に沿って２条の沈線を施し、その下に渦巻文と、区画内が無文の半円状区画文を連ねる。これら口縁部文様帯の下に、６条の連弧状沈線を施す。外面にも縄文を施したようだが、部分的にしか残っていない。

深鉢A6類（231 ～ 234）

231は、やや内側に屈曲する口縁部に横方向の沈線を１条引き、口端と沈線との間に無節の縄文を施す。232は、口端が内側に傾く。横方向に２条の沈線を引き、口端と沈線および沈線間に縄文(LR)を施す。233は、波状を呈する口縁に沿って縄文(LR?)帯をつくり、その下位に２条の沈線により曲線的な文様を描く。残りが悪く、文様の全容は分からない。沈線の脇にも縄文(LR?)



第28図　06017－１区 30 出土縄文土器

を施した可能性がある。242と同一個体の可能性がある。234は横方向の沈線を２条引き、沈線間に縄文(LR)を施す。上端が屈曲しており、頸部であると思われる。

深鉢Ａ、Ｂ類　区画文部片（235）

235には隆帯と横方向の沈線１条が施されている。深鉢A1類頸部の可能性もある。

深鉢Ｃ類（236）

深鉢C2類（236）

236は口端を内側に折り返し、端面に短沈線を施す。外面には口縁に沿う沈線を１条施す。

胴部（237 ～ 244）

胴部ｉ類（237 ～ 242）

237は、縄文(LR)のみがみられる。

238は、垂下沈線のみがみられ、２条施されている。

239 ～ 242は縄文、沈線の両方がみられる。239 ～ 241は、１条の沈線の脇に縄文(LR)を施している。239は条ごとに節の太さが異なり、原体は太さの異なる撚糸を撚り合わせたものと考えられる。242は、垂下沈線を２条引き、沈線の脇に縄文(LR?)を施している。233と同一個体の可能性がある。

胴部ⅱ類（243、244）

243は渦巻文、244は３条の連弧状沈線が施されている。

浅鉢Ａ類（245）

245は頸部。口縁部に２条の沈線が施されている。

底部（246 ～ 248）

全て平底。246、247は直線的に立ち上がり、248は底面直上でややくびれる。

06017－１区SU51出土縄文土器（249 ～ 270　第29, 30図、表３－11、図版31）

06017－１区SU51からは、163点の縄文土器が出土した。

深鉢Ａ類（249 ～ 251）

深鉢A1類（249、250）

249は、主文様部を隆帯で囲み、沈線により逆「凹」字状の文様を描く。つなぎ文部には隆帯に沿う沈線を施す。胴部には垂下沈線が２条施されている。250は、隆帯と沈線で区画文部をつくり、区画文内に刺突を充填する。胴部に垂下沈線を２条施し、摩滅のため断定は避けるが、蛇行沈線も施していると考えられる。

深鉢A6類（251）

251は、口端を内側に折り曲げ、端面が内側に傾斜する。口縁に沿う２（または３）条の沈線を施し、その下に２条の沈線により上弦の連弧文を描く。連弧文の周囲に、縄文(LR)の施された痕跡が部分的に残っている。縄文の施文方向は統一されていないようだ。

深鉢Ｂ類（252、253）

252は、口端から約２㎝下がったところに隆帯を施し、隆帯より上に沈線を施す。隆帯のみで形成される区画文内には刺突を充填している。

深鉢B1類（253）

253は、橋状把手の内側に沈線状の凹みが１条みられる。隆帯のみで形成される区画文内には、文様は施文されていない。

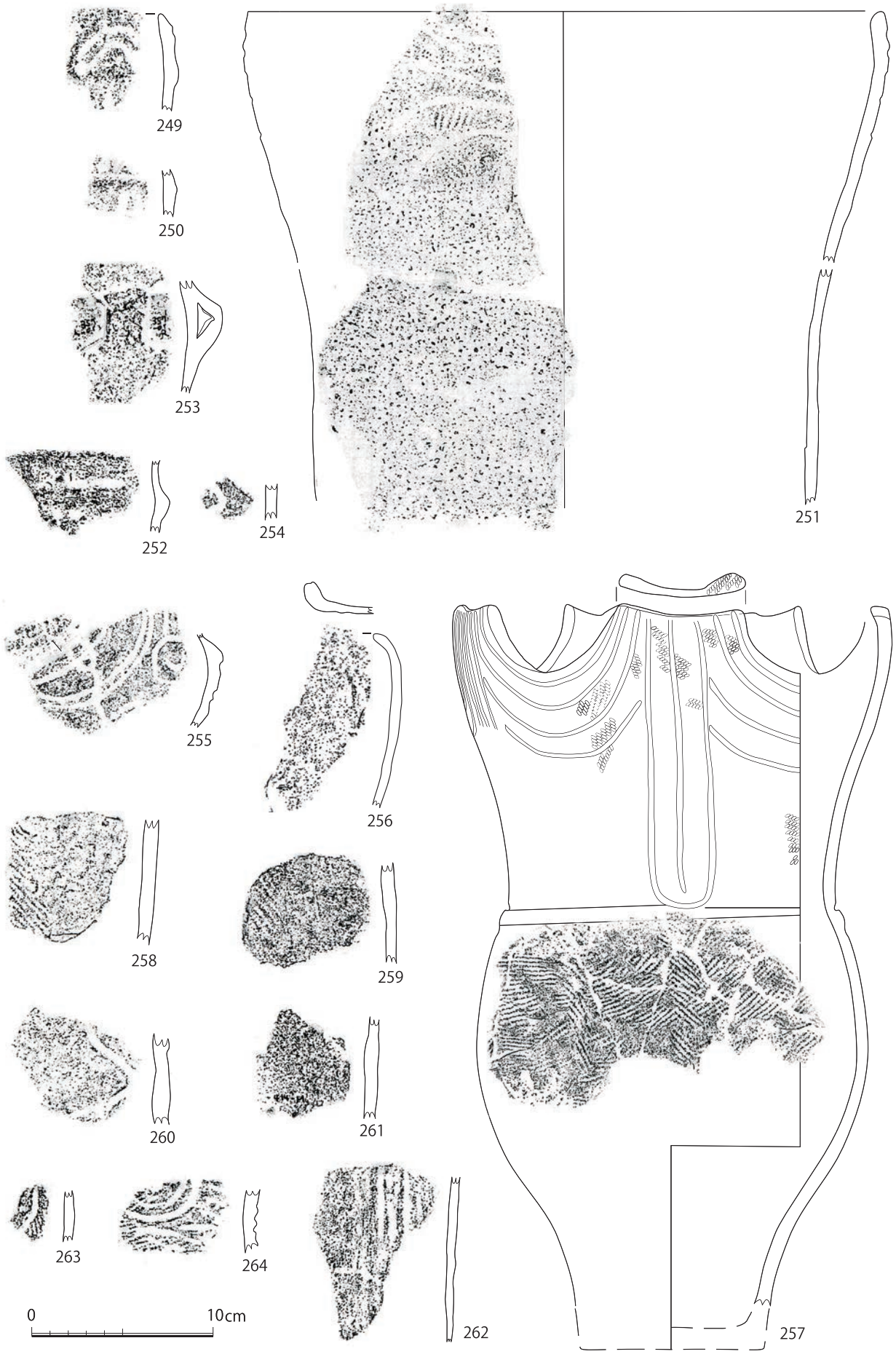
深鉢Ａ、Ｂ類　区画文部片（254）

254には、羽状沈線が施されている。

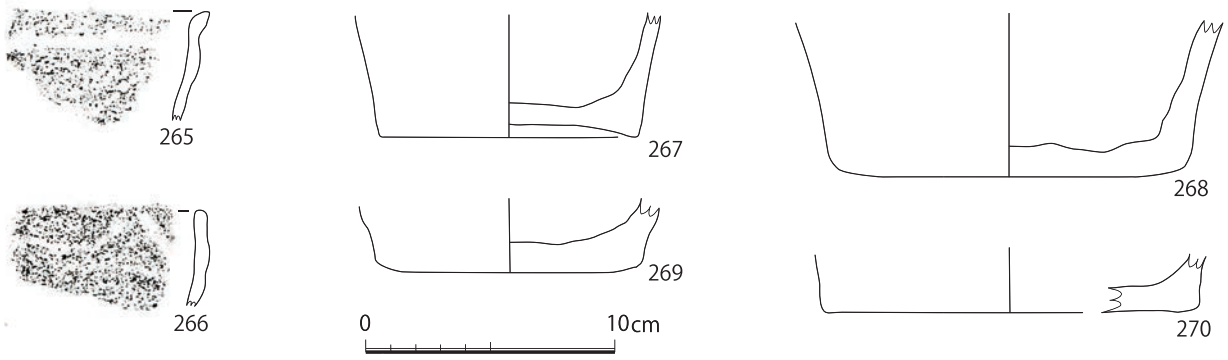
深鉢Ｃ類（255 ～ 257）

深鉢C3類（255 ～ 257）

255は、口端を内側に折り返し、端面に縄文(LR)を施している。外面には、沈線により半円形区画文と同心円文(ただし、最も内側の円はＣ字であり、一周しない)を描いている。同心円文より上に、波頂部に向かって伸びる沈線を２条施している。256は、口端を内側に折り返し、外面には口縁に沿って２条の沈線を施している。257は、底部を欠くが、ほぼ全形がわかる深鉢。５つの波頂部をもつ山形口縁であり、口径23.7㎝、残存高38.6㎝、胴部径21.9㎝。口端を内側に肥



第29図　06017－１区 SU51出土縄文土器(1)



第30図　06017－１区 SU51出土縄文土器(2)

厚させ、端面に縄文(LR)を施している。山形口縁の波頂部から３本の垂下沈線を引き、屈曲部において、この沈線を連結している。波頂部間には、口縁に沿って４(もしくは５)条の沈線を施している。沈線間には縄文を施文している。波頂部と波底部とのほぼ中間の位置から、屈曲部に向けて縄文帯を垂下させている。屈曲部には１条の低い隆帯をめぐらせ、丸みを帯びる胴部には縄文を施文している。胴部の縄文は、垂直・水平方向といった施文方向が規則正しいところもあるが、様々な方向に施される統一されていないところも見受けられる。縄文は底部近くまで施されている。

胴部（258 ～ 264）

胴部ⅰ類（258 ～ 262）

258、259は、１条の垂下する縄文(LR)帯が施されている。

260は、蛇行沈線が１条施されている。

261は、縄文(LR)帯と左上がりの押引沈線が１条施されている。

262は、２本の隆帯を垂下させ、隆帯間に沈線１条と縦列刺突列を施す。また、隆帯の左側に１条、右側に２条の垂下沈線が施されている。直線的な文様であることから、胴部ⅰ類に含めたが、縦方向の隆帯をもつなど、やや特異なものである。

胴部ⅱ類（263、264）

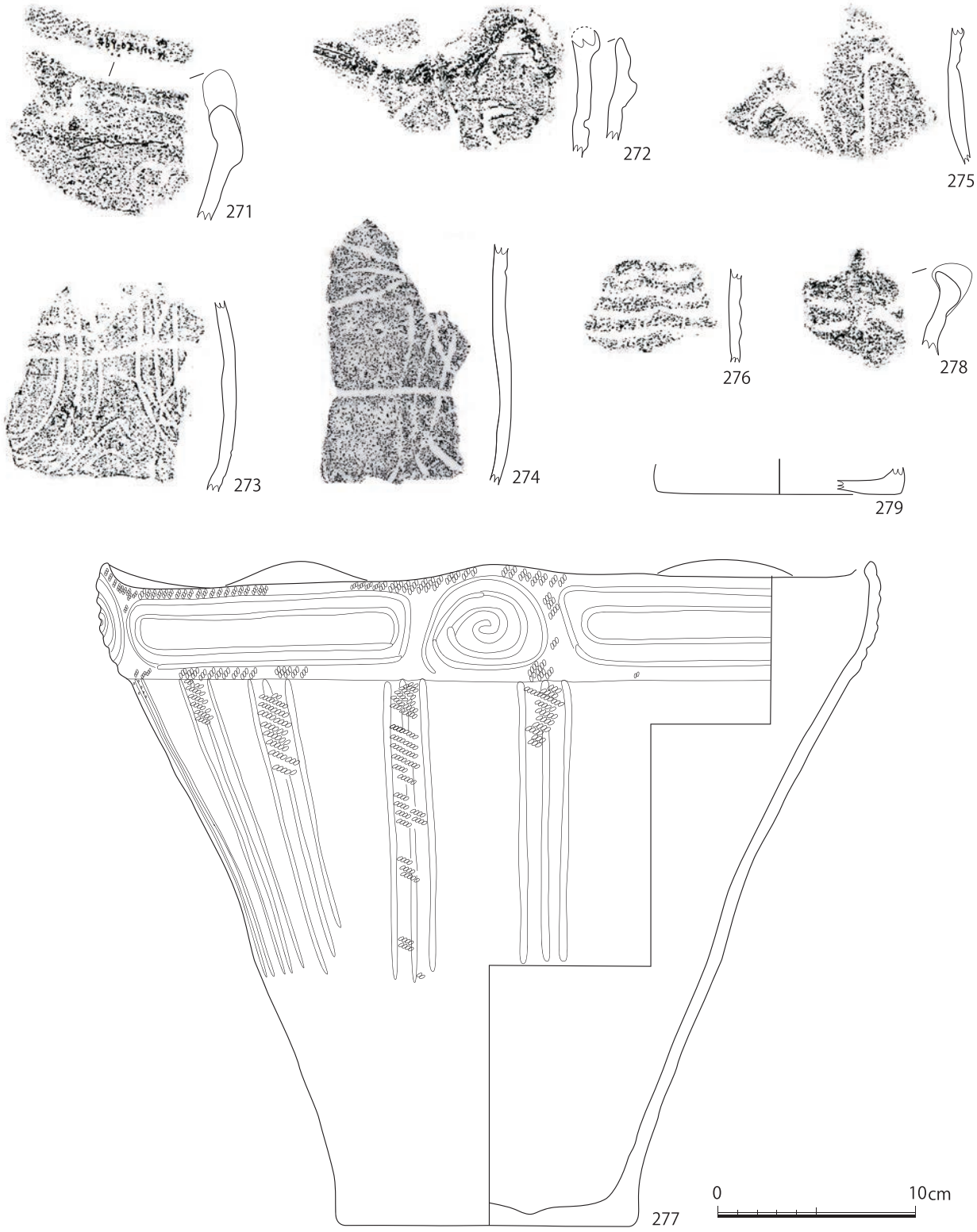
263は３条の沈線のうち、左２本の沈線が曲線的な文様を描く可能性がある。右２条の沈線間には、縄文(LR)を施している。264は、渦巻文(または同心円文)を描き、その横には４条、下には３条の横方向の沈線を施す。沈線間には、縄文(LR)を施している。

浅鉢Ｅ類（265、266）

265は、口端を外面に肥厚させ、外面には横方向の沈線を１条施している。266は、口端直下に弧状沈線を１条施す。他器種の可能性もある。

底部（267 ～ 270）

267がやや凹底になる以外は全て平底。267、268は直線的に立ち上がり、269、270は底面直上でややくびれる。



第31図　06017－１区 SU52出土縄文土器

06017－１区SU52出土縄文土器（271 ～ 279　第31図、表３－11, 12、図版32）

06017－１区SU52からは、34点の縄文土器が出土した。

深鉢Ａ類（271、272）

深鉢A1類（271、272）

271は、口端に縄文(RL)を施し、口縁部には沈線により長方形区画文を描く。区画内は無文。

ゆるやかな波状を呈し、主文様部をもつものと考えられる。胴部に「e」字状の沈線が施されているが、残りが悪く全体としての文様構成は分からない。口縁部全体が肥厚するものゆえ、厳密には深鉢A1類に該当するものではないが、ひとまずこの類で扱った。272は、深鉢A1類g。口縁部に隆帯をつけ、隆帯上に縄文(RL)を施す。隆帯より下には、蛇行沈線が２条、垂下沈線が１条施されている。

胴部（273 ～ 276）

胴部ⅰ類（273 ～ 275）

273は、沈線間に縄文(RL?)を施す３条１単位の縄文帯をハ字状に施し、その下に連弧状沈線を２条施している。274は、３条の垂下沈線の上下に、２条の弧状沈線を施し、胴部区画文を描いたものと考えられる。沈線間には縄文(LR)を施している。275は、上部に横方向の沈線を１条施し、その右には楕円形区画文を描くと考えられる沈線が施され、左下には２条の弧状沈線が施されている。

胴部ⅱ類（276）

276は、４条の連弧状沈線が施されている。

浅鉢Ａ類（277）

浅鉢A2類（277）

浅鉢Ａ類のうち、つなぎ部の文様が１、２条の区画沈線で、主文様部に渦巻文、つなぎ部に楕円形区画文を描く土器。

277は、５つの波頂部をもつ波状口縁。隆帯と沈線とで区画文をつくる。主文様部は渦巻文、つなぎ文部は二重区画文を描く。口端と隆帯上に縄文(LR)を施す。胴部に３本１単位で沈線を垂下させ、沈線間に縄文を施している。１つだけ上端を連結している沈線束があるが、これ以外は上端を連結しない。

浅鉢Ｂ類（278）

浅鉢B2類（278）

浅鉢Ｂ類のうち、幅の狭い口縁部の上下が凸帯状に肥厚し、数ヵ所に橋状把手状の突起がつくもの。

278は、口端を内側に折り曲げ、突起部をつくる。胴部には沈線により楕円形区画文を描く。典型的な浅鉢B2類から、さらに口縁部幅が狭くなった結果、口縁部に突起のみが残り、区画文の残りが体部に下がったものと考えられる。

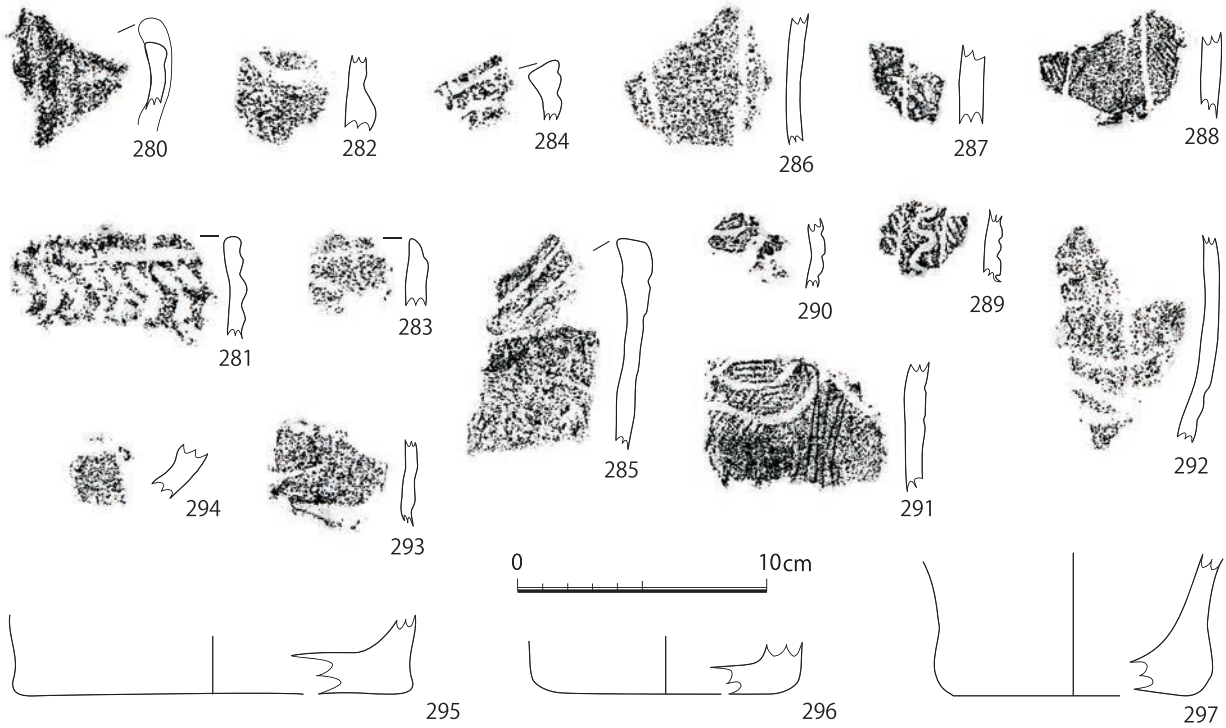
底部（279）

279は凹底の可能性がある。底面直上でややくびれる。

中期末の遺構面(2)ベース土内出土土器

02020－４区出土縄文土器（280 ～ 297　第32図、表３－12, 13、図版26）

02020－４区からは、91点の縄文土器が出土した。



第32図　02020－４区出土縄文土器

深鉢Ａ類（280 ～ 283）

深鉢A1類（280 ～ 282）

280は、口端がやや肥厚し、隆帯により主文様部とつなぎ文部とを分ける。つなぎ文部には区画文をつくると考えられる横方向の沈線が１条施されている。主文様部が波状になる可能性がある。281は、口端直下に区画文をつくる沈線を１条施し、区画文内部には羽状沈線を充填する。282は、隆帯より上に区画文をつくると考えられる沈線を１条施している。

深鉢A6類（283）

283は、口端が内側へ少し屈曲する。口端直下に横方向の沈線１条、その下に曲線的な文様を描くと考えられる沈線を１条施している。

深鉢Ｃ類（284、285）

深鉢C3類（284、285）

284、285は口端が肥厚し、外面には口縁に沿う２条の沈線が施されている。

胴部（286 ～ 293）

胴部ｉ類（286 ～ 289）

286は、垂下沈線が３条施されている。

287、288は垂下沈線２条と縄文を施している。縄文原体は288がRLか、287は不鮮明なため特

定できない。289は、２条の垂下沈線間に蛇行沈線を１条施し、垂下沈線の周りには縄文(LR?)を施文している。

胴部ⅱ類（290 ～ 292）

290は、渦巻文を描くと考えられる沈線が１条、それ以外にも曲線的な文様を描くと考えられる２条の沈線が施されている。

291は、３条の沈線により曲線的な文様を描き、沈線間やその周囲に縄文(LR)を施す。

292には３条の連弧状沈線が施されている。

胴部ⅲ類（293）

293は、外面に２条の凹線が施され、宮滝式期のものと考えられる。

浅鉢Ｃ類（294）

浅鉢C3類（294）

294は、口端内面が丸みを帯びて肥厚する。

底部（295 ～ 297）

295は平底、296、297は凹底とまではいかないが、やや底面が凹む。295、297は底面直上でややくびれる。

06017－１区第8'層出土縄文土器（298 ～ 463　第33 ～ 37図、表３－13 ～ 19、図版33 ～ 37）

06017－１区第8'層からは、840点の縄文土器が出土した。

深鉢Ａ類（298 ～ 334）

深鉢A1類（298 ～ 327）

298は、口縁部に隆帯と沈線とで渦巻区画文を描く。区画文内には刺突を充填する。胴部には垂下沈線を３条施し、左端１条の上端は左に折れている。299は、口端をやや内側に曲げ、隆帯と沈線とにより区画文をつくる。隆帯上に刺突を施しているように見えるが、摩滅のため断定できない。300は、隆帯と沈線により口縁部と胴部とを区分。区画文部片であり、区画文内に刺突を充填する。299と300とは同一個体と考えられ、ともに胎土・色調といった土器の雰囲気が06017－１区第８層出土の第26図172と極めて似ている。298 ～ 300は深鉢A1類b。

301は、口縁部に沈線で渦巻文を描く。302は、隆帯と沈線とにより区画文部をつくる。主文様部には渦巻文を描く。隆帯上に縄文(RL?)を施す。胴部には沈線が１条施され、曲線的な文様を描くものと考えられる。301と302とは同一個体の可能性がある。303は、隆帯で主文様部を囲む。主文様は、渦巻文を簡略化した「の」字状を呈し、これを押引沈線で描く。主文様部の横には区画文を描くと思われる沈線がわずかに残る。304は、隆帯と沈線とで区画文を描く。主文様部は渦巻文と考えられる。301 ～ 304は深鉢A1類d。

305は、隆帯により区画文間を区分し、隆帯上に押圧を施す。区画文内の文様については残りが悪く分からない。306は、隆帯と沈線とにより区画文間を区分し、隆帯上に押圧を施す。区画

文をつくる沈線の外縁に縄文(LR)を施し、区画文内は無文とする。胴部には３本１単位の垂下沈線束と垂下縄文帯を施す。307は、隆帯と沈線とにより区画文間を区分し、隆帯上に押圧を施す。区画文内は無文。胴部には垂下沈線を３条施す。305 ～ 307は深鉢A1類eか。

308 ～ 315は区画文部の内容が分かる破片。

308 ～ 310は区画文内に羽状沈線または短沈線を充填する。308は、隆帯と沈線とにより区画文をつくり、区画文内には羽状沈線を充填する。区画文の周囲と胴部には縄文(LR)を施す。口端にも縄文を施したようだが、摩滅のためよく分からない。胴部には、隆帯直下に横方向の沈線が１条施されている。309は、下側を隆帯、上側を沈線により区画文をつくる。区画文内には羽状沈線を充填する。310は、隆帯と沈線とにより区画文をつくり、区画文内には左上がりの短沈線を２列充填している。胴部には垂下沈線が４条施されている。

311、312は口縁部に沈線で二重区画文を描く。ともに隆帯により、区画文間を区分する。312は、胴部に垂下沈線を２条施し、その上端を横方向の沈線で繋げる。

313は、区画文内に刺突を充填、または押引沈線により区画文をつくるものか。残りが悪いため、どちらになるか断定できない。胴部には横方向の沈線を１条施している。314、315は、隆帯と沈線とにより区画文をつくる。314には、胴部に右下がりの沈線２条と左下がりの沈線１条が施されている。315は、口縁部に渦巻文または二重区画文と考えられる文様を描く。胴部には垂下沈線を３条施し、そのうち２条を弧状沈線で上端を連結している。

316 ～ 323は口端付近のみが残る破片。小破片であるため、深鉢A6類など他器種の可能性もあるが、ひとまず一括してここで扱う。316は、隆帯と沈線とにより区画文を描くと考えられる。隆帯上に縄文(LR?)を施す。317は、区画文をつくる沈線が１条施されているものと考えられる。318 ～ 323は、口端直下に横方向の沈線が１条施されている。318は、その下に沈線により楕円形区画文を描くと考えられるが、摩滅のためよく分からない。319は、口端と沈線との間に縄文(RL?)を施す。320は、口端と沈線との間に縄文(LR)を施す。321は口端が内側に傾く。322は口端直下の沈線の下に、曲線的な文様を描くと思われる沈線が１条みられる。323は、口端直下の沈線の上下には横方向に縄文(LR)、その下に２条の曲線的な沈線を施し、その沈線間には縦方向に縄文を施している。

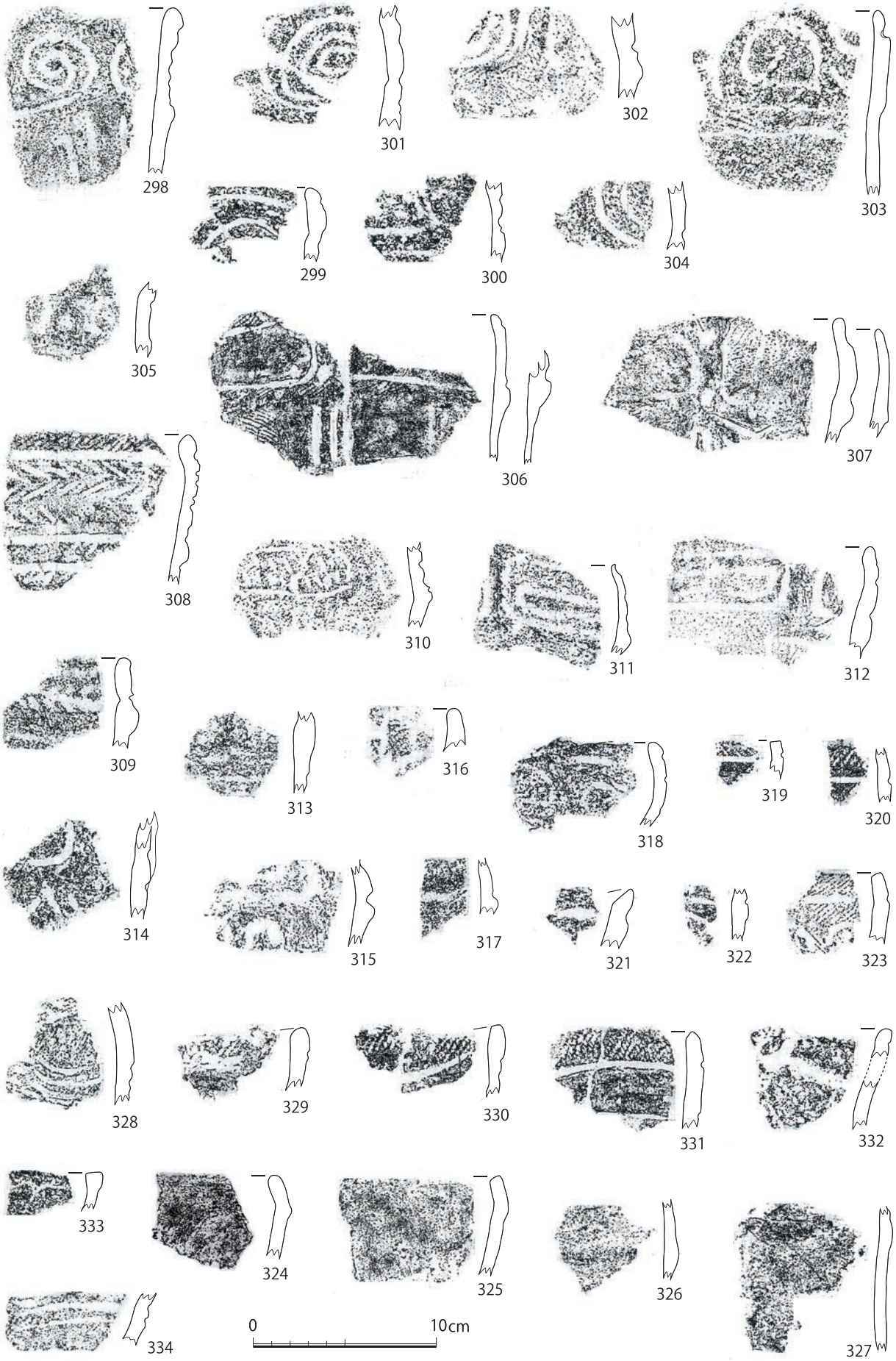
324 ～ 327は、深鉢A1類gとした、外面に蛇行隆帯を施すもの。324は口端直下をやや内側に屈曲させる。325は口端直下がやや肥厚し、内側にやや屈曲する。端面は内側に傾く。326には口端直下の屈曲はみられない。327は口縁部がやや内湾気味になる。

深鉢A4類（328）

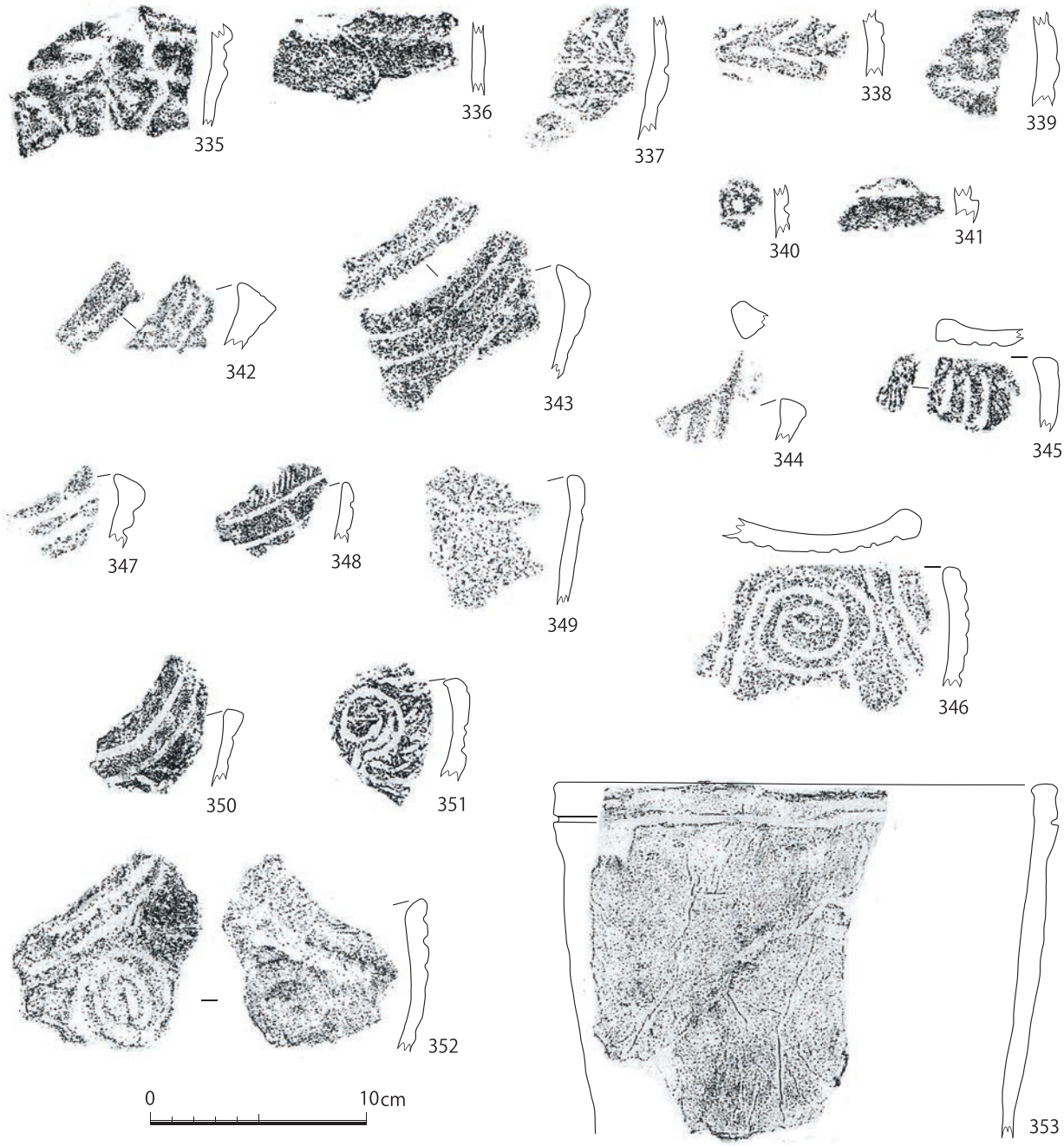
328は、口端直下に沈線で楕円形区画文を描き、その下に３条の連弧状沈線を施す。口端直下および区画内には縄文(LR)を施している。

深鉢A6類（329 ～ 334）

329 ～ 331は口端直下に横方向の沈線を施し、口端との間に縄文(LR)を施している。329はゆる



第33図　06017－１区第８'層出土縄文土器(1)



第34図　06017－１区第８'層出土縄文土器(2)

い波状を呈する。331は、横方向に２条沈線が引かれており、沈線間は無文としている。332は、曲線的な文様を描く沈線が２条、垂下沈線が１条施されていると考えられる。333は、口端が肥厚する。外面に、曲線的な文様を描くと考えられる沈線が施されている。334は、横方向に２条の沈線が施されている。

深鉢Ｂ類（335、336）

深鉢B1類（335、336）

335は、橋状把手が剥れたものと考えられる。凸帯と沈線とにより楕円形区画文をつくり、区画文内は無文とする。胴部には、曲線的な文様を描くと考えられる沈線を３条施している。336は、凸帯と沈線とにより区画文をつくると考えられる。335と336は同一個体の可能性がある。

深鉢Ａ、Ｂ類　区画文部片（337 ～ 341）

337、338は区画文内に羽状沈線を充填する。337は隆帯と沈線とにより、338は沈線を伴い区画文をつくる。

339、340は区画文内に刺突を充填する。ともに、沈線を伴う区画文である。

341は、隆帯状の高まりの上に沈線が１条施されている。この沈線が上方に折れることから、区画文を描くものと考えられる。残りが悪く、区画文内についてはよく分からない。

深鉢Ｃ類（342 ～ 352）

深鉢C2類（342、343）

342、343は口端を内側に拡張し、端面に沈線を１条施す。口縁部には、口縁に沿って沈線を２（３?）条施している。

深鉢C3類（344 ～ 352）

344 ～ 346は波頂部。344は、口端を内外にやや肥厚させる。口縁部に垂下沈線を２条、垂下隆帯を１条施している。主文様を描くと考えられる沈線が右端に１条施されている。345は、口端を内側にやや肥厚させ、端面に縄文(RL)を施す。口縁部には縄文を施文した後、口縁に沿う沈線を４条施している。346は、口端を内側に肥厚させる。波頂部の中心に渦巻文を描き、その両側に口縁に沿う沈線を２条ずつ施す。このうち、左側の沈線の内側１条は渦巻文と繋がる。渦巻文の下にも口縁に沿う（もしくは垂下する）沈線が１条施されている。

347 ～ 352は波頂部を欠く破片。347は、口端を内側に拡張させる。口縁部には、口縁に沿う沈線を２条施す。348は、口縁に沿って押引沈線を２条引き、口端と沈線との間に縄文(LR)を施す。口端に肥厚はみられず、むしろ器壁は薄くなる。 349は、口端をやや内側に屈曲させる。 口縁部に、口縁に沿う沈線を１条施している。350は、口端を面取りし、やや内外に肥厚する。口縁部には、口縁に沿って２条の沈線を引き、沈線間に縄文(LR)を施す。その下には、２条の連弧状沈線を施している。351は、口端を内側に拡張させる。沈線と隆帯により渦巻文を描き、この両側に口縁に沿う沈線を１条ずつ、隆帯下にも隆帯に沿う沈線を１条施している。口縁部端面や隆帯上、渦巻文の内側に縄文(LR?)を施す。352は、口端に向かい厚みが増す。口端直下内面に縄文(LR?)を施す。外面には口縁に沿う沈線を２条引き、その下に渦巻文を描く。

深鉢Ｆ類（353）

353は、口端直下に横方向の沈線を１条めぐらせる。右端で沈線が二重になっており、この沈線の描き始めと終わりの箇所と考えられる。荒く端面を調整しており、所々で粘土がはみ出ている。下端でやや屈曲しており、やや外に張るような胴部につながる可能性がある。１条の沈線以外全く文様要素が無いため、ひとまず深鉢Ｆ類として扱った。

胴部（354 ～ 425）

胴部ｉ類（354 ～ 400）

354 ～ 371は、縄文のみがみられる。

354 ～ 367は、垂下縄文帯を施す。摩滅のため断定し難いものもあるが、縄文原体はほぼ全てLRと考えられる。367は、上半では横方向にも縄文帯を施している。368 ～ 371は縄文が施されるが、垂下縄文帯となるかどうか分からない。368、369はLR、370はRLか。371は回転施文されたものではなく、部分的に縄文原体(LR)が当たった痕跡がみられるものである。

372 ～ 385は、垂下沈線のみがみられる。

372 ～ 375は１条、376 ～ 381は２条、382 ～ 384は３条、385は４条の垂下沈線が施されている。372は、左側に蛇行沈線を伴う可能性があるが、摩滅のためよく分からない。375は、沈線の下端部である可能性がある。381は縄文を伴う可能性がある。378は、下端がやや曲がっており、胴部区画文を描く可能性もある。縄文を伴う可能性もある。また、376、377は２条１単位、382、383は３条１単位の沈線束をなすものと考えられる。

386 ～ 388は蛇行沈線が１条みられる。387は、曲線的な文様を描く可能性もある。388は、２本の垂下沈線間に蛇行沈線を施している。

389 ～ 400は、縄文帯、沈線の両方がみられる。

389 ～ 395は１条、396 ～ 399は２条、400は３条の垂下沈線が施され、縄文帯を伴っている。393は、垂下沈線と縄文帯とがやや離れている。395には、沈線を伴わない別の縄文帯も存在する可能性がある。397 ～ 399は、２条の沈線間に縄文を施した縄文帯をつくる可能性がある。縄文原体は、摩滅のため特定し難いものもあるが、393がRLであるほかは、ほぼ全てLRになると考えられる。389は浅く、原体を特定できない。

胴部ⅱ類（401 ～ 421）

401 ～ 406は、曲線的な文様の一部と考えられるもの。

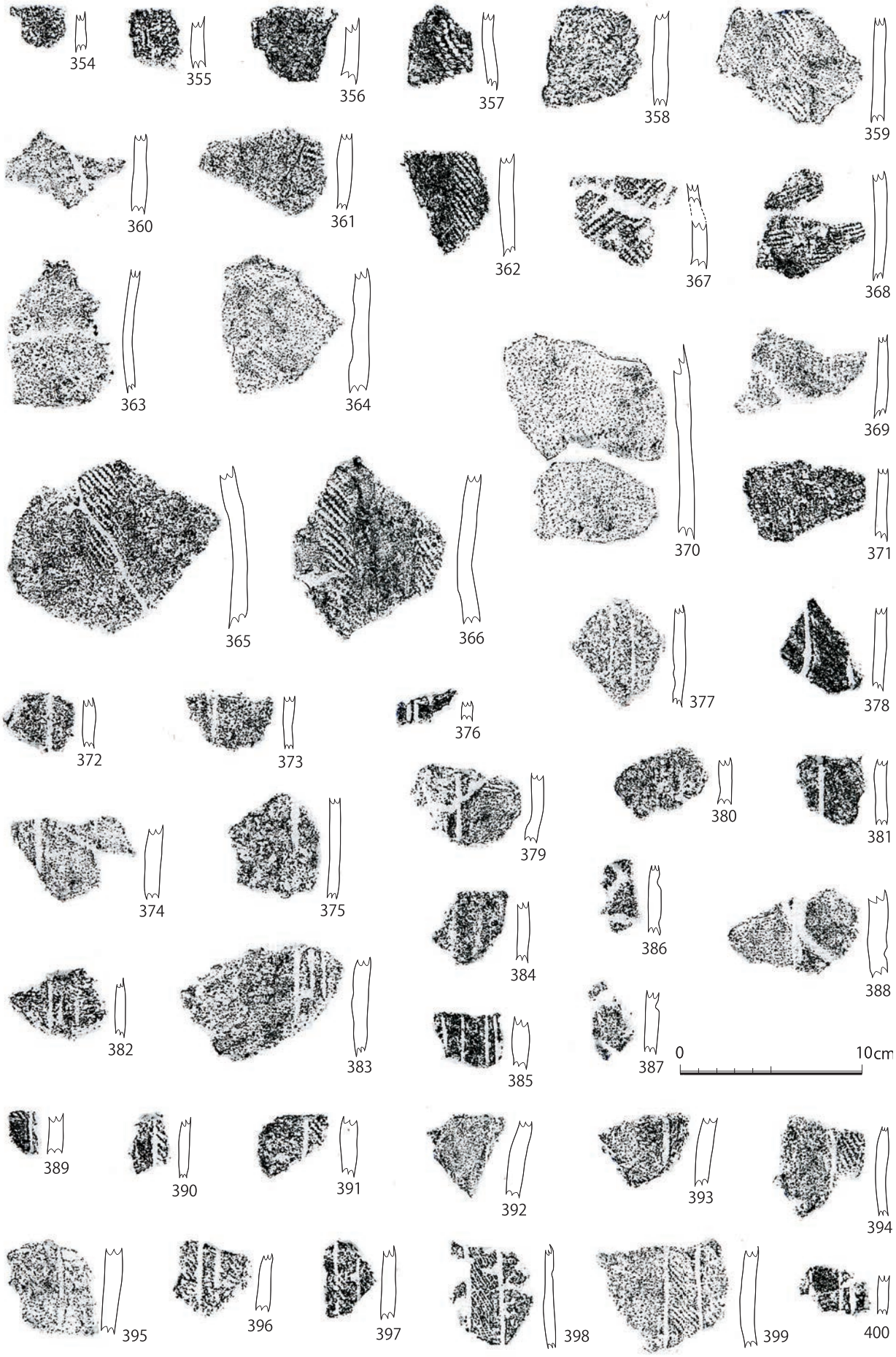
401には、１条の沈線と刺突が施されている。上端の屈曲度合や隆帯らしき盛り上がりの存在から、頸部直下の胴部片と考えられる。402には、沈線が３条施されている。沈線の周囲には縄文を施した可能性もある。403には、沈線が２条施されている。404 ～ 406は沈線が１条施されている。404、405は蛇行沈線の可能性もある。

407 ～ 411は、深鉢Ｃ類の口縁部付近の可能性もあるもの。

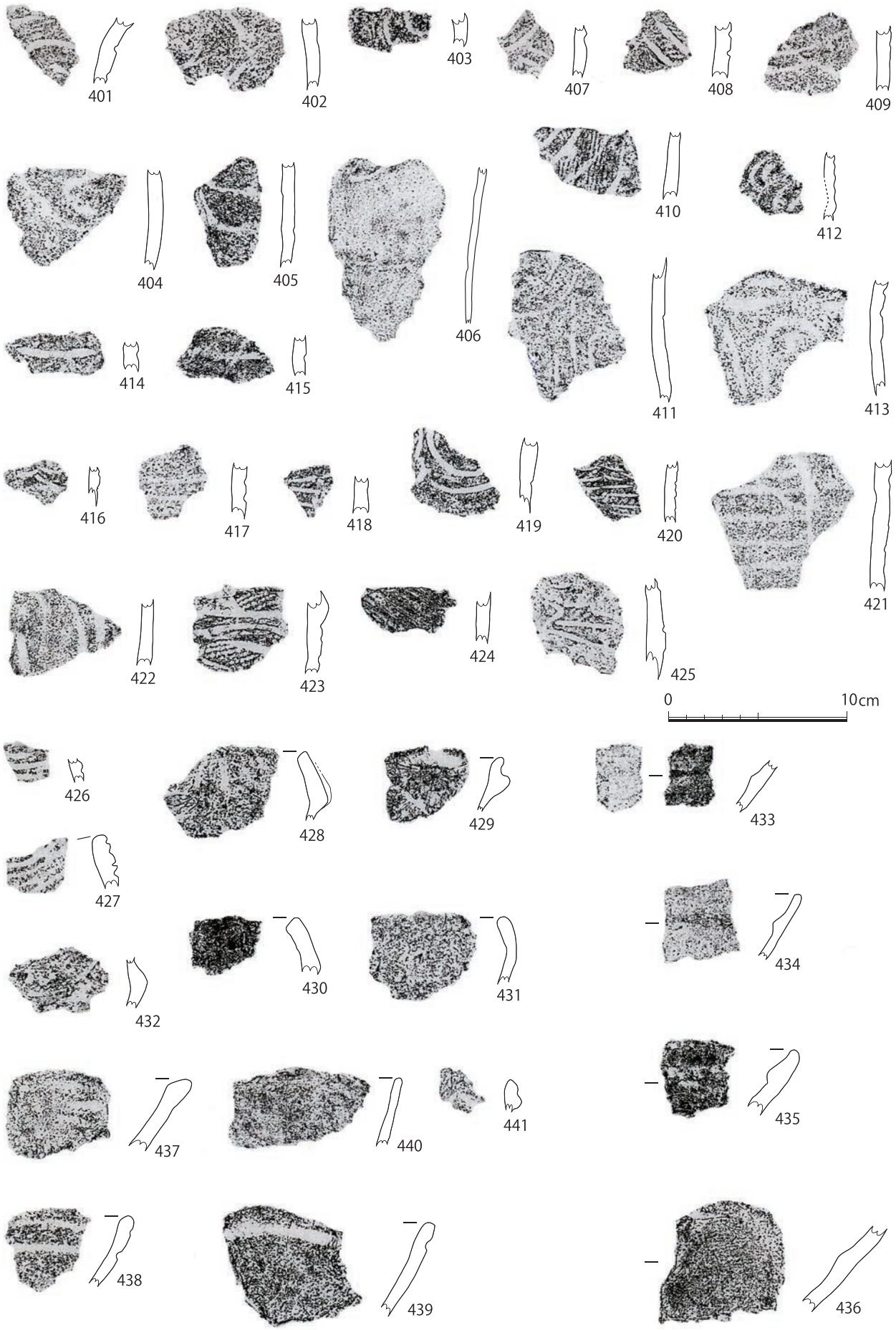
407は、口縁に沿う可能性もある沈線１条と曲線的な文様を描くと考えられる２条の沈線が施されている。408は、縄文(LR)を施文したのち、やや曲線的な沈線を３条施している。409は、口縁に沿う可能性もある３条の沈線が施されている。410は、口縁に沿う可能性もある４条の沈線と縄文(LR)が施されている。411は、上に口縁に沿う可能性もある沈線が３条、下に垂下沈線３条、横方向の沈線１条が施されている。

412、413には、渦巻文がみられる。

412は、渦巻文と曲線的な文様を描くと考えられる沈線が３条施されている。413は、屈曲部に２条の弧状沈線を施す。その下に、上端を渦巻状にする垂下沈線１条と、それと左右対称になると思われる沈線１条、および横方向の沈線１条が施されている。胴部区画文をつくる可能性があ



第35図　06017－１区第８'層出土縄文土器(3)



第36図　06017－１区第８'層出土縄文土器(4)

る。内面には、沈線で押し出されてできた器壁の凹凸が見られる。

414 ～ 421は、連弧状沈線が施されている。

414、415は１条、416、417、419、420は２条、418は３条、421は５条の連弧状沈線が施されている。414は沈線の下に縄文(LR?)を施す。418は、連弧状というより単なる横方向の沈線である可能性もある。419は、垂下沈線束間の下端を連弧状沈線によって繋ぎ胴部区画文をつくる可能性があり、胴部ⅰ類とすべきかもしれない。420は連弧状沈線の下に、４条の横方向の沈線を施し、沈線施文後に縄文(LR)を施している。

胴部ⅲ類（422 ～ 425）

422は、やや曲がりながら垂下する５条の沈線が施されている。左２条が縦長の渦巻文を描き、右３条が垂下沈線となるものか。方向も厳密には確定できず、文様の全容はよく分からない。423は、縄文(LR)を施文したのち、横方向の沈線を５条施す。真ん中の１条はやや弧状になる。屈曲があり、壺のような器形になる可能性がある。424には横方向の擦痕が残されている。425は、横方向の２条の沈線、右上がりの２条の沈線を引き、この沈線間に縄文(LR)を施す。また、蛇行沈線も１条施している。北白川上層式３期の土器である可能性がある。

浅鉢Ａ類（426 ～ 428）

浅鉢A1類（426、427）

426、427は多条沈線が施されている。427はゆるい波状を呈し、主文様部に近い部位であると考えられる。

浅鉢A4類（428）

浅鉢A1 ～ A3類に含まれない浅鉢Ａ類を、浅鉢A4類とする。

428は、口縁部に垂直方向の隆帯をつけ、その脇に垂下沈線を１条施している。

浅鉢Ｂ類（429 ～ 431）

浅鉢B2類（429）

429は、残存部位に橋状把手は見られないが、幅の狭い口縁部の上下が凸帯状に肥厚しており、浅鉢B2類と考えられる。口端がやや内側に傾く。

浅鉢B3類（430、431）

口縁部が「く」字形に内折し、無文であり、口縁や屈曲部に肥厚がみられないものを浅鉢B3類とした。431は、口端がやや内側に傾く。口縁部は、明らかな屈曲が見られるわけでなく、ゆるやかに内湾するだけであるが、一応この類に含めた。

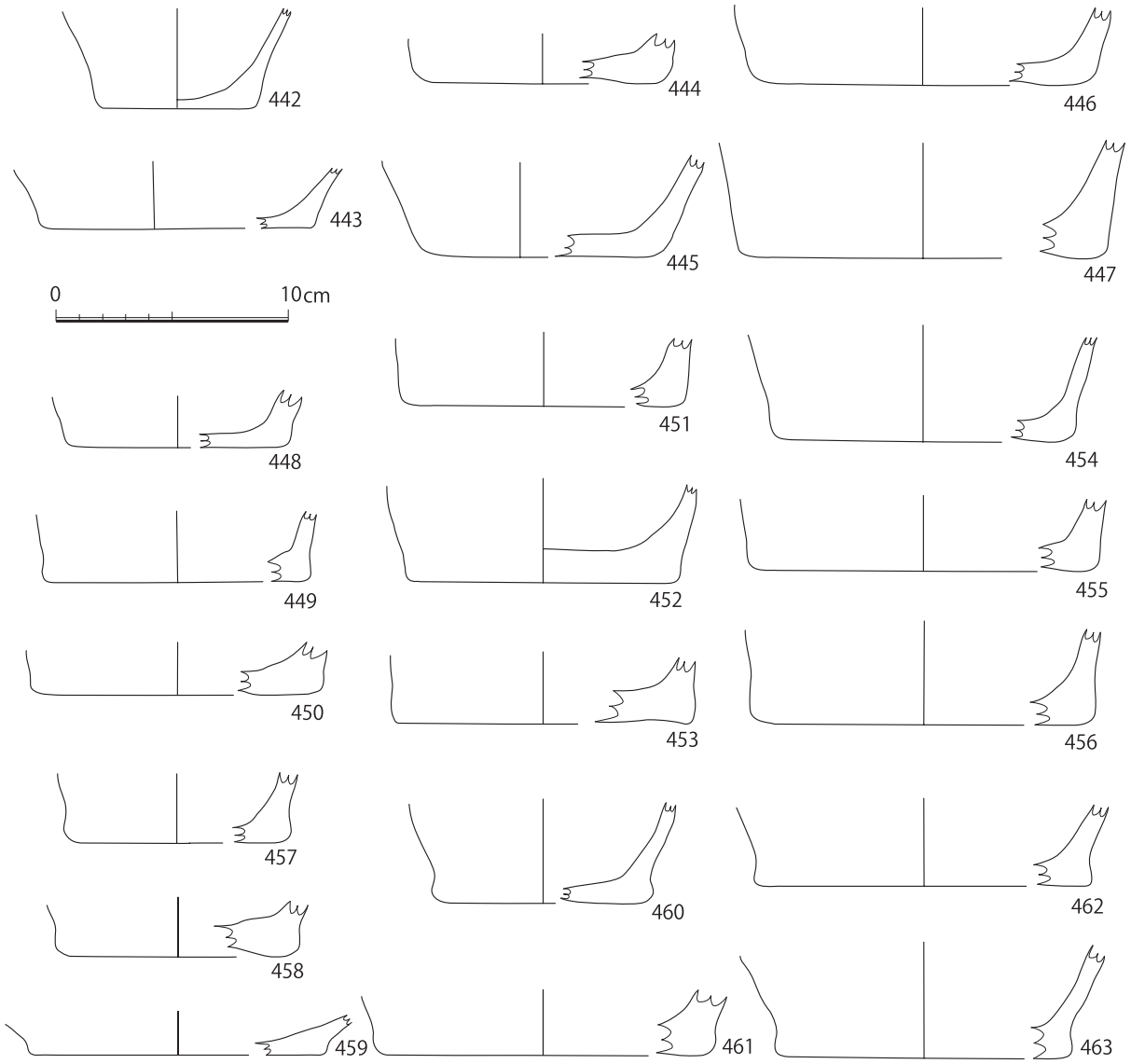
浅鉢Ａ、Ｂ類　屈曲部片（432）

432は、上半に縄文(LR?)を施しているようだが、残りが悪くよく分からない。

浅鉢Ｃ類（433 ～ 436）

浅鉢C3類（433 ～ 436）

435は他と異なり、口端をやや内側を反らせており、口縁部内面が「凹」状を呈する



第37図　06017－１区第８'層出土縄文土器(5)

浅鉢Ｄ類（437）

437は口端が内外にやや肥厚する。

浅鉢Ｅ類（438 ～ 440）

438は、口端が内側に傾く。口縁部に２条の横方向の沈線を施している。439は、ゆるい波状を呈し、口縁に沿って１条の沈線を施す。440は無文。

器種不明（441）

441には、円形の粘土貼り付けが施されている。

底部（442 ～ 463）

全て平底。444や458は、やや底面が凹むようだが、明らかな凹底とまではならないと考える。442 ～ 447は直線的に立ち上がり、448 ～ 463は底面直上でくびれる。特に457 ～ 463は強くくびれている。

中期末の遺構面(2)ベース土下層内出土土器

06017－１区第９層出土縄文土器（464 ～ 538　第38、39図、表３－19 ～ 22、図版38, 39）

06017－１区第９層からは、488点の縄文土器が出土した。

深鉢Ａ類（464 ～ 475）

深鉢A1類（464 ～ 473）

464は、口縁部に逆「Ｔ」字形に隆帯をめぐらし、隆帯上に縄文(LR?)を施す。沈線を伴い区画文をつくり、区画文内には羽状沈線を充填する。やや内湾する口縁部の端面は内側に傾き、端面にも縄文を施している。胴部には垂下沈線１条と、縄文が施されている。縄文は垂下沈線間に施されたものと考えられる。深鉢A1類eか。468と同一個体の可能性がある

465は、細く高い隆帯で区画文間を分け、沈線を伴い区画文をつくる。466は、隆帯と沈線で区画文間を区分し、区画文を描いたものと考えられる。区画文内は無文。

467 ～ 470は、区画文内に羽状沈線または短沈線を充填する。

467は、隆帯と沈線とにより区画文を描き、区画文内には横方向に２条の沈線を施す。口端付近の器壁が薄くなっており、逆「Ｔ」字形に隆帯をめぐらすものと考えられる。

468 ～ 470は、隆帯と沈線とで区画文をつくり、区画内に羽状沈線を充填する。

468は、区画文の周囲と、内側に傾く口縁部端面に縄文(LR)を施す。464と同一個体の可能性がある。469は、口縁部がやや内湾し、口端はやや内側に傾く。470は、隆帯上に縄文(LR)を施す。471は、口縁部に横方向の２条の沈線を施しており、二重区画文を描くものと考えられる。胴部には、やや曲線的な垂下沈線が３条施されている。

472は、隆帯と沈線とにより区画文をつくる。隆帯上と区画文内に縄文(LR)を施す。胴部には垂下沈線が１条みられる。473は、口縁部に左下がりの沈線が１条施されている。沈線を伴わず、隆帯のみで区画文をつくるものか。胴部には垂下沈線２条と、縄文(LR)帯１条を施している。

深鉢A6類（474、475）

474は、曲線的な文様を描くと考えられる沈線を２条施す。475は、ゆるい波状を呈する。口縁部に、横方向に太めの沈線を２条引き、沈線間に縄文(LR)を施す。胴部には２条のやや右下がりになる沈線間に縄文を施す。縄文帯の幅が均一ではなく、口縁部と胴部の縄文帯は離れている。

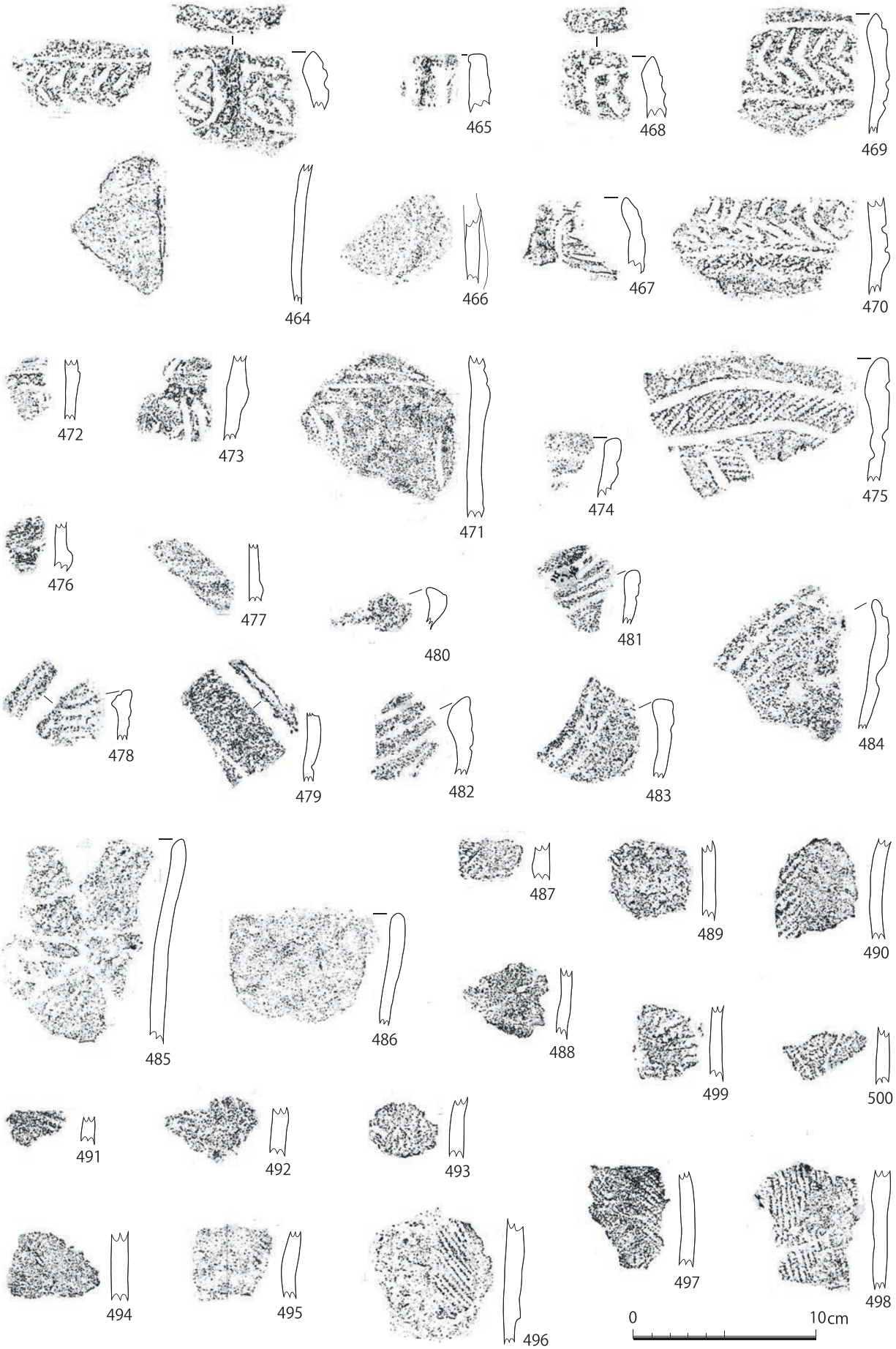
深鉢Ａ、Ｂ類　区画文部片（476、477）

476には隆帯が施されている。477は隆帯が施され、その上に沈線が１条施されているものと考えられる。

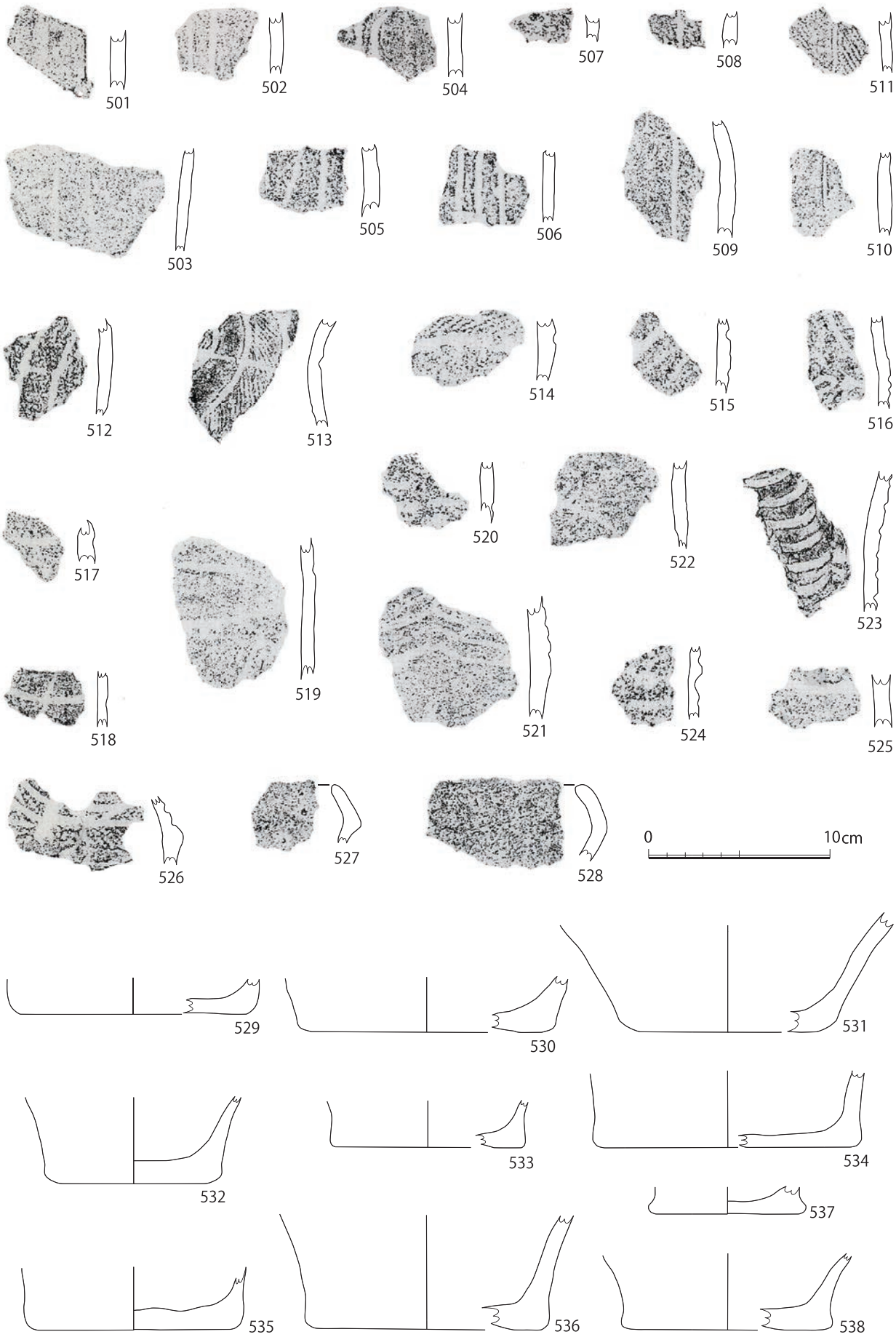
深鉢Ｃ類（478 ～ 484）

深鉢C2類（478、479）

478は、口縁部を内側に肥厚させ、端面に沈線を１条施す。口縁部には４条の弧状沈線と、口縁に沿うと考えられる沈線が１条施されている。479は、口縁がやや内湾する。口端がわずかに肥厚し、端面に沈線を１条施す。外面には口縁に沿って沈線を１条施している。



第38図　06017－１区第９層出土縄文土器(1)



第39図　06017－１区第９層出土縄文土器(2)

深鉢C3類（480 ～ 484）

480 ～ 483は口端を内側に肥厚させる。480は、口縁部に１条の沈線が施されている。481は、口端に縄文を施したと考えられる凹凸が認められるが、不鮮明で原体は特定できない。外面には口縁に沿って３条の沈線が施されている。細い沈線で、沈線間の幅が狭いことから、浅鉢A1類の可能性もある。482は、口縁部端面が内側に傾く。外面に口縁に沿って３条の沈線が施されている。483は、口縁に沿って３条の沈線が施されている。484は、口端がやや内側に折れる。外面には口縁に沿って２条の沈線を施し、その下に押圧と楕円形区画文を描くと考えられる沈線が施されている。

深鉢Ｄ類（485）

深鉢D1類（485）

485は、縄文(LR)を全面に施す。

深鉢Ｆ類（486）

486は、口端を丸くおさめる。

胴部（487 ～ 525）

胴部ⅰ類（487 ～ 511）

487 ～ 500は縄文帯のみがみられる。

縄文原体は、摩滅のため断定し難いものもあるが、487 ～ 490がRL、491 ～ 500がLRを施していると考えられる。このうち、497、498は縄文帯が２条施されており、499、500には縦方向だけでなく、横方向にも縄文が施されている。また、488は垂下縄文帯にならない可能性もある。493には縄文帯以外に、縄文原体が当たって凹んだと考えられる痕跡が左方にみられる。

501 ～ 506は垂下沈線のみがみられる。

501 ～ 504は２条、505、506は３条の垂下沈線が施されている。504は沈線が上方で右上に屈曲する。505は、左側の沈線がやや曲線的になっており、深鉢Ｃ類口縁部の可能性もある。

507は、蛇行沈線と考えられる沈線が１条施されている。

508 ～ 511は縄文帯と沈線がみられる。

508 ～ 510は、２条の垂下沈線間に縄文(LR)を施す。511は、沈線を伴わない垂下縄文(LR)帯１条と、沈線１条を伴う縄文帯１条が施されている。

胴部ⅱ類（512 ～ 523）

512 ～ 514は曲線的な文様の一部と考えられるもの。

512は沈線を２条引き、沈線の間に縄文(LR?)を施す。513は３条の沈線を引き、中央の沈線間を無文とし、その両側の沈線間に縄文(LR?)を施している。514は、横方向に太めの沈線が１条引かれ、その上に縄文(LR)を施している。

515、516は深鉢Ｃ類に伴う可能性がある破片。

515は、沈線を３条施す。最も上の１条は他より深く施されている。最も下の１条は曲線的な

文様の一部である可能性がある。516は、渦巻文を簡略化したような逆Ｓ字文を施し、その右に１条の弧状沈線、上に１条の曲線的な文様を描くと考えられる沈線が施されている。

517 ～ 523は連弧状沈線を施す。

517は１条、518、519は２条、520は３条、521は４条、522は５条、523は６条の連弧状沈線が施されている。

胴部ⅲ類（524、525）

524は、横方向の沈線１条と刺突が施されている。第38図484と同一個体の可能性もある。525は、横方向の沈線２条と縄文(残りが悪く原体不明)が施されている。

浅鉢Ａ類（526）

526は、口縁部と体部とを分ける隆帯と、口縁部に施された２条の沈線間に縄文(RL)が施されている。

浅鉢Ｂ類（527、528）

浅鉢B3類（527、528）

527は口縁部が強く「く」字形に屈曲する。528は口縁部がやや内湾気味になる。

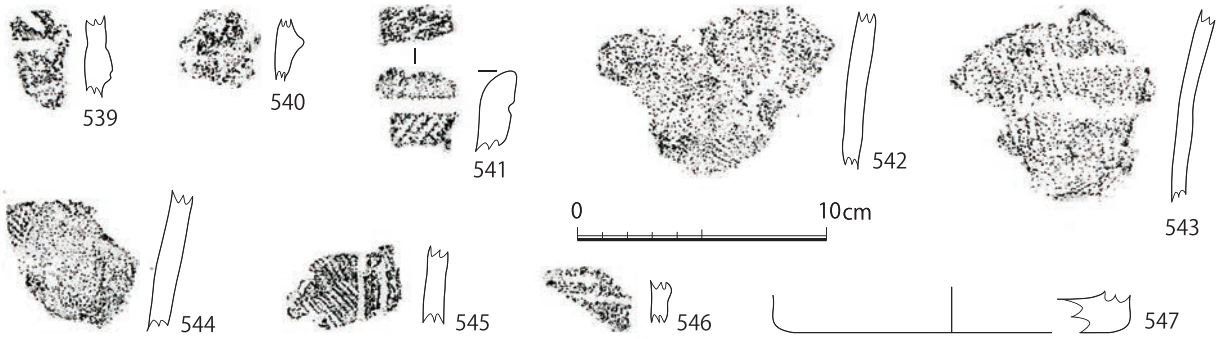
底部（529 ～ 538）

全て平底。529 ～ 532は直線的に立ち上がり、533 ～ 538は底面直上でくびれる。537、538は強くくびれている。

出土地点・層位不明分縄文土器（539 ～ 547　第40図、表３－22、23　図版30）

出土地点・層位が不明、また攪乱中に含まれていた縄文土器は49点ある。

以下、図化報告する９点のうち、539、541、543、545は、炭集積１の断面観察のために断ち割った箇所からの出土で、８’層もしくは９層に包含されていたもの。540、547は、攪乱中に含まれていた。542、546は廃土から回収。544は出土位置・層位が不明。



第40図　出土地点・層位不明分縄文土器

深鉢Ａ類（539 ～ 541）

深鉢A1類（539、540）

539は、口縁部に隆帯と沈線とで区画文をつくる。区画文内に左上がりの沈線を１条施しており、羽状沈線（または短沈線）を充填したものと考えられる。残りが悪いため断定できないが、胴部に垂下沈線を施していた可能性がある。540は、細く高い「ノ」字状隆帯が貼付される。

深鉢A6類（541）

541は、口端直下に横方向の沈線を引き、その下に縄文（LR）を施す。口端は内側に傾き、端面にも縄文を施している。

胴部（542 ～ 546）

胴部ⅰ類（542 ～ 545）

542、543は縄文（LR）のみがみられる。ともに部分的に残るのみで、縄文帯になるかどうかよく分からない。

544、545は縄文帯と沈線がみられる。

544は、垂下沈線を１条引きその脇に縄文（LR）を施す。545は、垂下沈線を２条引きその脇に縄文(LR)を施している。

胴部ⅲ類（546）

546は、横方向に２条の沈線と右下がりの沈線が１条施されている。中期末以外の時期の土器である可能性もある。

底部（547）

やや凹み気味になるが、平底の範疇であると考える。底面直上でややくびれる。

表３－１　縄文土器観察表(001～025)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調 内面	色調 外面	胎土類型	文様要素	備考
001	18	22	171－03	05－1区	後期中葉	深鉢	口縁部	10YR6/3	10YR4/1	E1類	【外面】多重沈線、渦巻文?	波状口縁の可能性がある。
002	18	22	171－06	05－1区	後期中葉	深鉢	口縁部	10YR3/1	10YR2/1	B1類	【外面】多重(押引)沈線、刺突、縄文(LR?)	口端直下には、撚糸の絡げ部が回転施文されている?
003	18		172－04	05－1区	後期中葉		胴部	7.5YR5/4	7.5YR5/3	E1類	【外面】沈線2条	
004	18		171－05	05－1区	後期中葉		胴部	10YR6/2	10YR5/1	F1類	【外面】縄文(RL?)	
005	18	22	137－01	05－1区	後期末	深鉢?	口縁部	2.5Y3/1	10YR5/2	F1類	【外面】凹線2条、巻貝圧痕	口端面取り
006	18		170－01	05－1区	後期末	深鉢?	口縁部	2.5Y3/1	2.5Y3/1	F3類	【外面】凹線3条	
007	18		171－02	05－1区	後期中葉	深鉢	口縁部	10YR4/2	10YR4/2	F2類		
008	18		171－01	05－1区	後期中葉	深鉢	口縁部	10YR6/4	10YR4/4	A1類		
009	18		171－02	05－1区	後期中葉	深鉢	口縁部～胴部	10YR4/2	10YR4/2	F3類		
010	18	22	172－02	05－1区	後期中葉	深鉢	口縁部～胴部	10YR7/3	10YR5/2	B2類		
011	18		149－01	05－1区	後期中～後葉	深鉢	口縁部	2.5Y8/1	10YR7/1	F1類		口端面取り
012	18		149－03	05－1区	後期中葉	深鉢	頸部	N2/0	N3/0	C1類		巻貝条痕
013	18		150－01	05－1区	後期中葉	深鉢	頸部	10YR3/1	10YR3/1	F2類		
014	18		171－04	05－1区	後期中葉	小型鉢	口縁部	10YR3/1	10YR3/1	B1類		
015	18		172－01	05－1区	後期中～後葉		底部(平底)	2.5Y4/1	10YR5/2	F2類		
016	18		149－02	05－1区	後期中～後葉		底部(平底)	2.5Y8/1	10YR7/2	B2類		
017	18		151－01	05－1区	後期中～後葉		底部(凹底)	2.5Y5/3	5YR4/4	AB3類		
018	19	22	463－01	02－3区 SD1	後期後葉	深鉢	口縁部～胴部	2.5Y6/3	10YR5/3	A2類	【内面】凹線1条 【外面】凹線2条	
019	19		338－02	02－3区 SD1	後期後葉		胴部	2.5Y5/3	10YR5/3	A2類	【外面】凹線3条	
020	19	22	530－01	02－3区	後期後葉	深鉢	胴部	2.5Y4/1	N3/0	F2類	【外面】凹線4条、刺突	
021	19	23	356－01	3区 SK20	晩期中葉	深鉢	口縁部～胴部	N3/0	10YR4/1	B2類	【口端】刻み目	胴部外面はケズリ
022	19	23	356－02	3区 SK20	晩期中葉	深鉢	口縁部～胴部	10YR5/2	10YR5/2	F2類	【口端】刻み目 【外面】頸部に爪形文?	
023	19	22	539－02	02－3区 SK20	晩期中葉	深鉢	口縁部～胴部	2.5Y5/2	10YR4/2	AB1類		波状口縁の可能性がある。胴部外面はケズリ?
024	19	22	539－01	02－3区 SK20	晩期中葉	深鉢	口縁部～胴部	10YR5/3	7.5YR4/3	AB1類		口端面取り、補修孔、胴部外面はケズリ?
025	19	22	488－01	3区 SK20	晩期中葉	深鉢	口縁部	10YR4/3	10YR3/3	A3類		

表３－２　縄文土器観察表(026～050)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調 内面	色調 外面	胎土類型	文様要素	備考
026	19	23	355−01	02−3区 SK20	晩期後葉	深鉢	口縁部	2.5Y6/1	2.5Y6/1	B1類	【外面】無文凸帯	口端面取り
027	19	23	541−02	3区 SK21	晩期後葉	深鉢	口縁部	10YR2/1	10YR2/1	F2類	【外面】無文凸帯	壺の可能性もある。
028	19	23	377−02	02−3区 SK23	晩期後葉	深鉢	口縁部	10YR7/3	10YR6/2	B2類	【外面】無文凸帯	
029	19	23	508−01	02−3区 SK20か21か23	晩期後葉	深鉢	口縁部	5Y6/1	2.5Y7/2	F1類	【外面】無文凸帯	
030	19	23	487−01	02−3区 SK21	晩期後葉	深鉢	口縁部	10YR4/2	10YR7/3	F1類	【外面】無文凸帯	
031	19	23	367−01	02−3区 SK21か23	晩期後葉	深鉢	口縁部	10YR4/3	2.5Y3/2	A2類	【外面】刻み目凸帯	
032	19	22	541−03	02−3区 SK21	晩期後葉	深鉢	口縁部	10YR3/1	10YR3/1	F2類	【外面】無文凸帯	
033	19	23	539−03	02−3区 SK20	晩期後葉	深鉢	口縁部～胴部	10YR5/1	5YR6/6	B3類	【外面】刻み目凸帯	
034	19	23	366−02	02−3区 SK23	晩期後葉	深鉢	口縁部	10YR7/3	10YR5/3	A2類	【口端】刻み目 【外面】刻み目凸帯	
035	19	23	356−04	02−3区 SK20	晩期後葉	深鉢	口縁部	2.5Y4/2	7.5YR5/4	A2類	【口端】刻み目 【外面】刻み目凸帯	
036	19	22	366−01	02−3区 SK23	後期後葉	深鉢	胴部	10YR4/3	10YR4/3	A2類	【外面】凹線1条	外面下半はケズリ?
037	19	22	486−01	02−3区 SK21	後期後葉	深鉢	胴部	2.5Y4/1	10YR4/2	A2類		
038	19	22	396−01	02−3区 NR11	晩期中～後葉	深鉢	胴部	2.5Y3/1	10YR5/3	A2類		浅鉢の可能性もあり。 口端まで残存か?
039	19	23	489−01	02−3区 SK21	晩期後葉	深鉢	胴部	2.5Y5/2	10YR5/3	B2類	【外面】無文凸帯	
040	19	23	363−01	02−3区 SK21	晩期中～後葉	浅鉢	口縁部	10YR6/4	10YR6/4	A2類		口端面取り
041	19	23	356−05	02−3区 SK20	晩期中～後葉	浅鉢	口縁部	2.5Y3/1	2.5Y4/1	A1類	【口端】突起	
042	19	23	489−02	02−3区 SK21	晩期中～後葉	浅鉢	口縁部	2.5Y5/1	10YR7/3	B2類	【口端】突起 【内面】凹線1条	
043	19	23	356−03	02−3区 SK20	晩期中～後葉	浅鉢	肩部	10YR3/2	10YR3/2	A1類		補修孔
044	19	23	356−06	02−3区 SK20	晩期中～後葉	浅鉢	肩部	10YR3/2	10YR3/2	A1類		
045	19	22	357−01	02−3区 SK20	晩期中～後葉	浅鉢	肩部	7.5YR4/4	10YR3/3	AB1類		深鉢頸部の可能性もあり。 外面下半はケズリ
046	19	23	377−01	02−3区 SK23	晩期中～後葉	浅鉢	肩部	10YR7/4	2.5Y4/1	F2類		
047	19		414−02	02−3区	晩期中～後葉		底部(凹底)	10YR4/3	7.5YR4/4	AB2類		
048	19		541−02	02−3区 SK21	晩期中～後葉		底部(凹底)	5YR5/6	10YR4/2	AB2類		
049	20	29	205−02	06−1区 SK12	中期末	深鉢 A1類	口縁部	10YR8/3	10YR7/2	F3類	【口縁部】区画文(羽状沈線充填)	
050	20	29	205−01	06−1区 SK12	中期末	深鉢 C3類	口縁部	2.5Y8/2	10YR8/3	F3類	【口縁部】沈線2条	

表３－３　縄文土器観察表(051～072)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調 内面	色調 外面	胎土類型	文様要素	備考
051	20	29	206－02	06－1区 SK12	中期末		胴部（ｉ類）	10YR4/1	10YR4/1	F3類	【胴部】垂下沈線1条、縄文(LR?)	
052	20	29	205－05	06－1区 SK12	中期末		胴部（ii類）	N2/0	2.5Y7/2	F2類	【胴部】連弧状沈線2条	
053	20	29	206－01	06－1区 SK12	中期末		胴部（ii類）	10YR4/2	10YR4/2	F2類	【胴部】連弧状沈線1条?、縄文?	
054	21	24	242－02	06－1区 SK13	中期末	深鉢 A1類e	口縁部～胴部	2.5Y6/2	2.5Y5/1	F2類	【口縁部】区画文(二重区画文) 【胴部】垂下沈線4条	逆T字形隆帯
055	21	24	243－25	06－1区 SK13	中期末	深鉢 A1類	口縁部	2.5Y8/1	2.5Y8/2	F3類	【口端】横走沈線1条 【口縁部】区画文(斜行沈線充填?)	
056	21	24	233－01	06－1区 SK13	中期末	深鉢 A1類	口縁部～胴部	2.5Y6/2	10YR7/2	F3類	【口縁部】区画文 【胴部】横走縄文(LR)帯1条	胴部の縄文帯は縦方向にも施される。
057	21	24	202－03	06－1区 SK13	中期末	深鉢 A1類	頸部	10YR6/2	10YR6/2	F1類	【口縁部】区画文 【胴部】垂下沈線2条、沈線間に縄文(LR)	隆帯上にも縄文
058	21	24	243－26	06－1区 SK13	中期末	深鉢 A1類?	頸部	10YR4/1	10YR4/1	F1類		深鉢B類の可能性もある。
059	21	24	204－08	06－1区 SK13	中期末	深鉢 A6類	口縁部	10YR7/3	10YR8/2	F2類	【口縁部】横走沈線1条、斜行沈線1条	
060	21	24	199－01	06－1区 SK13	中期末	深鉢 A6類	口縁部	10YR5/1	10YR8/2	F2類	【口縁部】横走沈線1条、縄文(LR?)	
061	21	24	204－07	06－1区 SK13	中期末	深鉢 A6類	口縁部	10YR7/4	2.5Y4/1	F2類	【口縁部】沈線(曲?)2条	赤色顔料塗布
062	21	24	203－06	06－1区 SK13	中期末	深鉢 B類?	口縁部	10YR5/1	10YR8/2	F2類	【口縁部】区画文?	深鉢A類の可能性もある。
063	21	24	204－01	06－1区 SK13	中期末	深鉢 B1類	口縁部～胴部	N3/0	N3/0	F3類	【口縁部】横走沈線2条、橋状把手(隆帯上に縄文(LR?)、区画文(区画内無文)	
064	21	25	200－03	06－1区 SK13	中期末	深鉢 A、B類	区画文部	10YR4/1	10YR4/1	F1類	【区画文部】区画沈線1条、縄文(RL?)	蛇行沈線を施す胴部の可能性もある。
065	21	24	243－01	06－1区 SK13	中期末	深鉢 C2類	口縁部～胴部	2.5Y7/3	2.5Y6/1	F3類	【口端】沈線1条 【口縁部】平行沈線3条、沈線間縄文(LR?) 【胴部】渦巻文、連弧状沈線4(5?)条	浅鉢(A2類c)となる可能性もある。
066	21	24	204－02	06－1区 SK13	中期末	深鉢 C3類	口縁部	10YR6/3	10YR4/2	F2類	【口縁部】平行沈線2条	
067	21	24	202－04	06－1区 SK13	中期末	深鉢 C3類	口縁部	7.5YR5/3	7.5YR4/2	F2類	【口端】縄文(LR) 【口縁部】平行沈線3条、沈線間縄文	
068	21	24	202－05	06－1区 SK13	中期末	深鉢 C3類	口縁部	7.5YR6/3	10YR6/2	F2類	【口端】縄文(LR?) 【口縁部】平行沈線4条	
069	21	24	202－01	06－1区 SK13	中期末	深鉢 C3類	胴部	2.5Y7/1	10YR8/3	C1類	【胴部】渦巻文(または同心円文)、平行沈線1条、沈線間刺突	
070	21	25	201－01	06－1区 SK13	中期末	深鉢 D類	口縁部～胴部	10YR5/2	10YR4/1	F1類	【口縁部～胴部】縄文(LR)	深鉢A類の可能性もある。
071	21	25	202－11	06－1区 SK13	中期末	深鉢 F類	口縁部～胴部	10YR6/2	10YR5/2	F2類	【口端】小突起	
072	22		203－02	06－1区 SK13	中期末		胴部（ｉ類）	10YR7/2	10YR5/2	F3類	【胴部】縄文(LR)	

表３－４　縄文土器観察表(073～098)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調 内面	色調 外面	胎土類型	文様要素	備考
073	22		203－03	06－1区 SK13	中期末		胴部（ｉ類）	10YR7/2	10YR6/2	F2類	【胴部】縄文(LR)	
074	22		199－04	06－1区 SK13	中期末		胴部（ｉ類）	10YR8/2	10YR5/2	F2類	【胴部】縄文(LR?)	
075	22		204－13	06－1区 SK13	中期末		胴部（ｉ類）	10YR8/2	10YR8/3	F2類	【胴部】垂下沈線1条	
076	22		200－07	06－1区 SK13	中期末		胴部（ｉ類）	10YR4/2	10YR7/3	F3類	【胴部】垂下沈線2(3?)条	
077	22	25	202－07	06－1区 SK13	中期末		胴部（ｉ類）	10YR7/2	10YR7/2	F2類	【胴部】垂下沈線8条	
078	22	25	200－01	06－1区 SK13	中期末		胴部（ｉ類）	10YR8/2	2.5Y5/1	F3類	【胴部】蛇行沈線1条	
079	22	25	200－02	06－1区 SK13	中期末		胴部（ｉ類）	2.5Y6/1	10YR4/1	F2類	【胴部】垂下沈線2条、縄文(LR)	内面にも縄文を施文
080	22	25	203－01	06－1区 SK13	中期末		胴部（ｉ類）	2.5Y4/1	10YR4/2	B3類	【胴部】垂下沈線3条、縄文(LR?)	
081	22	25	202－12	06－1区 SK13	中期末		胴部（ｉ類）	10YR7/2	10YR6/2	F3類	【胴部】垂下沈線3条、縄文(LR)	
082	22	25	202－09	06－1区 SK13	中期末		胴部（ｉ類）	7.5YR6/3	10YR3/1	F1類	【胴部】垂下沈線3条、縄文(LR?)	
083	22	25	204－06	06－1区 SK13	中期末		胴部（ｉ類）	7.5YR6/4	5YR5/4	F1類	【胴部】蛇行沈線1条、垂下沈線1条、縄文(LR)	
084	22	25	242－01	06－1区 SK13	中期末		胴部（ii類）	10YR6/4	10YR6/3	F1類	【胴部】連弧状沈線2条	
085	22	25	201－03	06－1区 SK13	中期末		胴部（ii類）	10YR6/2	10YR7/3	F2類	【胴部】連弧状沈線2条、縄文(LR?)	
086	22	25	243－24	06－1区 遺構13	中期末		胴部（iii類）	10YR8/2	10YR8/2	F2類	【胴部】横走沈線1条	
087	22	25	202－02	06－1区 SK13	中期末		胴部（iii類）	2.5Y6/2	10YR6/2	B2類	【胴部】多重沈線(横走8条)、渦巻文	中心部は円文で、これを渦巻文が囲む。中期末以外の可能性もある。
088	22	25	243－22	06－1区 SK13	中期末	浅鉢 A2類	口縁部	2.5Y7/1	10YR7/3	F2類	【口縁部】区画文(羽状沈線充填)	波状口縁の可能性がある。
089	22		199－02	06－1区 SK13	中期末	浅鉢 A類?	口縁部	5YR6/6	7.5YR6/6	F2類	【口縁部】横走沈線1条	
090	22	25	201－02	06－1区 SK13	中期末	浅鉢 A類	屈曲部	10YR7/4	10YR7/3	F1類	【口縁部】横走沈線1条	
091	22	25	202－08	06－1区 SK13	中期末	浅鉢 A類	屈曲部	10YR8/2	2.5Y6/1	F2類	【口縁部】区画文、垂下短沈線3条、横走沈線1条	壺の可能性もある。
092	22	25	201－04	06－1区 SK13	中期末	浅鉢 B類	口縁部	10YR7/3	10YR8/2	F2類		波状口縁の可能性がある。中期末以外の可能性もある。
093	22	25	201－07	06－1区 SK13	中期末	浅鉢 C3類	口縁部	2.5Y7/1	10YR6/2	F2類	【口縁部】内面肥厚帯	
094	22	25	202－10	06－1区 SK13	中期末			10YR7/3	10YR7/3	F2類	粘土を貼り付けた跡?がみられる。	
095	22	25	200－05	06－1区 SK13	中期末			10YR7/4	10YR6/3	F2類	指頭圧痕	台付深鉢の台上部か?
096	22		202－06	06－1区 SK13	中期末		底部（平底）	10YR8/2	10YR6/2	F3類		
097	22		203－04	06－1区 SK13	中期末		底部（平底）	10YR8/4	10YR7/3	F2類		
098	22		203－05	06－1区 SK13	中期末		底部（平底）	10YR6/2	10YR7/2	F3類		

表３－５　縄文土器観察表(099～123)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調 内面	色調 外面	胎土類型	文様要素	備考
099	22		201－05	06－1区 SK13	中期末		底部(凹底)	2.5Y4/1	10YR8/2	F2類		
100	22		204－09	06－1区 SK13	中期末		底部(平底)	10YR8/2	2.5Y8/2	F2類		
101	22		241－01	06－1区 SK13	中期末		底部(平底)	10YR5/2	2.5Y6/2	F3類		
102	22		243－19	06－1区 SK13	中期末		底部(平底)	2.5Y6/1	10YR8/2	F3類		
103	22		243－21	06－1区 SK13	中期末		底部(平底)	2.5Y6/2	2.5Y7/2	F2類		
104	23	30	209－02	06－1区 SK14	中期末		胴部(ⅱ類)	2.5Y6/1	10YR8/2	F2類	【胴部】渦巻文	
105	23	30	209－03	06－1区 SK14	中期末	浅鉢 A1類?	口縁部	2.5Y4/1	2.5Y4/1	F2類	【口縁部】横走沈線4条	波状口縁か?、深鉢C3類の可能性もある。
106	23	30	209－01	06－1区 SK14	中期末?	浅鉢 E類	口縁部	10YR8/3	10YR7/3	F2類	【口縁部】横走沈線1(2?)条、縄文(RL?)	時期の下るものの混入か?
107	24	26	116－01	02－1,2区	中期末	深鉢 A1類	口縁部～胴部	7.5YR6/4	10YR6/2	F2類	【口縁部】区画文 【胴部】垂下沈線7条、縄文?	上端が屈曲する垂下沈線が1条
108	24	26	054－01	02－1,2区	中期末	深鉢 A1類e	口縁部	10YR8/3	10YR7/3	F2類	【口縁部】区画文(羽状沈線充填)	隆帯上に縄文(RL?)
109	24	26	047－01	02－1,2区	中期末	深鉢 A1類	口縁部	2.5Y4/1	2.5Y5/1	B2類	【口縁部】横走沈線2条、縄文(LR)	深鉢A6類の可能性もある。
110	24	26	052－01	02－1,2区	中期末	深鉢 A1類b	頸部	2.5Y8/1	10YR7/3	F2類	【口縁部】区画文?	隆帯と押引沈線?により区画文をつくる。
111	24		051－03	02－1,2区	中期末	深鉢 A1類	頸部	2.5Y8/1	2.5Y8/1	F2類	【口縁部】区画文 【胴部】横走沈線1条	
112	24		051－04	02－1,2区	中期末	深鉢 A1類	頸部	10YR4/1	10YR5/2	B2類	【口縁部】横走沈線2条	区画文の一部か?
113	24	26	051－06	02－1,2区	中期末	深鉢 A6類	口縁部～胴部	10YR6/2	2.5Y4/1	F2類	【口縁部】連弧状沈線3条、垂下沈線	端面、外面に縄文(LR?)を施している可能性もある。
114	24		051－07	02－1,2区	中期末	深鉢 A6類?	口縁部	2.5Y8/2	2.5Y8/1	B2類	【口縁部】横走沈線1条	
115	24	26	061－01	02－1,2区	中期末	深鉢 B1類	把手部	10YR7/3	10YR5/2	F2類	【把手部】斜行短沈線1条、縄文(RL?)	
116	24	26	009－01	02－1,2区	中期末	深鉢 A、B類	区画文部	2.5Y8/2	2.5Y6/2	F1類	【区画文部】羽状沈線充填	
117	24	26	044－07	02－1,2区	中期末	深鉢 A、B類	区画文部	10YR7/3	2.5Y8/2	F2類	【区画文部】区画内無文	隆帯のみで区画文を形成。深鉢B類の可能性がある。
118	24		008－01	02－1,2区	中期末	深鉢 A、B類	区画文部	2.5Y4/1	7.5YR7/4	F2類	【区画文部】短沈線充填	深鉢C類の可能性もある。
119	24	26	051－01	02－1,2区	中期末	深鉢 C2類	口縁部	10YR7/2	2.5Y5/1	F3類	【口端】沈線1条、縄文(LR?) 【口縁部】平行沈線2条、縄文	口端に施された沈線の上端は渦巻状を呈する。
120	24	26	044－02	02－1,2区	中期末	深鉢 C3類	口縁部	2.5Y8/2	2.5Y6/2	B2類	【口縁部】平行沈線2条	
121	24	26	069－01	02－1,2区	中期末	深鉢 C3類	口縁部	10YR8/3	2.5Y4/1	F3類	【口縁部】平行沈線2条	
122	24	26	051－02	02－1,2区	中期末	深鉢 C3類	口縁部	10YR7/3	10YR6/2	F2類	【口縁部】平行沈線1条、垂下沈線1条、縄文(LR?)	
123	24		054－05	02－1,2区	中期末	深鉢 C3類	口縁部	10YR8/2	2.5Y5/2	F2類	【口縁部】平行沈線1(2?)条	

表３－６　縄文土器観察表(124～148)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調 内面	色調 外面	胎土類型	文様要素	備考
124	24		061－02	02－1,2区	中期末	深鉢C3類	口縁部	10YR8/3	10YR7/2	F3類	【口縁部】平行沈線2(3?)条	口端に縄文を施文していた可能性もある。
125	24		042－03	02－1,2区	中期末	深鉢C3類	口縁部	10YR8/3	10YR8/2	F3類	【口縁部】平行沈線2条	
126	24	26	042－02	02－1,2区	中期末	深鉢C3類	口縁部	10YR8/3	10YR8/3	F2類	【口縁部】隆帯?	
127	24	26	261－01	02－1,2区	後期中葉?	深鉢F類	口縁部	2.5Y8/1	2.5Y8/1	F1類		
128	24		085－01	02－1,2区	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR7/4	10YR4/1	F2類	【胴部】縄文(RL?)	巻貝擬縄文の可能性もある。
129	24		084－01	02－1,2区	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y8/2	10YR6/2	F2類	【胴部】垂下沈線1条	
130	24		004－01	02－1,2区	中期末		胴部(ⅰ類)	7.5YR4/2	10YR6/3	F2類	【胴部】垂下沈線1条、縄文(LR)	
131	24	26	044－03	02－1,2区	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y5/2	10YR5/2	F2類	【胴部】垂下沈線1条、縄文(RL)	
132	24	26	044－04	02－1,2区	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR5/2	10YR4/2	F1類	【胴部】区画文(区画内無文)、垂下沈線3条、縄文(LR)	
133	24	26	099－02	02－1,2区	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR4/1	10YR4/1	F2類	【胴部】沈線(曲)2条	
134	24	26	051－05	02－1,2区	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR6/3	N2/0	F3類	【胴部】連弧状沈線5条、縄文(RL?)	
135	24	26	043－01	02－1,2区	中期末		胴部(ⅲ類)	2.5Y6/2	2.5Y6/1	F2類	【胴部】横走沈線2条、縄文(LR)	
136	24	26	013－01	02－1,2区	中期末		胴部(ⅲ類)	2.5Y8/2	2.5Y8/2	B3類	【胴部】円文、羽状沈線、多重沈線	中期末以外の可能性がある。
137	24	26	072－01	02－1,2区	中期末		胴部(ⅲ類)	2.5Y8/3	2.5Y8/2	B2類	【胴部】多重沈線	中期末以外の可能性がある。
138	24	26	047－02	02－1,2区	中期末	浅鉢B類	口縁部	7.5YR7/4	2.5Y6/3	F1類		
139	24		054－06	02－1,2区	中期末		底部(平底)	2.5Y5/1	10YR8/2	F3類		
140	24		052－05	02－1,2区	中期末		底部(平底)	2.5Y5/2	10YR6/3	B3類		
141	24		051－10	02－1,2区	中期末		底部(平底)	2.5Y5/1	2.5Y8/2	F3類		
142	24		145－01	02－1,2区	後期中葉?		底部(凹底)	N3/0	10YR8/3	F2類		
143	25		101－02	06－1区第6層	中期末	深鉢A1類g	頸部	10YR7/2	10YR5/2	F2類	【口縁部】蛇行隆帯	
144	25	27	094－01	06－1区第6層	中期末	深鉢A1類	頸部	10YR7/4	10YR7/3	F2類	【口縁部】縄文(LR?)	深鉢D2類の可能性もある。
145	25	27	101－01	06－1区第6層	中期末	深鉢A、B類	区画文部	10YR8/2	10YR7/2	F2類	【区画文部】短沈線充填 【胴部】横走沈線1条	
146	25		109－01	06－1区第6層	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y7/3	10YR5/2	F2類	【胴部】縄文(LR?)	
147	25		109－02	06－1区第6層	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y8/2	10YR6/2	F1類	【胴部】垂下沈線1条、縄文(原体不明)?	
148	25	27	111－11	06－1区第7層	中期末	深鉢A1類	口縁部	2.5Y5/1	10YR5/2	F2類	【口縁部】区画文(羽状沈線充填)、縄文(LR)	

表３－７　縄文土器観察表(149～173)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調 内面	色調 外面	胎土類型	文様要素	備考
149	25	27	127－01	06－1区第7層	中期末	深鉢A1類	口縁部～胴部	10YR6/2	10YR6/2	F2類	【口縁部】区画文(羽状沈線充填)、縄文(LR) 【胴部】垂下沈線2条	
150	25	27	111－10	06－1区第7層	中期末	深鉢A1類	口縁部～胴部	2.5Y5/1	10YR6/2	F3類	【口縁部】区画文(羽状沈線充填)	
151	25		011－01	06－1区第7層	中期末	深鉢A1類	頸部	2.5Y8/2	2.5Y8/2	F1類	【口縁部】区画文(垂下短沈線充填)	隆帯上に縄文(LR)
152	25	27	124－01	06－1区第7層	中期末	深鉢A1類	頸部	2.5Y4/1	10YR6/2	F2類	【口縁部】区画文? 【胴部】垂下沈線1条	隆帯上に縄文(LR)
153	25	27	111－05	06－1区第7層	中期末	深鉢A1類?	口縁部～胴部	10YR6/2	10YR7/2	F2類	【口縁部】弧状沈線	別器種として分類すべきか。
154	25	27	111－09	06－1区第7層	中期末	深鉢A6類	口縁部～胴部	10YR8/3	10YR7/3	F2類	【口縁部(～胴部)】縄文(LR)、蛇行沈線1条、垂下沈線1条	
155	25	27	116－01	06－1区第7層	中期末	深鉢C2類	口縁部	10YR8/2	5Y6/1	F3類	【口端】沈線1条 【口縁部】平行沈線1条	
156	25	27	111－04	06－1区第7層	中期末	深鉢C3類?	口縁部	10YR7/2	10YR4/1	F3類	【口縁部】平行沈線4条、沈線間縄文(LR?)	他器種の可能性もある。
157	25	27	121－02	06－1区第7層	中期末		胴部(ⅰ類)	2.5Y7/3	2.5Y7/2	F1類	【胴部】垂下沈線3条	
158	25	27	010－01	06－1区第7層	中期末		胴部(ⅰ類)	7.5YR6/4	7.5YR6/3	E3類	【胴部】蛇行沈線1条、垂下沈線4条、区画文	垂下沈線は2条1単位
159	25	27	127－03	06－1区第7層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR8/2	10YR7/3	F3類	【胴部】垂下沈線1条、縄文(LR?)	
160	25	27	111－18	06－1区第7層	中期末		胴部(ⅰ類)	10YR8/3	10YR7/3	F3類	【胴部】垂下沈線1条、縄文(LR?)	
161	25	27	013－01	06－1区第7層	中期末		胴部(ⅱ類)	2.5Y6/1	2.5Y6/2	F2類	【胴部】渦巻文、平行沈線2条?	深鉢C類の可能性がある。
162	25	27	122－01	06－1区第7層	中期末		胴部(ⅱ類)	2.5Y6/1	2.5Y5/1	B3類	【胴部】連弧状沈線3条	
163	25	27	127－02	06－1区第7層	中期末		胴部(ⅱ類)	10YR4/1	2.5Y5/1	F2類	【胴部】連弧状沈線5条	
164	25	27	111－07	06－1区第7層	中期末		胴部(ⅱ類)	N2/0	5Y6/1	F3類	【胴部】連弧状沈線5条	
165	25	27	123－01	06－1区第7層	中期末		胴部(ⅲ類)	2.5Y7/2	2.5Y6/1	F2類	【胴部】横走沈線4条	
166	25	27	111－19	06－1区第7層	中期末		胴部(ⅲ類)	10YR8/2	10YR8/2	F2類		擦痕がみられる。
167	25	27	111－20	06－1区第7層	中期末	浅鉢A類	口縁部	2.5Y8/2	2.5Y8/2	F2類	【口縁部】刺突列、横走沈線1条	
168	25	27	134－01	06－1区第7層	中期末	浅鉢A類	口縁部	2.5Y7/2	2.5Y8/2	F2類	【口縁部】横走沈線1条、縄文(LR)	
169	25	27	111－08	06－1区第7層	中期末	浅鉢A類	口縁部～体部	2.5Y7/2	10YR8/2	F2類	【口端】縄文(LR) 【口縁部～(体部)】横走沈線3条、渦巻文?	椀形になる可能性もある。
170	25	27	111－01	06－1区第7層	中期末		頸部	10YR7/2	10YR7/3	F2類	【胴部】沈線(曲)2条	隆帯上に縄文(LR)。壺の可能性もある。
171	25	27	113－01	06－1区第7層	中期末		底部(平底)	10YR6/2	2.5Y6/2	F2類	【側面】横走沈線1条	
172	26	28	008－02	06－1区第8層	中期末	深鉢A1類b	口縁部	2.5Y7/2	10YR6/2	F2類	【口縁部】区画文(渦巻区画文、刺突充填)	
173	26	28	008－08	06－1区第8層	中期末	深鉢A1類	頸部	7.5YR7/3	7.5YR6/4	F2類		

表３－８　縄文土器観察表(174～198)

番号	挿図番号	写真図版	整理番号	出土地点	時期	器種	残存部位	色調 内面	色調 外面	胎土類型	文様要素	備考
174	26	28	192－01	06－1区第8層	中期末	深鉢A1類	頸部	10YR4/1	10YR5/1	F2類	【胴部】垂下沈線2条	上端が屈曲する垂下沈線が1条
175	26	28	007－01	06－1区第8層	中期末	深鉢A6類	口縁部	10YR8/2	10YR8/2	F2類	【口縁部】横走沈線1条	
176	26	28	177－01	06－1区第8層	中期末	深鉢A6類	口縁部	10YR8/2	10YR8/2	F2類	【口縁部】横走沈線2条、縄文(LR?)	
177	26	28	180－01	06－1区第8層	中期末	深鉢C2類	口縁部	10YR8/2	N4/0	F2類	【口端】沈線1条、【口縁部】平行沈線5条、沈線(曲)1条	
178	26	28	008－07	06－1区第8層	中期末	深鉢C2類	口縁部	10YR8/3	10YR7/3	F3類	【口端】沈線1条【口縁部】垂下沈線3条、刺突列2条、縄文帯(LR)	
179	26	28	190－03	06－1区第8層	中期末	深鉢C3類	口縁部	10YR8/3	2.5Y8/2	F3類	【口縁部】平行沈線2条	
180	26	28	180－03	06－1区第8層	中期末	深鉢C3類	口縁部	2.5Y7/3	10YR4/2	F2類	【口縁部】平行沈線3条	
181	26	28	003－01	06－1区第8層	中期末	深鉢C類	胴部	7.5YR5/3	10YR7/4	F1類	【胴部】平行沈線3条?	
182	26	28	190－09	06－1区第8層	中期末	深鉢D1類	口縁部～胴部	10YR4/1	10YR4/1	F2類	【口縁部～胴部】縄文(RL)	
183	26	28	181－01	06－1区第8層	中期末		胴部(ｉ類)	7.5YR6/4	10YR5/2	F2類	【胴部】縄文(LR)	
184	26	28	175－01	06－1区第8層	中期末		胴部(ｉ類)	7.5YR6/3	7.5YR5/3	F2類	【胴部】縄文(LR)	
185	26	28	190－05	06－1区第8層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR7/3	7.5YR6/4	F2類	【胴部】縄文(LR)	
186	26	28	182－01	06－1区第8層	中期末		胴部(ｉ類)	2.5Y6/2	10YR7/4	F2類	【胴部】縄文(LR?)	
187	26	28	154－01	06－1区第8層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR7/3	N2/0	F2類	【胴部】縄文(LR)	
188	26	28	190－11	06－1区第8層	中期末		胴部(ｉ類)	2.5Y8/1	2.5Y5/1	F1類	【胴部】縄文(RL?)	
189	26	28	180－06	06－1区第8層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR3/2	10YR4/1	F1類	【胴部】垂下沈線1条	
190	26	28	193－02	06－1区第8層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR3/1	10YR6/2	F2類	【胴部】垂下沈線1条	
191	26	28	008－04	06－1区第8層	中期末		胴部(ｉ類)	7.5YR6/4	10YR5/2	F1類	【胴部】垂下沈線1条	
192	26	28	190－10	06－1区第8層	中期末		胴部(ｉ類)	2.5Y6/3	10YR7/2	F2類	【胴部】垂下沈線1条	
193	26	28	008－03	06－1区第8層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR7/3	10YR6/3	F3類	【胴部】垂下沈線1条	
194	26	28	005－04	06－1区第8層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR8/3	10YR7/3	F1類	【胴部】垂下沈線1条	
195	26	28	008－06	06－1区第8層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR8/2	2.5Y6/1	F3類	【胴部】垂下沈線1条	
196	26	28	180－02	06－1区第8層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR8/3	10YR6/1	F2類	【胴部】垂下沈線1条	
197	26	28	190－02	06－1区第8層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR4/1	2.5Y4/1	F2類	【胴部】垂下沈線2条	
198	26	28	008－05	06－1区第8層	中期末		胴部(ｉ類)	10YR3/2	10YR3/2	F1類	【胴部】蛇行沈線1条	